

# 枕草子

清少納言

「一段」

春は曙、やう／＼白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜、月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをか。

秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをか。日入りはてて、風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。

冬は雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒き火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

「二段」

ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十一月、すべてをりにつつ。一年ながらをかし。

正月。一日は、まいて空の景色うら／＼と珍しく、かすみこめたるに、世にありとある人は、姿容心ことにつくさひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさま、殊にをか。

七日は、雪問の若菜青やかに摘み出でつつ、例はさしもさる物目近からぬ所にもてさわぎ、白馬見んとて、里人は車きよげにしたてて見にゆく。中の御門の鬨

ひき入るるほど、頭ども一處にまろびあひて、指櫛も落ち、用意せねば折れなどして、笑ふもまたをか。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなるとして、舎人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、僅に見入れたれば、立部などの見ゆるに、主殿司、女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人九重をかく立ち馴すらんなど思ひやらるる中にも、見るはいと狭きほどにて、舎人が顔のきぬもあらはれ、白きもののゆきつかぬ所は、誠に黒き庭に雪のむら消えたる心地して、いと見ぐるし。馬のあがり騒ぎたるも恐しく覺ゆれば、引き入られてよくも見やられず。

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、つねよりはことに聞えてをか。十五日は、もちかゆの節供まゐる。かゆの木ひき隠して、家の御達、女房などのうかがふを、うたれじと用意して、常に後を心づかひしたる景色もをかしき、いかにしてけるにかあらん、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるもいと榮々し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年より新しう通ふ壻の君などの、内裏へ参るほどを、心もとなく、所につけて我はと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたたずまふを、前にぬたる人は心得て笑ふを、「あなかま／＼」と招きかくれど、君見知らず顔にて、おほどかに居給へり。「ここのなる物とり侍らん」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず愛敬づきて笑みたる、ことに驚かず、顔少し赤みてゐたるもをか。また互に打ちて、男などをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、泣きはらだち、打ちつる人を呪ひ、まが／＼しくいふもをか。内裏わたりなど、やんことなきも、今日はみな亂れて、かしこまりなし。

除目のほどなど、内裏わたりはいとをか。雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく。四位五位、わかやかに心地よげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白きなどが、人にとかく案内いひ、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて説き聞するを、若き人々は眞似をし笑へど、いかでか知らん。「よきに奏し給へ、啓し給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそ、いとあはれなれ。

三月。三日、うら／＼とのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、いとをかしきこそ更なれ。それもまだ、まゆにこもりたるこそをかしけれ。廣くりたるはにくし。花も散りたる後はうたてぞ見ゆる。

おもしろく咲きたる櫻を長く折りて、大なる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻

の直衣に、出袷して、客人にもあれ、御兄の公達にもあれ、そこ近くゐて物などうちひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつきいと美しうて飛びありく、いとをかし。

四月。祭のころはいみじうをかし。木々のこの葉、まだ繁つはなうて、わかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空の景色の、何となくそぞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、夜など、忍びたる杜鵑の、遠うそら耳かど覺ゆるまで、たどくしきを聞きつけたらん、何こちかはせん。

祭近くなりて、青朽葉、二藍などのものどもおしまきつつ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもて歩くこそをかしけれ。末濃、村濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。童女の頭ばかり洗ひつくろひて、形は皆痿えほころび、打ち亂れかかりたるもあるが、履子、沓などの緒すげさせ、裏をさせなどもて騒ぎ、いつしかその日にならんと、急ぎ走り歩くもをかし。

怪しう踊りて歩く者どもの、さうぞきたてつれば、いみじく、ちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほどくにつけて、親をばの女、姉などの供して、つくろひ歩くもをかし。蔵人思ひしめたる人の、ふとしもえならぬが、その日あを色きたるこそ、やがてめがせでもあらばやと覺ゆれ。綾ならぬはわるき。

### 「三段」

おなじことなれども聞耳ことなるもの。法師の詞。男女の詞。下司の詞にはかならず文字あまりしたり。たらぬこそをかしけれ。

### 「四段」

おもはん子を法師になしたらんこそは、いと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、唯木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。精進物のあしきを食べ、寐ぬるをも、若きは物もゆかしからん。女などのある所をも、などが忌みたるやうに、さしのぞかずもあらん。それをも安からずいふ。まして驗者などのかたは、いと苦しげなり。御獄、熊野、かからぬ山なく歩くほどに、恐

しき目も見、驗あるきこえ出できぬれば、「ここかしこによばれ、時めくにつけて安げもなし。いたく煩ふ人にかかりて、物怪てつずるも、いと苦しければ、困じてうち眠れば、「ねぶりなどのみして」と咎むるも、いと所狭く、いかに思はんと。これは昔のことなり。今様はやすげなり。

### 「五段」

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋の居ねば入りなやと思ひて、髪つきわるき人も、いたくもつくろはず、寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道しきておるに、いとにくく腹だたしけれども、いかがはせん。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。

御前に参りて、ありつるやう啓すれば、「ここにも人は見るまじくやは。などかはさしもうち解けつる」と笑はせ給ふ。「されど、それは皆めなれて侍れば、よくしたて侍らんにしこそ驚く人も侍らぬ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えば笑はん」などいふ程にしも、「これまぬらん」とて、御硯などさしいる。「いで、いとわろくこそおはしけれ。などてかその門狭く造りて、住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて、「家のほど身のほどに合せて侍るなり」と答ふ。「されと門の限を、高く造りける人も聞ゆるは」といへば、「あなおそろし」と驚きて、「それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らざれば、承り知るべくも侍らざりけり。たま〜この道にまかり入りければ、かうだに辨へられ侍る」といふ。「その御道もかしこからざめり。筵道敷きたれば、皆おち入りて騒ぎつるは」といへば、「雨の降り侍れば、實にさも侍らん。よし〜、また仰せかくべき事も侍る、罷り立ち侍らん」といぬ。「何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは」と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつることいひ侍る」と申しておりぬ。同じ局に住む若き人々などして、萬の事も知らず、ねぶたければ皆寝ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、かけがねもなかりけるを、それも尋ねず。家主なれば、案内をよく知りてあけてけり。あやしう洵ればみたるものの聲にて、「侍はんにはいかが」と數多たびいふ聲に、驚きて見れば、儿帳の後に立てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更

にかやうのすきくしきわざ、ゆめにせぬものの、家におはしましたりとて、無下に心にまかするなゆめりと思ふもいとをかし。わが傍なる人を起して、「かれ見給へ、かかる見えぬものあゆめるを」といへば、頭をもたげて見やりて、いみじう笑ふ。「あれは誰ぞ、顯證に」といへば、「あらず、家主、局主人と定め申すべき事の侍るなり」といへば、「門の事をこそ申しつれ、障子開け給へとやはいふ」「なほその事申し侍らん、そこに侍はんはいかに」といへば、「いと見苦しきこと、更にあおはせじ」とて笑ふれば、「若き人々おはしけり」とて、ひきたてていぬる、後に笑ふこといみじ。あけぬとならば、唯まつ入りねかし。消息するに、よかんなりとは誰かはいはんと、げにをかしきに、つとめて、御前に参りて啓すれば、「さる事も聞えざりつるを、昨夜のことに愛でて、入りにたりけるなゆめり。あはれ彼をはしたなく言ひけんこそ、いとほしけれ」と笑はせ給ふ。

姫宮の御かたの童女に、装束せさせよと仰せらるるに、「わらはの袖の上襲は何色に仕う奉るべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮の御前のものは例のやうにては悪氣に候はん。ちうせい折敷、ちうせい高林にてこそよく候はめ」と申すを、「さてこそは、上襲著たる童女もまゆりよからめ」といふを、「猶例の人のやうに、かかないひ笑ひそ、いときすくなるものを、いとほしげに」と制したまふもをかし。中間なるをりに、「大進ものきこえんとあり」と、人の告ぐるを聞き召して、「又なでふこといひて笑はれんとならん」と仰せらるるもいとをかし。「行きて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば、「一夜の門のことを中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、いかでさるべからんをりに對面して、申しつけたまはらんとなん申されつる」とて、またことまなし。一夜のことやいはんと、心ときめきつれば、「今しつかに御局にさぶらはん」と辭していぬれば、歸り参りたるに、「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事を、さなんとまねび啓して、「わざと消息し、呼び出つべきことにもあらぬを、おのつからしつかに局などにあらんにもいへかし」とて笑へば、「おのが心地に賢しとおもふ人の譽めたるを、嬉しと思ふとて、告げ知らするならん」とのたまはする御氣色もいとめでたし。

「六段」

うへに侍ふ御猫は、かつぶり給はりて、命婦のおもととて、いとをかしければ、籠かせ給ふが、端に出でたるを、乳母の馬の命婦「あなまさなや、入り給へ」とよぶに、聞かで、日のさしあたりたるにうち眠りてゐたるを、おどすとて、「翁丸いづら、命婦のおもと食へ」といふに、まことかとして、しれもの走りかかりたれば、おびえ惑ひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間にうへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御懷に入れさせ給ひて、男ども召せば、藏人忠隆まゐりたるに、「この翁丸打ち調じて、犬鳥につかはせ。只今」と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、「乳母かへてん、いとうしろめたし」と仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。

「あはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを。三月三日に、頭の辨柳のかづらをさせ、桃の花かざしにさせ、櫻腰にさせなどして、ありかせ給ひしをり、かかる目見んとは思ひかけけんや」とあはれがる。「御膳のをりは、必むかひさぶらぶに、さうくしくこそあれ」などいひて、三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにその犬の、かく久しくなくにかあらんと聞くに、よろづの犬ども走り騒ぎとぶらひに行く。

御廁人なるもの走り来て、「あないみじ、犬を藏人二人して打ちたまひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸りまゐりたるとて、調じ給ふ」といふ。心うのことや。翁丸なり。「忠隆實房なん打つ」といへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。「死にければ門の外にひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わななきありけば、「翁丸か、かかる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、翁丸と呼べど耳にも聞き入れず。それぞといひ、あらずといひ、口々申せば、「右近ぞ見知りたる、呼べ」とて、下なるを、「まじとみのこと」とて召せば参りたり。「これは翁丸か」と見せ給ふに、「似て侍れども、これはゆゆしげにこそ侍るめれ。また翁丸と呼べば、悦びてまうで来るものを、呼べど寄りこそ、あらぬなゆめり。それは打ち殺して、棄て侍りぬとこそ申しつれ。さるものども二人して打たんには、生きなんや」と申せば、心づがらせ給ふ。

暗つなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる。つとめて、御梳櫛にまゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽すれば、侍ふに、犬の柱のもとにいつい居たるを、「あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな。死にけんこ

そ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらん。いかにわびしき心地しけん」とうちいふほどに、この寝たる犬ふるひわななきて、涙をただ落しにおとす。いとあさまし。さはこれ翁丸にこそありけれ。よんへは隠れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきことがぎりなし。御鏡をもうちおきて、「さは翁丸」といふに、ひれ伏していみじくなく。御前にもうち笑はせ給ふ。人々まゐり集りて、右近内侍召して、かくななど仰せらるれば、笑ひのしるを、うへにも聞き召して、渡らせおはしまして、「あさましう犬などもかかる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども来りまゐり集りて呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顔など腫れたんめり。「物調せさせばや」といへば、「終にいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて、臺盤所のかたより、「まことにや侍らん、かれ見侍らん」といひたれば、「あなゆゆし、さる者なし」といはすれば、「さりと最終に見つくる折もはべらん、さのみもえかくさせ給はじ」といふなり。さて後畏勤事許されて、もとのやうになりにき。猶あはれがられて、ふるひなき出でたりし程こそ、世に知らずをかしくあはれなりしか。人々にもいはれて泣きなどす。

「七段」

正月一日、三月三日は、いとつらかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕がたは晴れたる空に月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、暁がたより雨少し降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめては止みにたれど、なほ曇りて、ややもすれば、降り落ちぬべく見えたるもをかし。

「八段」

よろこび奏するこそをかしけれ。後をまかせて、笏とりて、御前の方に向ひてたてるを。排し舞踏し、さわぐよ。

「九段」

今内裏の東をば、北の陣とぞいふ。櫓の木の逢にたかきが立てるを、常に見て、幾尋かあらん」などいふに、「權中將の、」もとより打ちきりて、定證僧都の枝扇にさせせばや」とのたまひしを、山階寺の別當になりて、よろこび申すの日、近衛府にて、この君の出で給へるに、高き履子をさへはきたれば、ゆゆしく高し。出でぬる後こそ、「などその枝扇はもたせ給はぬ」といへば、「ものわすれせず」と笑ひ給ふ。

「十段」

山は 小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。いりたち山。鹿背山。ひはの山。かたさり山こそ、誰に所おきけるにかと、をかしけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。ひらの山。鳥籠の山は、わが名もらすなど、みかどのよませ給ひけん、いとをかし。伊吹山。朝倉山、よそに見るらんとをかしき。岩田山。大比禮山もをかし。臨時の祭の使などおもひ出でらるべし。手向山。三輪の山、いとをかし。首羽山。待兼山。玉坂山。耳無山。末の松山。葛城山。美濃の御山。柞山。吉備の中山。嵐山。更級山。姨捨山。小鹽山。淺間山。かたため山。かへる山。妹背山。

「十一段」

市は 辰の市。椿市は、大和に數多ある中に、長谷寺にまうづる人の、かならずそこにとどまりければ、觀音の御縁あるにやと、心ことなるなり。おふさの市。飴摩の市。飛鳥の市。

「十二段」

峯は ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。

「十三段」

原は 竹原。麩の原。朝の原。その原。萩原。粟津原。奈志原。うなぬしが原。

安倍の原。篠原。

「 十四段 」

淵は かしこ淵、いかなる底の心を見えて、さる名をつけけん、いとをかし。ないりその淵、誰にいかなる人の教へしならん。青色の淵こそまたをかしけれ。藏人などの身にしつべくて。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

「 十五段 」

海は 水うみ。與謝の海。かはぐちの海。伊勢の海。

「 十六段 」

山陵は うぐひすの陵。柏原の陵。あめの陵。

「 十七段 」

わたりは しかすがの渡。みつはしの渡。こりずまの渡。

「 十八段 」

たちは たまつくり。

「 十九段 」

家は 近衛の御門。二條。一條もよし。染殿の宮。清和院。菅原の院。冷泉院。朱雀院。とうあひ。小野宮。紅梅。縣の井戸。東三條。小六條。小一條。

「 二十段 」

清涼殿のうしとらの隅の北のへだてなる御障子には、荒海の繪、生きたるものどものおそろしげなる、手長足長をぞ書かれたる。うへの御局の戸、押しあけたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、高欄のもとに、青き瓶の大なる据ゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄のもとまでこぼれ咲きたるに、ひるかつた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出して参り給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷に居給ひて、ものなど奏し給ふ。

御簾のうちに、女房櫻の唐衣どもくつろかにぬぎ垂れつつ、藤山吹などいろくこのもしく、あまた小半節の御簾より押し出でたるほど、書御座のかたに御膳まるる。足音高し。けはひなど、をしくといふ聲聞ゆ。うらくとのどかなる日の景色いとをかしきに、終の御飯もたる藏人参りて、御膳奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。

御供に大納言参らせ給ひて、ありつる花のもとに歸り居給へり。宮の御前の御儿帳押しやりて、長押のもとに出でさせ給へるなど、唯何事もなく萬にめでたきを、さぶらふ人も、思ふことなき心地するに、月も日もかはりゆけどもひさにふるみ室の山といふ故事を、ゆるるかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。げにぞ千歳もあらまほしげなる御ありさまなるや。

陪膳つかうまつる人の、男どもなど召すほどもなくわたらせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるるに、目はそらにのみにて、唯おはしますをのみ見奉れば、ほど遠き目も放ちつべし。白き色紙おしたたみて、「これに只今覺えん故事、一つづつ書け」と仰せらるる。外に居給へるに、「これはいかに」と申せば、「疾く書きて参らせ給へ、男はことくは侍ぶべきにもあらず」とて、御硯とりおろして、「とくく」ただ思ひめぐらさず、難波津も何もふと覺えん事を「と責めさせ給ふに、などさは臆せしにか、すべて面さへ赤みてぞ思ひみだるるや。春の歌、花の心など、さいふくも、上臈二つ三つ書きて、これにとめるに、

年経れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし

といふことを、君をし見ればと書きなしたるを御覽じて、「唯このころばへ

どもの、ゆかしかりつるぞ」と仰せらる。ついでに、「圓融院の御時、御前にて、草紙に歌一つ書けと、殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくく、すまひ申す人々ありける。更に手の悪しと善さ、歌の折にあはざらんをも知らじと仰せられければ、わびて監書きける中に、ただいまの關白殿の、三位の中將と聞えけるとき、

しほのみついつもの浦のいつもく君をばふかくおもふはやわが

といふ歌の末を、たのむはやわがと書き給へりけるをなん、いまじくめでさせ給ひける」と仰せらるるも、すすろに汗あゆる心地ぞしける。若からん人は、さもえ書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例いとよく書く人も、あひなく皆つつまれて、書きけがしなどしたるもあり。

古今の草紙を御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、「これが末はいかに」と仰せらるるに、すべて夜晝心にかかりて、おぼゆるもあり。げによく覺えず、申し出でられぬことは、いかなることぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それもおぼゆるかは、まいて五つ六つなどは、ただ覺えぬよしをぞ啓すべけれど、「さやはけ悪く、仰事をはえなくもてなすべき」といひ口をしがるもをかし。知ると申す人なきをば、やがて詠みつづけさせ給ふを、さてこれは皆知りたる事ぞかし。「などかく拙くはあるぞ」といひ歎く中にも、古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬべきことぞかし。

「村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましければ、誰かは知り聞えざらん。まだ姫君におはしける時、父大臣の教へ聞えさせ給ひけるは、一つには御手を習ひ給へ、次にはきんの御琴を、いかで人にひきまさらんとおぼせ、さて古今の歌二十巻を、皆つかばさせ給はんを、御學問にはさせたまへとなん聞えさせ給ひけると、きこしめしおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今をかくして、持てわたらせ給ひて、例ならず御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおほしけるに、御草紙をひろげさせたまひて、その年の月、何のをり、その人の詠みたる歌はいかにと、問ひきこえさせたまふに、かつなりと心得させたまふもをかしきものの、ひがおぼえもし、わすれたるなどもあらば、いみじかるべき事と、わりなく思し亂れぬべし。そのかたおぼめかしからぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して數を置かせ給はんとて、聞えさせ給ひけんほど、いかにめでたくをかしかりけん。御前に侍ひけん人さへこそ羨し

けれ。せめて申させ給ひければ、賢しうやがて末までなどにはあらねど、すべてつゆ違ふ事なかりけり。いかでなほ少しおぼめかし、僻事見つけてを止まんと、ねたきまで思しける。十巻にもなりぬ。更に不用なりけりとて、御草紙に夾算して、みとのこもりぬるもいとめでたしかし。いと久しうありて起きさせ給へるに、なほこの事左右なくて止まん、いとわるかるべしとて、下の十巻を、明日にもならば他をもぞ見給ひ合するとて、今宵定めんと、おほとなぶら近くまゐりて、夜更くるまでなんよませ給ひける。されど終に負け聞えさせ給はずなりにけり。うへ渡らせ給ひて後、かかる事なんと、人々殿に申し奉りければ、いみじう思し騒ぎて、御誦經など數多させ給ひて、そなたに向ひてなん念じ暮させ給ひけるも、すきくしくあはれなる事なり」など語り出させ給ふ。うへも聞しめして、めでさせ給ひ、「いかでさ多くよませ給ひけん、われは三卷四卷だにもえよみはてじ」と仰せらる。「昔はえせもも皆數寄をかしうこそありけれ。このごろかやうなる事は聞ゆる」など、御前に侍ふ人々、うへの女房のこなたゆるされたるなど参りて、口々いひ出でなどしたる程は、誠に思ふ事なくこそ覺ゆれ。

## 「二一段」

おひさきなく、まめやかに、えせさいはひなど見てゐたらん人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶さりぬべからん人の女などは、さしまじらはせ、世の中の有様も見せならはさまほしう、内侍などにても暫時あらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をは、あはくしうわるきことに思ひぬたる男こそ、いとにくけれ。げにそもまたさる事ぞかし。かけまくも畏き御前を始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人は少くこそはあらめ。女房の従者ども、その里より来るものども、長女、御厠人、たびしかはらといふまで、いつかはそれを耻ぢかくれたりし。殿ばらなどは、いとさしもあらずやあらん。

それもある限は、さぞあらん。うへなどいひてかじづきすゑたるに、心にくからず覺えん理なれど、内侍のすけなどいひて、をりく内裏へ参り、祭の使などに出でたるも、おもだたしからずやはある。さて籠りぬたる人はいとよし。受領の五節など出すをり、さりともしたうひなび、見知らぬ他人に問ひ聞きなどはせじと、心にききものなり。

「一二段」

すさまじきもの 書ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。嬰兒のなくな  
りたる産屋。火おこさぬ火桶、すびつ。牛にくみたる牛飼。博士のうちつづきに  
女子うませたる。方違にゆきたるにあるじせぬ所。まして節分はすさまじ。

人の國よりおこせたる文の物なき。京のをまこそは思ふらめども、されどそ  
れはゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許にわざと清け  
に書きたててやりつる文の、返事見ん、今は來ぬらんかしとあやしく遅きと待つ  
ほどに、ありつる文の結びたるもたて文も、いときたなげに持ちなしふくだめて、  
うへにひきたりつる墨さへ消えたるをおこせたりけり。「おはしまさざりけり」と  
も、もして「物忌とて取り入れず」などいひてもて歸りたる、いとわびしくすさ  
まじ。

またかならず來べき人の許に、車をやりて待つに、入り來る音すれば、さなな  
りと人々出でて見るに、車やごりに入りて、轅ほつとうち下すを、「いかなるぞ」と  
問へば、「今日はおはします、渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でていぬる。

また家動りてとりたる壻の來すなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕す  
る許やりて、いつしかと思ふも、いと本意なし。兒の乳母の唯あからさまとて往  
ぬるを、もとむれば、とかくあそはし慰めて、「疾く來」といひ遣りたるに、「今宵  
はえ參るまじ」とて返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりの  
し。女などむかふる男、ましていかならん。待つ人ある所に、夜少し更けて、し  
のびやかに門を叩けば、胸少し潰れて、人出して問はするに、あらぬよしなきも  
のののりしてきたるこそ、すさまじといふ中にも、かへすがへすすさまじけれ。  
驗者の物怪調すとて、いみじうしたりがほに、獨鈷や珠數などもたせて、せみ聲  
にしほり出し讀み居たれど、いささか退氣もなく、護法もつかねば、集めて念じ  
るたるに、男も女も怪しと思ふに、時のかはるまで讀みこつて、「更につかず、  
たちね」とて珠數とりかへして、あれと「驗なしや」とうちいひて、額より上ぞ  
まに頭さぐりあげて、あくびを口うちして、よりふしぬる。

除目に官得ぬ人の家、今年はかならずと聞きて、はやつありし者どもの、外々な  
りつる、片田舎に住む者どもなど、皆集り來て、出で入る車の轅もひまなく見え、  
物まつする供にも、われもくと參り仕つまつり、物食ひ酒飲み、ののしりあ  
へるに、はつる曉まで門叩く音もせず。「怪し」など耳立てて聞けば、さきおふ聲

して上達部など皆出で給ふ。ものききに、宵より寒がりわななき居りつるげす男  
など、いと物つげに歩み來るを、をるものどもは、とひだにもえ問はず。外より  
きたる者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。答には、「何の前司  
にこそは」と、必いらふる。まことに頼みける者は、いみじう歎かしと思ひたり。  
翌朝になりて、隙なくをりつる者も、やうくと一人二人づつすべり出でぬ。ふる  
きものの、さもえ行き離るまじきは、來年の國々を手を折りて數へなどして、ゆ  
るぎ歩きたるも、いみじういとほしう、すさまじげなり。

よろしう詠みたりと思ふ歌を、人の許に遣りたるに返しせぬ。懸想文はいかが  
せん、それだにをりをかしうなどある返事せぬは、心おとりす。又さわがしう時め  
かしき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれくと暇あるままに、昔覺えて、  
ことなる事なき歌よみして遣せたる。物のをりの扇、いみじと思ひて、心ありと  
知りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪など書きてえたる。

産養、馬錢などの使に、祿などとらせぬ。はかなき藥玉、卵槌などもてありく  
者などにも、なほ必とらすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いと興ありと思  
ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきして來るに、ただなるは、誠にすさ  
まじきぞかし。

壻とりて、四五年までうぶやのさわぎせぬ所。おとななる子どもあまた、よう  
せずば、孫などもはひありきぬべき人の親どちの晝寢したる。傍なる子ども心の  
地にも、親のひるねしたるは、よりどころなくすさまじくぞあるべき。寢起きて  
あぶる湯は、腹だたしくさへこそ覺ゆれ。

十二月の晦日のなが雨、一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからん。八月のし  
らがさね。乳あへずなりぬる乳母。

「一二段」

たゆまるるもの 精進の日のおこなひ。日遠きいそぎ。寺に久しくこもりたる。

「一四段」

人にあなつらるるもの 家の北おもて。あまり心よしと人に知られたる人。年

老いたるおきな。又あはくしき女。築土のくつね。

「二五段」

にくきもの 急ぐ事あるをりに長言する客人。あなづらはしき人ならば、「後に」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りにすられたる。また墨の中に石こもりて、きしくときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで、外にある、尋ねありくほどに、待遠にひさしきを、辛うじて待ちつけて、悦びながら加持せさするに、このごる物怪に困じにけるにや、あるままに即ねぶり聲になりたる、いとにくし。何でふことなき人の、すずろにえがちに物いたういひたる。火桶すびつなどに、手のうらうちかへし、皸おしのべなどしてあぶりをるもの。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老ばみうたであるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふままに、おしすりなどもするらめ。さやうのものは、人のもとに來てゐんとする所を、まづ扇して塵拂ひすてて、ぬも定まらずひろめきて、狩衣の前、下ぎまにまくり入れてもゐるか。かかることは、いひがひなきものの際にやと思へど、少しよろしき者の式部大夫、駿河前司などいひしがさせしなり。また酒飲みて、赤き口を探り、髯あるものはそれを撫でて、盃人に取らするほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ。また「飲め」などいふなるべし、身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへひきたれて、「わらはへのこうどのに参りて」など、謠ふやふにする。それはしも誠によき人のさし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば怨じそしり、又わづかに聞きたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かんと思ふほどに泣く兒。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。忍びて來る人見りて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に、隠し伏せたる人の、駢したる。又密に忍びてくる所に、長烏帽子して、さすがに人に見えじと惑ひ出づるほどに、物につききはりて、そよるといはせたる、いみじうにくし。伊豫簾など懸けたるをうちかつぎて、さらくとならしたるも、いとにくし。帽額の簾はましてこはき物のうちおかる、いとしくし。それもやをら引きあげて出入するは、更に鳴らず。又遣戸など荒くあくるも、いとにくし。少しも

たぐるやうにて開くるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。

ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になりて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。

きしめく車に乗りて歩くもの、耳も聞かぬにやあらんと、いとにくし。わが乗りたるは、その車のぬしさへにくし。物語などするに、さし出でてわれひとり才まぐるもの。すべてさし出は、童も大人もいとにくし。昔物語などするに、われ知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りありく、いとにくし。

あからさまにきたる子ども童をらうたがりて、をかき物など取らするに、ならひて、常に来て居入りて、調度やうち散らしぬる、にくし。

家にも宮仕所にも、逢はでありなんと思ふ人の來るに、虚寐をしたるを、わが許にあるものどもの起しによりきては、いぎたなしと思ひ顔に、ひきゆるがしたるいとにくし。新參のさしこえて、物しり顔ををしへやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。

わが知る人にてあるほど、はやう見し女の事、響めいひ出しなども、過ぎてほど經にけれど、なほにくし、ましてさしあたりたらんこそ思ひやられ。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。

はなひて誦文する人。大かた家の男しうならでは、高くはなひたるもの、いとにくし。

蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにするも、また犬のもろ聲に長々となきあげたる。まがくしくにくし。

「二六段」

心ときめきするもの 雀のこがひ。兒あそばす所の前わたりたる。よき薫物たきて一人臥したる。唐鏡の少しくらき見たる。よき男の車とどめて物いひ案内せさせたる。頭洗ひ化粧じて、香にしみたる衣著たる。殊に見る人なき所にて、心のうちはなほをかし。待つ人などある夜、雨の脚、風の吹きゆるがすも、ふとぞおどろかる。



「二七段」

すぎにしかたのこひしきもの 枯れたる葵。難めそびの調度。一藍、葡萄染などのさいでの、おしへされて、草紙の中にありけるを見つけたる。また折からあはれなりし人の文、雨などの降りて徒然なる日さがし出でたる。去年のかはばり。月のあかき夜。

「二八段」

こころゆくもの よくかいたる女繪の詞をかしうつつけておほかる。物見のかへさに乗りこぼれて、男どもいと多く、牛よくやるものの車走らせたる。白く清げなる檀紙に、いとほそつ書くべくはあらぬ筆して文書きたる。川船のくだりさま。齒黒のよくつきたる。重食に丁多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせくりしたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出でてすその被したる。夜寝起きて飲む水。徒然なるをりに、いとあまり睦しくはあらず、疎くもあらぬ賓客のきて、世の中の物がたり、この頃ある事の、をかしきも、にくきも、怪しきも、これにかかり、かれにかかり、公私おぼつかならず、聞きよきほどに語りたる、いと心ゆくこちす。社寺などに詣でて物申さするに、寺には法師、社には禰宜などやうのもの、思ふほどよりも過ぎて、滞なく聞きよく申したる。

「二九段」

檳榔毛はのどやかにやりたる。急ぎたるは軽々しく見ゆ。綱代は走らせたる。人の門より渡りたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しく行けばいとわろし。

「三〇段」

説經師は顔よき、つとまもり入たるこそ、その説く事のたふとさも覺ゆれ。外目しつればふと恐るるを、にくげなるは罪や得じかと覺ゆ。「の詞はたむびへし。

少し年などのよろしきほどこそ、かやうの罪はえがたの詞かき出でけめ。今は罪いとおそろし。又たふときこと、道心おほかりとて、説經すといふ所に、最初に行きぬる人こそ、なほこの罪の心地には、さしもあらで見ゆれ。藏人おりたる人、昔は、御前などいふこともせず、その年ばかり、内裏あたりには、まして影も見えざりける。今はさしもあらざんめる。藏人の五位とて、それをしもぞ忙しうつかへど、なほ名残つれくにて、心一つは暇ある心地ぞすべかんめれば、さやうの所に急ぎ行くを、一たび二たび聞きそめつれば、常にまうでまほしくなりて、夏などのいとあつきにも、帷子いとあざやかに、薄一藍、青鈍の指貫などふみちらしてゐたんめり。烏帽子にもおぼつけたるは、今日さるべき日なれど、功德のかたにはさはらずと見えんとにや。いそぎ来てその事するひじりと物語して、車たつるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しく逢はざりける人などの、まうで逢ひたる、めづらしがりて、近くより物語し、うなづき、をかしき事など語り出でて、扇ひろうつひろげて、口にあてて笑ひ、装束したる珠數かいまざぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、經供養などいひくらべぬたるほどに、この説經の事もきぎ入れず。なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れて、めづらしう覺えぬにこそはあらぬ。さはあらで講師めてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とどめておるる人、蝉の羽よりも軽げなる直衣、指貫、すずしのひとへなど著たるも、狩衣姿にても、さやうにては若くほそやかなる三四人ばかり、侍のもの又さばかりして入れば、もとあたりつる人も、少しうち身じろきくつるきて、高座のもと近き柱のもとなどにすゑたれば、さすがに珠數おしもみなどして、伏し拜みぬたるを、講師もはえくしう思ふなるべし、いかで語り傳ふばかりと説き出でたる、聽問すなど、立ち騒ぎぬかづくほどにもなくて、よきほどにて立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふ事も何事ならんと覺ゆ。見知りたる人をば、をかしと思ひ、見知らぬは、誰ならん、それにや彼にやと、目をつけて思ひやらるこそをかしけれ。説經しつ、八講しけりなどいひ傳ふるに、「その人はありつや」「いかがは」など定りていはれたる、あまりなり。なかは無下にさしのぞかではあらん。あやしき女だに、いみじく聞くめるものをば。さればとて、はじめつかたは徒歩する人はなかりき。たまさかには、つば装束などばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物語をぞせし。説經などは殊に多くも聞かざりき。この頃その折さし出でたる人の、命長くて見ましかば、

いかばかりそしり誹謗せまし。

「 三一段 」

菩提といふ寺に結縁八講せしが、聴きにまつでたるに、人のもとより疾く歸り給え、いとさうくしといひたれば、蓮のはなびらら、

もとめてもかかる蓮の露をおきてつき世にまたは歸るものかは

と書きてやりつ。誠にいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちうが家の人もどかしさも忘れぬべし。

「 三二段 」

小白川といふ所は、小一條の大將の御家ぞかし。それにて上達部、結縁の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人の集り行きて聴く。遅からん車はよるべきやうもなしといへば、露と共に急ぎ起きて、實にぞひまなかりける。轉の上に又さし重ねて、三つばかりまでは、少し物も聞ゆべし。

六月十日餘にて、暑きこと世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、少し涼しき心地する。左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣指貫、淺黄の帷子をぞすかし給へる。少しおとなび給へるは、青にびのさしぬき、白き袴もすずしげなり。安親の宰相なども若やぎだちて、すべてたふときことこの限にもあらず、をかしき物見なり。

廂の御簾高くまき上げて、長押のうへに上達部奥に向ひて、ながく居給へり。そのしもには殿上人、わかき公達、かりさうぞく直衣なども、いとをかしくて、居もさだまらず、ここかしこに立ちさまよひ、あそびたるもいとをかし。實方の兵衛佐、長明の侍従など、家の子にて、今すこしいでいりなれたり。まだ童なる公達など、いとをかしうておはす。

少し日だけたるほどに、三位中將とは關白殿をぞ聞えし、香の羅、一藍の直衣、おなじ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張りたる白き單衣のいとあざやかなるを著給ひ

て、歩み入り給へる、さばかりかるび涼しげなる中に、あつかはしげなるべけれど、いみじくめでたしとぞ見え給ふ。細塗骨など、骨はかはれど、ただ赤き紙を同じなみにうちつかひ持ち給へるは、瞿麥のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。

まだ講師ものぼらぬほどに、懸盤どもして、何にかはあらん物まあるべし。義懷の中納言の御ありさま、常よりも勝りて清げにおはするさまぞ限なきや。上達部の御名など書くべきにもあらぬを。誰なりけん、少しほど經れば、色あひはなばなといみじく、匂あざやかに、いづれともなき中の帷子を、これはまことに、ただ直衣一つを著たるやうにて、常に車のかたを見おこせつつ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけん。

後にきたる車の隙もなかりければ、池にひき寄せてたてたるを見給ひて、實方の君に、「人の消息つきくしくいひつべからんもの一人」と召せば、いかなる人にかあらん、選りて率ておはしたるに、「いかがいひ遣るべき」と、近く居給へるばかりいひ合せて、やり給はん事は聞えず。いみじくよそひして、車のもとに歩みよるを、かつは笑ひ給ふ。後のかたによりていふめり。久しく立てれば、「歌など詠むにやあらん、兵衛佐返しおもひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事聞かんと、おとな上達部まで、皆そなたさまに見やり給へり。實に顯證の人々まで見やりしもをかしうありし。

返事きたるにや、すこし歩みくるほどに、扇をさし出でて呼びかへせば、歌などの文字をいひ過ちてばかりこそ呼びかへさめ。久しかりつるほどに、あるべきことかは、なほすべきにもあらじものをとぞ覺えたる。近く参りつくも心もとなく、「いかにいかに」と誰も問ひ給へどもいはず。權中納言見給へば、そこによりてけしきはみ申す。三位中將、「疾くいへ、あまり有心すぎてしそこなふな」との給ふに、「これも唯おなじ事になん侍る」といふは聞ゆ。藤中納言は人よりもけにのぞきて、「いかがいひつる」との給ふれば、三位中將、「いとなほき木をなん押し折りたしめる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何となくさと笑ふ聲、聞えやすらん。

中納言「さて呼びかへされつるさきには、いかがいひつる、これやなほしたること」と問ひ給へば、「久しうたちて侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば、さは参りなんとてかへり侍るを、呼びて」とぞ申す。「誰が車ならん、見知りたりや」などのたまふ程に、講師ののほりぬれば、皆居しづまりて、そなたをのみ見

る程に、この車はかいけつやうにうせぬ。下簾など、ただ今日はじめたりと見え、濃きひとへがさねに、一藍の織物、蘇枋の羅のうはぎなどにて、しりにすりたる裳、やがて廣げながらうち懸けなどしたるは、何人ならん。何かは、人のかたほならんことよりは、實にと聞えて、なか／＼いとよしとぞ覺ゆる。

朝座の講師清範、高座のうへも光満ちたる心地して、いみじくぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しきすまじき事の、今日すくすまじきをうち置きて、唯少し聞きて歸りなんとしつるを、敷竝に集ひたる車の奥になんめたれば、出づべきかたもなし。朝の講はてなば、いかで出でなんとて、前なる車どもに消息すれば、近くたたんうれしさにや、はや／＼と引き出であけて出すを見給ふ。いとかしがましきまで人こといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、ききも入れず、答もせで狭がり出づれば、權中納言「ややまかりぬるもよし」とて、うち笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑きに惑ひ出でて、人して、「五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と聞えかけて歸り出でにき。

そのはじめより、やがてはつる日までたてる車のありけるが、人寄り來とも見えず、すべてただあさましう繪などのやうにて過しければ、「ありがたく、めでたく、心にくく、いかなる人ならん、いかで知らん」と問ひけるを聞き給ひて、藤大納言、「何かめでたからん、いとにくし、ゆゆしきものにこそあんなれ」とのたまひけるこそをかしけれ。

さてその二十日あまりに、中納言の法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも、なほ世の常なりや。老を待つまのとだにいふべくもあらぬ御有様にこそ見え給ひしか。

### 「 三三段 」

七月ばかり、いみじくあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころは寐起きて見いだすもいとをかし。闇もまたをかし。有明はたいふもおるかなり。

いとつややかなる板の端近う、あざやかなる畳一枚かりそめにうち敷きて、三尺の儿帳、奥のかたに押しやりたるぞあぢきなき。端にこそ立つべけれ、奥のうしろめたからんよ。

人は出でにけるなるべし。薄色のうらいと濃くて、うへは少しかへりたるなら

ずは、濃き綾のつややかなるが、いたくはなえぬを、かしらこめてひき著てぞねためる。香染のひとへ、紅のこまやかなるすずしの袴の、腰いと長く衣の下よりひかれたるも、まだ解けながらななめり。傍のかたに髪のうちたたなはりてゆらかなるほど、長き推しはかれたるに、又いつこよりにかあらん、朝ぼらけのいみじう霧満ちたるに、一藍の指貫、あるかなきかの香染の狩衣、白きすずし、紅のいとつややかなるうちぎぬの、霧にいたくしめりたるをぬぎ垂れて、鬢の少しふくだみたれば、烏帽子の押し入れられたるけしきもしどけなく見ゆ。

朝顔の露落ちぬさきに文書かんとて、道のほど心もとなく、おふの下草など口ずさびて、わががたへ行くに、格子のあがりたれば、御簾のそばをいささかあけて見るに、起きていぬらん人もをかし。露をあはれと思ふにや、しばし見たれば、枕がみのかたに、朴に紫の紙はりたる扇、ひろこりながらあり。檀紙の疊紙のほそやかなるが、花が紅か、少しにほひうつりたるも儿帳のもとに散りばひたる。人のけはひあれば、衣の中より見るに、うち笑みて長押におしかかりぬたれば、はぢなどする人にはあらねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかなと思ふ。「こよなき名残の御あさいかな」とて、簾の中に半ばかり入りたれば、「露よりさきなる人のもどかしさに」といらふ。をかしき事とりたてて書くべきにあらねど、かく言ひかはすけしきどもにくからず。

枕がみなる扇を、我もちたるしておよびてかき寄するが、あまり近う寄りくるにやと心ときめきせられて、今少し引き入らるる。取りて見などして、疎くおぼしたる事などうちかすめ恨みなどするに、あかつなりて、人の聲々し、日もさし出でぬべし。霧の絶間見えぬほどにと急ぎつる文も、たゆみぬるこそつしるめたけれ。出でぬる人も、いつの程にかと見えて、萩の露ながらあるにつけてあれど、えさし出でず。香のかのいみじうしめたる匂いとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でて、わがきつる處もかくやと思ひやらるるもをかしかりぬべし。

### 「 三四段 」

木の花は 梅の濃くも薄くも紅梅。

櫻の花びらおほきに、葉色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。

卯の花は品おとりて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑のかげにかくるら

んと思ふにいとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色のうへに白き單襲かづきたる、青朽葉などにかよひていとをかし。

四月のつこもり、五月のついたちなどのころほひ、橘の濃くあをきに、花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたる翌朝などは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實のこがねの玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへおもへばにや、猶更にいふべきにもあらず。

梨の花、世にすさまじく怪しき物にして、目にちかく、はかなき文つけなどだにせず、愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、實にその色よりしてあいなく見ゆるを、唐土にかぎりなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、皇帝の御使に逢ひて泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帯びたりなどいひたるは、おぼろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は類あらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろがり、さまつたてあれども、又他木どもとひしう言ふべきにあらず。唐土にことごとくしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまぐなる音の出でくるなど、をかしとは尋常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、櫛の花いとをかし。かればなに、さまごとに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

「三五段」

池は 勝間田の池。盤余の池。にえの池、初瀬に参りしに、水鳥のひまなくたちさわぎしが、いとをかしく見えしなり。

水なしの池、あやしうなごて附けけるならんといひしかば、五月など、すべて雨いたく降らんとする年は、この池に水といふ物なくなんある、又日のいみじく照る年は、春のはじめに水なん多く出づるといひしなり。無下になく乾きてあらばこそさもつけめ、出づるをりもあるなるを、一すぢにつけけるかなと答へまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げけるを聞しめて、行幸などありけんこそい

みじうめでたけれ。ねくたれ髪をと人丸が詠みけんほど、いふもおろかなり。御まへの池、又何の意につけけるならんをかし。鏡の池。狭山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆるにやあらん。こひぬまの池。原の池、玉藻はな刈りそといひけんもをかし。ますだの池。

「三六段」

せちは 五月にしくはなし。菖蒲逢などのかをりあひたるもいみじうをかし。九重の内をはじめて、いひしらぬ民の住家まで、いかでわがもとに繁くふかんと葺きわたしたる、猶いとめづらしく、いつか他折はさはしたりし。

空のけしきの曇りわたりたるに、后宮などには、縫殿より、御薬玉とていろくの糸をくみさげて参らせられたれば、御几帳たてまつる母屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を、綾と生絹のきぬに包みて参らせたる、同じ柱にゆひつけて、月ころある薬玉取り替へて捨つめる。又薬玉は菊のをりまであるべきにやあらん。されどそれは皆糸をひき取りて物ゆひなどして、しばしもなし。

御節供まぬり、わかき人々は菖蒲のさしぐさし、物忌つけなどして、さまぐ唐衣、汗衫、ながき根、をかしきをり枝ども、村濃の組して結びつけなどしたる、珍しういふべきことならねどいとをかし。さても春ことに咲くとて、櫻をよろしう思ふ人やはある。

辻ありく童女の、ほどぐにつけては、いみじきわざしたると、常に袂をまもり、人に見くらべえもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舎人童などにひきとられて、泣くもをかし。

紫の紙に櫛の花、青き紙に菖蒲の葉、細つまきてひきゆひ、また白き紙を根にしてゆひたるもをかし。いと長き根など文の中に入れなどしたる人どもなども、いと艶なる返事かかんといひ合せかたらふどちは、見せあはしなどする、をかし。人の女、やんことなき所々に御文聞え給ふ人も、今日は心ことにぞなまめかしうをかしき。夕暮のほどに杜鵑の名のりしたるも、すべてをかしういみじ。

「三七段」

木は 桂。五葉。柳。橋。そばの木、はしたなき心地すれども、花の木ども散りはてて、おしなべたる緑になりたる中に、時もわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。

檀更にもいはず。そのものともなけれど、やどり木といふ名いとあはれなり。神臨時の祭、御神樂のをりなどいとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけんも、とりわきをかし。

くすの木は、木立おほかる所にも殊にまじらひたてらず、おどろくしき思ひやりなどうとましきを、千枝にわかれて戀する人の例にいはれたるぞ、誰かは數を知りていひ始めけんとおもふにをかし。

檜、人ちかからぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし。五月に雨の聲まねぶらんもをかし。楓の木、ささやかなるにも、もえ出でたる梢の赤みて、同じかたにさし廣りたる葉のさま、花もいと物はかなげにて、むしなどの枯れたるやうにてをかし。

あすはひの木、この世近くも見えきこえず、御嶺に詣でて歸る人など、しか持てありくめる。枝ざしなどのいと手ふれにくげに荒々しけれど、何の意ありてあすはひの木とつけけん、あぢきなき兼言なりや。誰にたのめたるにかあらんと思ふに、知らまほしうをかし。

ねずもちの木、人なみくなるべき様にもあらねど、葉のいみじうこまかに小さきがをかしきなり。樽の木。山梨の木。

椎の木は、常磐木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬ例にいはれたるもをかし。

白樫などいふもの、まして深山木の中にもいと氣遠くて、三位二位のうへのきぬ染むる折ばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたき事、をかしき事にとり出づべくもあらねど、いとなく雪の降りたるに見まがへられて、素盞鳴尊の出雲國におはしける御事を思ひて、人丸が詠みたる歌などを見る、いみじうあはれなり。いふ事にも、をりにつけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も木も鳥蟲も、おろかにこそ覺えぬ。

櫟のいみじうさやかにつやめきたるは、いと清けなるに、思ひかけず似るべくもあらず。莖の赤うきらくしつ見えたるこそ、賤しけれどもをかしけれ。なべての月頃はつゆも見えぬものの、十二月の晦日にしも時めきて、亡人のくひ物にもしくにやとあはれなるに、又齡延ぶる齒固の具にもしてつかひたしめるは、

いかなるにか。紅葉せん世やといひたるもたのもし。

柏木いとをかし。葉守の神のますらんもいとかしこし。兵衛佐、尉などをいぶらんもをかし。すがたなけれど、櫻欄の木、からめきて、わるき家のものとは見えす。

### 「三八段」

鳥は 他處の物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらんことをまねぶらんよ。杜鵑。水鷄。鳴。みこ鳥。鶉。火燒。

山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば慰むらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなどいと心ぐるし。鶴はこちたきさまなれども、鳴く聲雲井まで聞ゆらん、いとめでたし。頭赤き雀斑。斑鳩の雄。巧鳥。

鶯はいと見る目もみぐるし。まなこゑなども、うたて萬になつかしからねど、万木の森にひとり寝じと、争ふらんこそをかしけれ。容鳥。

水鳥は鶯鶯いとあはれなり。互に居かはりて、羽のうへの霜を拂ふらんなどいとをかし。都鳥。川千鳥は友まどはすらんこそ。雁の聲は遠く聞えたるあはれなり。鴨は羽の霜うち拂ふらんと思ふにをかし。

鶯は文などにもめでたき物につくり、聲よりはじめて、さまかたちもさばかり貴に美しきほどよりは、九重の内に鳴かぬぞいとわるき。人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかり侍ひて聞きしに、實に更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。まかんで聞けば、あやしき家の見どころもなき梅などには、花やかにぞ鳴く。夜なかぬもいぎたなき心地すれども、今はいかがせん。夏秋の末まで老聲に鳴きて、むしくひなど、よつもあらぬものは名をつけかへていふぞ、口惜しくすこき心地する。それも雀などのやうに、常にある鳥ならば、さもおぼゆまし。春なくゆゑこそはあらめ。年立ちかへるなど、をかしきことに、歌にも文にも作るなるは、なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人もも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをば、誇りやはする。鶯、鳥などのうへは、見いれ聞きいれなどする人、世になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり、祭のかへさ見るとて、雲林院、知足院などの前に車をたてたれば、杜鵑もしのばぬにやあらん鳴くに、いとよつまねび似せて、木高き

木どもの中に、諸聲に鳴きたるこそさすがにをかしけれ。杜鵑は猶更にいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に、卯の花、花橋などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり、五月雨の短夜に寝ざめをして、いかで人よりさきに聞かんとまたれて、夜深くうち出でたる聲の、うう／＼とく愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり。夜なくもの、すべていつれも／＼めでたし。兒どものみぞさしもなき。

「三九段」

あてなるもの 薄色に白重の汗衫。かりのこ。削氷のあまつらに入りて、新しき鏡に入りたる。水晶の珠敷。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒の覆盆子くひたる。

「四〇段」

蟲は 鈴蟲。松蟲。促織。蟋蟀。蝶。われから。蜉蝣。螢。  
養蟲いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて、親のあしき衣ひき著せて、「今秋風吹かんにをりにぞこんずる、待てよ」といひて逃げていにけるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになれば、ちよ／＼とはかなげに鳴く、いみじくあはれなり。

茅蝸、叩頭蟲またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくらん。又おもひかけず暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。  
蠅こそにくきものうちに入れつべけれ。愛敬なくにくきものは、人々しう書き出づべきものやうにあらねど、萬の物にぬ、顔などにぬれたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは必かたし。

夏蟲いとをかしく廊のうへ飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれど、軽びいみじうて、水のうへなどをただ歩みありくこそをかしけれ。

「四一段」

七月ばかりに、風のいたう吹き、雨などのさわがしき日、大かたいと涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香少しかかへたる衣の薄き引きかづきて、晝寝したるこそをかしけれ。

「四二段」

にげなきもの 髪あしき人のしるき綾の衣著たる。しじかみたる髪に葵つけたる。あしき手を赤き紙に書きたる。下衆の家に雪の降りたる。また月のさし入るるもいとくちをし。月のいとあかきに、やかたなき車にあひたる。又さる車にあめつしかけたる。老いたるものの腹たかくて喘ぎありく。また若き男もちたる、いと見ぐるしきに、他人の許に行くとして妬みたる。老いたる男の寝惑ひたる。又さやうに髻がちなる男の椎つみたる。齒もなき女の梅くひて酸がりたる。

下衆の、紅の袴著たる、このごろはそれのみこそあめめ。朝負佐の夜行狩衣すがたも、いといやしげなり。また人に恐ぢらるるつへの衣はたおどろおどろしく、たちさまよふも、人見つけばあなづらはし。「嫌疑の者やある」と戯にもとがむ。六位藏人、うへの判官とうちいひて、世になくき／＼しきものに覺え、里人下衆などは、この世の人とだに思ひたらず、目をだに見あはせて恐ぢわななく人の、内裏わたりの廊などに忍びて入りふしたるこそいとつきなけれ。そらだきものしたる几帳につちかけたる袴の、おもたげに賤しうき／＼しからんも、推し量らるるなどよ。さかしらにうへの衣わきあけて、鼠の尾のやうにて、わがねかけたらん程ぞ、似氣なき夜行の人人なる。この司ほどは、念じてとどめてよかし。五位の藏人も。

「四三段」

細殿に人とあまたあて、ありく者ども見、やすからず呼び寄せて、ものなどいふに、清げなる男、小舎人童などの、よき裏袋に衣どもつつみて、指貫の腰などうち見えたる。袋に入りたる弓、矢、楯、鉾、劍などもてありくを、「誰がぞ」と問ふに、ついで某殿のといひて行くはいとよし。氣色はみやさしがりて、「知らず」ともいひ、聞きも入れていぬる者は、いみじうぞにくきかし。月夜に空車あ

りきたる。清げなる男のにくげなる妻もちたる。鬚黒にくげなる人の年老いたるが、物がたりする人の兒もてあそびたる。

「四四段」

殿司こそなほをかききものはあれ。下女のきはさはかり羨しきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若くて容貌よく、容體など常によくてあらんは、ましてよからんかし。年老いて物の例など知りて、おもなきさましたるもいとつきくしつめやすし。主殿司の顔、愛敬つきたらんをもたりて、装束時にしたがひて、唐衣など今めかしうて、ありかせばやこそ覺ゆね。

「四五段」

男はまた隨身こそあめれ。いみじく美々しくをかきき公達も、隨身なきはいとしらぐし。辨などをかしくよき言と思ひたれども、下襲のしり短くて、隨身なきざいとわるきぢ。

「四六段」

職の御曹司の西面の立部のもとにて、頭辨の、人と物をいと久しくいひたち給へれば、さし出でて、「それは誰ぞ」といへば、「辨の内侍なり」との給ふ。「何かはさもかたらひ給ふ。大辨見えば、うちすて奉りていなんものを」といへば、いみじく笑ひて、「誰かかかる事をさへいひ聞かせけん、それなせそとかたらふなり」との給ふ。

いみじく見えて、をかきき筋などたてたる事はなくて、ただありなるやうなるを、皆人さのみ知りたるに、なほ奥ふかき御心さまを見知りたれば、「おしなべたらず」など御前にも啓し、又さしうしめしたるを、常に、「女はおのれを悦ぶ者のためにかほづくりす、土はおのれを知れる人のために死ぬといひたる」といひ合せつつ申し給ふ。「遠江の濱やなぎ」などいひかはしてあるに、わかき人々は唯いひにくみ、見ぐるしき事どもなづいづはすいづに、「この君こそうたて見にくけ

れ。他人のやうに讀經し、歌うたひなどもせず、けすさまじ」など誇る。

更にこれかれに物いひなどもせず、「女は目はたてさまにつき、眉は額におひかり、鼻は横さまにありとも、ただ口つき愛敬つき、頤のした、頸などをかしげにて、聲にくからざらん人なん思はしかるべき。とはいひながら、なほ顔のいにくげなるは心憂し」との給へば、まいて頤ほそく愛敬おくれたらん人は、あいなうかたきにして、御前にさへあしう啓する。

物など啓させんとて、その初いひそめし人をたつね、下なるをも呼びのぼせ、局にも来ていひ、里なるには文書きても、みづからもおはして、「遅く参らば、さんん申したると申しに参らせよ」などの給ふ。「その人の侍ふ」などいひ出づれど、さしもつけひかずなどおはする。

「あるに隨ひ、定めず、何事もてなしたるをこそ、よき事にはすれ」とうしるみ聞ゆれど、「わがもとの心の本性」とのみの給ひつつ、「改らざるものは心なり」との給へば、「さて憚りなしとはいかなる事をいふにか」と怪しがれば、笑ひつつ、「中よしなど人々にもいはるる。かうかたらふとならば何か恥づる、見えなどもせよかし」との給ふを、「いみじくにくげなれば、さあらんはえ思はじとの給ひによりて、え見え奉らぬ」といへば、「實にくくもぞなる。さうばな見え」とて、おのづから見つべきをりも顔をふたぎなどして、まことに見給はぬも、真心にそらこし給はざりけりと思ふに、三月晦日頃、冬の直衣の著にくきにやあらん、うへの衣がちにて、殿上の宿直すがたもあり。

翌朝日さし出づるまで、式部のおもとと廂に寝たるに、奥の遣戸をあけさせ給ひて、うへの御前、宮の御前出でさせ給へれば、起きもあへずまどぶを、いみじく笑はせ給ふ。唐衣を髪のうちへにつち著て、宿直物も何もつづもれながらある上におはしまして、陣より出で入るものなど御覽す。殿上人のつゆ知らで、より来て物いふなどもあるを、「けしきな見せよ」と笑はせ給ふ。さてたせ給ふに、「二人ながらいざ」と仰せらるれど、今顔などつくるひてこそとてまぬらす。

入らせ給ひて、なほめでたき事どもいひあはせてゐたるに、南の遣戸のそばに、儿帳の手のさし出でたるにさはりて、簾の少しあきたるより、黒みたるものが見ゆれば、のりたかが居たるなんめりと思ひて、見も入れで、なほ事どもをいふに、いとよく笑みたる顔のさし出でたるを、「のりたかなめり、そは」とて見やりたれば、あらぬ顔なり。あさましと笑ひさわぎて几帳ひき直しかくるれど、頭辨にこそおはしけれ。見え奉らじとしるものをと、いとくちをし。もろともに居た

る人は、こなたに向きてゐたれば、顔も見えず。

立ち出でて、「いみじく名残なく見づるかな」との給へば、「のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし。なかかは見じとの給ひしに、さつくく」とは「といふに、「女は寝おきたる顔なんいとよきといへば、ある人の局に行きてかいはみして、又もし見えやするとて来りつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、え知らざりけるよ」とて、それより後は、局のすだれうちかづきなどし給ふめり。

「四七段」

馬は 紫の斑づきたる。蘆毛。いみじく黒きが、足肩のわたりなどに、白き處、うす紅梅の毛にて、髪尾などもいとしろき、實にゆふかみともいひつべき。

「四八段」

牛は 額いとちひさく白みたるが、腹のした、足のしも、尾のすそ白き。

「四九段」

猫はうへのかぎり黒くて、他はみな白からん。

「五〇段」

雑色隨身は ほそやかなる。よき男も、なほ若きほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからん人と思はる。

「五一 段」

小舎人はちひさくて、髪のうちるはしきが、すそさわらかに、聲をかして、畏りて物などいひたるぞ、りやうくじき。

「五二 段」

牛飼は 大にて、髪赤白髪にて、顔の赤みてかどくしげなる。

「五三 段」

殿上のなだいめんこそ猶をしけれ。御前に人さぶらふをりは、やがて問ふもをか。足音でもしてくづれ出づるを、うへの御局の東面に、耳をとなへて聞くに、知る人の名のりには、ふと胸つぶるらんかし。又ありともよく聞かぬ人も、この折に聞きつけたらんは、いかが覺ゆらん。名のりよしあし、聞きにくく定むるもをか。

はてぬなりと聞くほどに、灌口の弓ならし、沓の音そめき出づるに、藏人のいと高くふみこほめかして、うしとらの隅の高欄に、たかひざまづきとかやいふるまひに、御前のかたに向ひて、後ざまに「誰々か侍る」と問ふほどこそをかしけれ。細うたかう名のり、また人人さぶらはねばにや、なだいめん仕う奉らぬよし奏するも、いかにと問へばさはる事も申すに、さ聞きて歸るを、「方弘はきかず」とて公達の教へければ、いみじう腹だちしかりて、勘へて、灌口にさへ笑はる。

御厨子所の御膳棚といふものに、沓おきて、はらへいひのしるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらん、え知らず」と主殿司人々のいひけるを、「やや方弘がきたなき物ぞや」とりに来てもいとさわがし。

「五四 段」

わかくてよろしき男の、げす女の名をいひなれて呼びたるこそ、いとにくけれ。知りながらも、何とかや、かたもじは覺えでいふはをかし。

宮仕所の局などによりて、夜などぞ、さおぼめかんは悪しかりぬべけれど、主殿司、さらぬ處にては、侍、藏人所にあるものを率て行きてよばせよかし、てづからは聲もしるきに。はしたもの、わらはべなどはされとよし。



「五五段」

わかき人と兒は肥えたるよし。受領などおとなだちたる人は、ふときいとよし。あまり瘦せからめきたるは、心いられたらんと推し量らる。よろづよりは、牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。他物どもは、されど後にたちてこそ行け、先にとまもられ行くもの、穢げなるは心憂し。車のしりに殊なることなき男どものつれだちたる、いと見ぐるし。ほそらかなる男隨身など見えぬべきが、黒き袴の末濃なる、狩衣は何もうちなればみたる、走る車のかたなどに、のどやかにてうち添ひたるこそ、わが物とは見えぬ。なほ大かた様子あしくて、人使ふはわりかりき。破れなど時々うちしたれど、馴ればみて罪なきはさるかたなりや。つかひ人などはありて、わらはべの穢げなるこそは、あるまじく見ゆれ。家にゐたる人も、そこにある人として、使にても、客人などの住きたるにも、をかしき童の數多見ゆるはいとをかし。

「五六段」

人の家の前をわたるに、さぶらひめきたる男、つちに居るものなどして、男子の十ばかりなるが、髪をかしげなる、引きはへても、さばきて垂るも、また五つ六つばかりなるが、髪は頸のもとにかいくくみて、つらいと赤うぶくらかなる、あやしき言、しもとだちたる物などささげたる、いとつつくし。車とどめて抱き入れまほしくこそあれ。又さて往くに、薫物の香のいみじくかかへたる、いとをかし。

「五七段」

よき家の中門あけて、檳榔毛の車の白う清げなる、はじ蘇枋の下簾のほひいときよげにて、榻にたちたるこそめでたけれ。五位六位などの下襲のしりはさみて、ささのいと白きかたにつちおきなどして、とかくいきちがふに、また装束し、壺やなぐひ負ひたる隨身の出で入る、いとつきくし。厨女のいと清げなるがさし出でて、某殿の人やさぶらふなどいひたる、をかし。

「五八段」

瀧は 音無の瀧、布留の瀧は、法皇の御覽しにおはしけんこそめでたけれ。那智の瀧は熊野にあるがあらはれなるなり。轟の瀧はいかにかがましく怖しからん。

「五九段」

川は 飛鳥川、淵瀬さだめなくはかなからむといとあらはれなり。大井川。泉州。水無瀬川。

耳敏川、また何事をさしもさかしく聞きけんをかし。音無川、思はずなる名とをかしきなり。細谷川。玉屋川。貫川、澤田川、催馬樂などのおもひはするなるべし。なのりその川。

名取川もいかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、このしにもあるなり。七夕つめに宿からんと業平が詠みけんも、ましてをかし。

「六〇段」

曉にかへる人の、昨夜おきし扇懷紙もとむとて、暗ければ、探りあてん、さぐりあてんと、たたきもわたし、「怪し」などうちいひもとめ出でて、そよくと懐にさし入れて、扇ひきひろげて、ふたくとうちつかひて、まかり申したる、にくしとは世の常、いと愛敬なし。おなじこと夜深く出づる人の烏帽子の緒強くゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも、人のとがむべきことかは。いみじうしどけなう、かたくなし。直衣狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせん。

とする人は、なほ曉のありさまこそ、をかしくもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起きがたげなるを、強ひてそそのかし、「あけ過ぎぬ、あな見苦し」などいはれて、うちなげくけしきも、げにあかず物つきにしもあらんかしと覺ゆ。指貫なども居ながら著もやらず、まつさしよりて、夜ひと夜いひつることののこりを、女の耳にいひ入れ何わざすとなけれど、帯などはゆふやうなりかし。格子あけ、妻戸ある處は、やがて諸共に出行き、晝のほのおほつかなからん事なども、い

ひいでにすべり出でなんは、見送られて、名残をかきかりぬべし。なごりも出所あり。いときはやかに起きて、ひろめきたちて、指貫の腰強くひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帯強くゆふ、にくし。開けて出でぬる所たてぬ人、いとにくし。

「六一段」

橋は あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵲の橋。ゆきあひの橋。小野の浮橋。山背の橋。一筋わたしたる棚橋。心せばければ名を聞きたるをかし。假寐の橋。

「六二段」

里は 逢坂の里。ながめの里。いさめの里。ひとつまの里。たのめの里。朝風の里。夕日の里。十市の里。伏見の里。長井の里。

つまとの里、人にとられたるにやあらん、わが取りたるにやあらん、いつれもをかし。

「六三段」

草は 菖蒲。菰。葵いとをかし。祭のをり、神代よりしてさるかさしとなりけん、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし。

澤瀉も名のをかききなり、心あがりしけんとおもふに。三稜草。蛇床子。苔。こだに。雪間の青草。酢漿、あやの紋にても他物よりはをかし。

あやふ草は岸の額に生ふらんも、實にたのもしげなくあはれなり。いつまで草は生ふる處いとはかなくあはれなり。岸の額よりもこれはくづれやすげなり。まことの石灰などには、えおひずやあらんと思ふぞわるき。

ことなし草は思ふ事なきにやあらんと思ふもをかし、又あしき事を失ふにやと、いづれもをかし。しのぶ草いとあはれなり。屋の端、さし出でたる物の端なむ、

あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。蓬いとをかし。茅花いとをかし。濱茅の葉はましてをかし。荊三稜。蘋萍。淺茅。青鞭草。木賊といふ物は風に吹かれたらん音こそ、いかならんと思ひやられてをかしけれ。薺。ならしは、いとをかし。蓮のつき葉のらうたげにて、のどかに澄める池の面に、大なると小さきと、ひろこりただよひてありく、いとをかし。とりあげて物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。八重葎。麥門冬。山藺。女蘿。濱木綿。葦。葛の風に吹きかへされて裏のいとしろく見ゆる、をかし。

「六四段」

草の花は 嬰麥、唐のは更なり、やまとのもしとめでたし。女郎花。桔梗。菊のところ、うつつひたる。刈萱。龍膽は枝ざしなどもむつかしげなれど、他花みな霜がはてたるに、いとかなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。わざととりたてて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、鴈來紅の花らうたげなり。名ぞうたてげなる。鴈の來る花と、文字には書きたる。雁緋の花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。壺葎、すみれ、同じやうの物ぞかし。老いていけば同じなど憂し。しもつけの花。夕顔は朝顔に似て、いひつづけたるもをかきかりぬべき花のすがたにて、にくき實のありさまこそいとくちをしけれ。などてさはた生ひ出でけん。ぬかつきなどいふものやつにだにあれかし。されどなほ夕顔といふ名ばかりはをかし。葦の花、更に見どころなれど、御幣などいはれたる、心ばへあらんと思ふにただならず。萌えしも薄にはおとらねど、水のつらにてをかしうこそあらめと覺ゆ。これに薄を入れぬ、いとあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋の終ぞいと見所なき。いろ／＼に亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたる後、冬の未まで、頭いと白く、おほどれたるをも知らで、昔おもひいで顔になびきて、かひろぎ立てる人にこそいみじう似たれ。よそふる事ありて、それをしもこそ哀ともおもふべけれ。萩はいと色ふかく、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよ／＼とひろ／＼りふしたる、牡鹿の分きてたちならすらんも心ことなり。唐葵はとりわきて見えねど、日の影に隨ひて傾くらんぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき。花の色は濃からねど、咲く山吹には山石榴も異なることなれど、

をりもてぞ見るとよまれたる、さすがにをかし。薔薇はちかくて、枝のさまなど  
はむつかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木の階などのつらに、  
亂れ咲きたるゆふばえ。

「六五段」

集は 古萬葉集。古今。後撰。

「六六段」

歌の題は 都。葛。三枝草。駒。霰。笹。壺重。女蘿。蔣。高瀬。鴛鴦。淺茅。  
芝。青鞭草。梨。栗。槿。

「六七段」

おぼつかなきもの 十二年の山籠の法師の女親。知らぬ所に闇なるに行きたる  
に、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがになみぬたる。

今いで来るもの心も知らぬに、やんことなき物もたせて人の許やりたるに、遅  
くかへる。物いはぬ兒の、そりくつがへりて人にも抱かれず泣きたる。暗きに覆  
盆子食ひたる。人の顔見しらぬ物見。

「六八段」

たとしへなきもの 夏と冬と。夜と晝と。雨ふると日てると。若きと老いたる  
と。人の笑ふと腹だつと。

黒きと白きと。思ふと憎むと。藍と黄葉と。雨と霧と。おなじ人ながらも志う  
せぬるは、誠にあらぬ人とぞ覺ゆるかし。

「六九段」

常磐木おほかる處に鳥のねて、夜中ばかりにいねさわがしくおぢ惑ひ、木づた  
ひて、ねおびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみににはたがひてをかしけれ。

「七〇段」

忍びたる處にては夏こそをかしけれ。いみじう短き夜のいとほかなく明けぬる  
に、つゆ寐すなりぬ。やがて萬の所あけながらなれば、涼しう見わたされたり。な  
ほ今少しいふべき事のあれば、互にいらへどもするほどに、ただ居たる前より、鳥  
の高く鳴きて行くこそ、いとけそうなる心地してをかしけれ。

冬のいみじく寒きに、思ふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音のただ物の底な  
るやうに聞ゆるもをかし。鳥の聲もはじめは羽のうちをこめながら鳴けば、い  
みじう物深く遠きが、つき／＼になるままに近く聞ゆるもをかし。

「七一一段」

懸想人にて来るはいふべきにもあらず。唯うちかたらひ、又さしもあらねど、お  
のづから來などする人の、簾の内にて、あまた人々あて、物などいふに、入りて  
とみに歸りげもなきを、供なる男童など、斧の柄も朽ちぬべきなんめりとむつ  
かしければ、永やかにうち詠めて、密にと思ひていふらめども、「あなわびし、煩  
惱苦惱かな、今は夜中にはなりぬらん」などいひたる、いみじう心づきなく、か  
のいふ者はとかくも覺えず、この居たる人こそ、をかしう見ききつる事もつする  
やうに覺ゆれ。

又さは色に出でてはいはずあると、高やかにうちいひうめきたるも、したゆ  
く水のといとをかし。立部、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるもい  
とにくし。

よき人公達などの供なるこそ、さやうにはあらね、唯人などさぞある。數多あ  
らん中にも、心ばへ見てぞ率てありくべき。

「七二一段」

ありがたきもの 鼻に寝めらるる境。また姑に思はるる婦の君。物よく抜くる  
白銀の毛抜。主誇らぬ人の従者。つゆの癖缺點なくて、かたち心さまもすぐれて、  
世にあるほど、聊のきずなき人。

同じ處に住む人の、互に慚ぢかはし、いささかの隙なく用意したりと思ふが、遂  
に見えぬこそかたけれ。物語、集など書きつつ本に墨つけぬ事。よき草紙など  
は、いみじく心して書けども、必こそきたなげになるめれ。男も女も法師も、ち  
ぎり深くてかたらふ人の、未まで中よき事かたし。つかひよき従者。搔練つたせ  
たるに、あなめでたと見えておこす。

「七三段」

内裏の局は、廊いみじうをか。かみの小葩あけたれば、風いみじう吹き入り  
て夏もいとすずし。冬は雪霰などの風にたくひて入りたるもいとをか。せばく  
て童などのぼり居たるもあしければ、屏風の後などにかくしすゑたれば、他所  
のやうに聲たかく笑ひなどもせいでいとよし。

晝などもたゆまず心づかひせらる。夜はたまして聊うちとくべくもなきが、い  
とをかしきなり。沓の音の夜ひと夜聞ゆるがとまりて、ただ指一つしてたたくが、  
その人ななりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しくたたくに音もせねば、寐  
いりにけるとや思ふらん。ねたく少しうち身じろくおと、衣のけはひも、さな  
なりと思ふらんかし。扇などつかふもしるし。冬は火桶にやをら立つる火箸の音  
も、忍びたれど聞ゆるを、いとたたきまさり、聲にてもいふに、陰ながらすべ  
りよりて聞く折もあり。

また數多の聲にて詩を誦し、歌などうたふには、たたかねどまつあけたれば、こ  
こへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて、立ちあかすもをか  
し。御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷いとあざやかに、裾のつま少  
うちがさなりて見えたるに、直衣の後にほころび絶えず著たる公達、六位の藏人  
の青色など著て、うけはりて、遣戸のもとなどにそばよせてえ立てらず、堀の前  
などに、後押して袖うち合せて立ちたるこそをかしけれ。また指貫いと濃う直衣  
のあざやかにて、いろ／＼の衣どもこぼし出でたる人の、簾を押し入れて、なか  
ら入りたるやうなるも、外より見るはいとをかしからんを、いと清げなる硯ひき  
よせて文書き、もしは鏡こひて鬢なかき直したるもすべてをか。

三尺の几帳をたてたるに、帽額のしもは唯少しぞある。外に立てる人、内にあ  
たる人と物いふ顔のもとに、いとにくく當りたるこそをかしけれ。長のいと高く、  
短からん人などやいかあらん。なほ尋常のはさのみぞあらん。

まして、臨時の祭の調樂などはいみじうをか。殿主の官人などの長き松を高  
くともして、頸はひき入れて行けば、さきはさし附けつばかりなるに、をかしう  
あそび笛ふき出でて、心に思ひたるに、公達の日の装束して立ちとまり物い  
ひなどするに、殿上人の隨身どもの、さきを忍びやかに短く、おのが公達のれう  
におひたるも、あそびに交りて、常に似ずをかしう聞ゆ。

夜更けぬれば猶あけて歸るを待つに、公達の聲にて、あらたに生ふるとみ草の  
花と歌ひたるも、このたびは今少しをかしきに、いかなるまめ人にかあらん、す  
ぐすぐしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「暫しや、など、さ夜をすてて  
急ぎ給ふ、とありて」などいへど、心地などやあしからん、倒れぬばかり、もし  
人や追ひてとらふると見ゆるまで、まどひ出づるもあんめり。

「七四段」

職の御曹司におはしますころ、木立など遙に物ぶり、屋のさまも高うけどほけ  
れど、すずるにをかしう覺ゆ。母屋は鬼ありとて皆へだて出して、南の廂に御几  
帳たてて、またひさしに女房は侍ふ。

近衛の御門より左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかけ  
れば、おほさきさきと聞きつけて騒ぐ。數多たびになれば、その聲どもも皆聞  
きしられて、それぞかれぞといふに、又「あらず」などいへば、人して見せなど  
するに、いひあてたるは、「さればこそ」などいふもをか。

有明のいみじう霧わたりたる庭において歩くを聞き召して、御前にもおきさせ  
給へり。うへなる人は皆おりなどして遊ぶに、やう／＼明けもてゆく。左衛門の  
陣にまかりて見んとて行けば、われも／＼と追ひつきて行くに、殿上人あまた聲  
して、ながし一聲の秋と誦じて入る音すれば、遁げ入りて物などいふ。「月を見  
給ひける」などめでて、歌よむもあり。

夜も晝も殿上人の絶ゆるをりなし。上達部まかんでまあり給ふに、おぼるげに  
急ぐことなきは、必まあり給ふ。

「七四段」

あぢきなき物 わざと思ひ立ちて宮つかへに出でたりたる人の、物憂がり、うるさげに思ひたる。養子の、顔にくげなる。しぶく／＼に思ひたる人を、しめて婿どりて、思さまならずとなげく。

「 七五段 」

あぢきなきもの わざと思ひたちて宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりてうるさげに思ひたる。人にもいはれ、むづかしき事もあれば、いかでかまかんでなんといふ言草をして、出でて親をうらめしければ、また参りなんといふよ。養子の顔にくさげなる。しぶく／＼に思ひたる人を忍びて婿にとりて、思ふさまならずとなげく人。

「 七六段 」

こちよげなるもの 卯杖の祝言。神樂の人長。池の蓮の村雨にあひたる。御靈會の馬長。また御靈會の振幡。

「 七七段 」

御佛名のあした、地獄繪の御屏風とりわたして、宮に御覽せさせ奉りたまふ。いみじうゆゆしき事がぎりなし。「これ見よかし」と仰せらるれば、「更に見待らじ」とて、ゆゆしきにう／＼やに隠れふしぬ。

雨いたく降りて徒然なりとて、殿上人う／＼の御局に召して御あそびあり。道方の少納言琵琶いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の中將笙の笛など、いとおもしろうつひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿の、「琵琶の聲はやめて物語すること遅し」といふ事を誦し給ひしに、隠れふしたりしも起き出でて、「罪はおそろしけれど、なほ物のめでたきはえ止むまじ」とて笑はる。御聲などの勝れたるにはあらねど、折のことさらに作りいでたるやうなりしなり。

「 七八段 」

頭中將そぞろなるそらごとを聞きて、いみじういひおとし、「何しに人と思ひけん」など殿上にてもいみじくなんの給ふと聞くに、はづかしけれど、「實ならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてん」など笑ひてあるに、黒戸のかたへなど渡るにも、聲などする折は、袖をふたぎて露見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もいれで過ぐす。二月つ／＼もりがた、雨いみじう降りてつれ／＼なるに、「御物忌にこもりて、さすがにさう／＼しくこそあれ。物やいひにやらましとなんの給ふ」と人々かたれど、「よにあらじ」など答へてあるに、一日しも暮して参りたれば、夜のおとどに入らせ給ひにけり。

長押の下に火近く取りよせて、さし集ひて篇をぞつく。「あなうれしや、疾くおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、何しのぼりつらんとおぼえて、炭櫃のもとにゐたれば、又そこにあつまりて物などいふに、「なにがしさぶらぶ」といと花やかにいふ。あやし／＼、「いつの間に何事のあるぞ」と問はずれば殿司なり。「唯ここに人傳ならで申すべき事なん」といへば、さし出でて問ふに、「これ頭中將殿の奉らせ給ふ、御かへり疾く」といふに、いみじうにくみ給ふをいかなる御文ならんと思へど、「只今急ぎ見るべきにあらねば、いね、今きこえん」とて懐にひき入れて入りぬ。なほ人の物いふききなどするに、すなはち立ちかへりて、「さらばその有りつる文を賜りて來となん仰せられつる。疾く／＼」といふに、「あやし／＼伊勢の物語なるや」とて見れば、青き薄様にいと清げに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

蘭省の花の時錦帳の下

と書きて、「末はいかに／＼」とあるを、如何はすべからん。御前のおはしまさは御覽せさすべきを、これがすゑ知り顔に、たど／＼しき眞字は書きたらんも見るなど、思ひまはす程もなく、責めまごはせば、唯その奥に、すびつる消えたる炭のあるして、

「草の庵を誰かたづねた」

と書きつけて取らせつれど、返事もいはず。

みな寐て、翌朝いと疾く局におりたれば、源中將の聲して、「草の庵やあるく」とおどろくしう問へば、「などてか、さ人げなきものはあらん。玉の臺もとめ給はましかば、いで聞えてまし」といふ。「あなうれし、下にありけるよ。上まで尋ねんとしつるものを」とて、昨夜ありしやう、「頭中將の宿直所にて、少し人々しきかぎり、六位まで集りて、萬の人のうへ、昔今と語りていひし序に、猶このもの無下に絶えはてて後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づる事もやと待てど、いささか何とも思ひたらず。つれなきがいとねたきを、今宵惡しとも善しとも定めきりて止みなんかして、皆いひ合せたりしことを、只今は見るまじきとて入りたまひぬとて、主殿司來りしを、また追ひ歸して、ただ袖をとらへて、東西をさせず、こひとり持てこずば、文をかへしとれと誠めて、さばかり降る雨の盛に遣りたるに、いと疾く歸りきたり。これとてさし出でたるが、ありつる文なれば、かへしてけるかとうち見るにあはせてをめければ、あやし、いかなる事ぞとてみな寄りて見るに、いみじきぬす人かな。なほえこそすつまじけれと見さわぎて、これがもとつけてやらん、源中將つけよなどいふ。夜更くるまでつけ煩ひてなん止みにし。この事かならず語り傳ふべき事なりとなん定めし」と、いみじくかはらいたきまでいひきかせて、「御名は今草の庵となんつけたる」とて急ぎたちたまひぬれば、「いとわろき名の未まであらんこそ口惜しかるべけれ」といふほどに、修理亮則光「いみじきよるこび申しに、うへにやとて参りたりつる」といへば、「なぞ司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」といへば、「いで實にうれしき事の昨夜侍りしを、心もとなく思ひ明してなん。かばかり面目ある事なかりき」とて、はじめありける事ども、中將の語りつる同じ事どもをいひて、「この返事に隨ひてさる物ありとだに思はじと、頭中將の給ひしに、ただに來りしはなかなかよかりき。持て來りしたびは、如何ならんと胸つぶれて、まことにわるからんは、兄のためもわるかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人の寝め感じて、兄こそ聞けとのたまひしかば、下心にはいとうれしけれど、さやうのかたには更にえ侍ふまじき身になんはべると申ししかば、言加へ聞き知れとはあらず、ただ人に語れとてきかするぞとの給ひしなん、少し口をしき兄のおぼえに侍りしかど、これがもとつけ試るにいふべきやうなし。殊に又これが返しをやすべきなどいひ合せ、わろき事いひてはなかくねたかるべしとて、夜中までなんおはせし。これは身のためにも人のためにも、さていみじきよるこびには侍らずや。

司召に少將のつかさ得て侍らんは、何とも思ふまじくなん」といへば、實に數多して、さる事あらんとも知らず、ねたくもありけるかな。これになん胸つぶれて覺ゆる。この妹兄といふことをば、うへまで皆しるしめし、殿上にも官名をばいはで、「せつと」とぞつけたる。

物語などして居たる程に、「まつ」と召したれば参りたるに、この事仰せられんとてなりけり。うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、「男ども皆扇に書き持たる」と仰せらるるにこそ、あさましう何のいはせける事にかと覺えしか。さて後に袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。

#### 「七九段」

かへる年の二月二十五日に、宮、職の御書司に出でさせ給ひし。御供にまゐらで梅壺に残り居たりし又の日、頭中將の消息とて、「きのふの夜鞍馬へ詣でたりしに、こよひ方の塞がれば、違になん行く、まだ明けざらんに歸りぬべし。必いふべき事あり、いたくたたかせで待て」との給へりしかど、「局に一人はなどであるぞ、ここに寐よ」とて御匣殿めしたれば参りぬ。久しく寐おきておりたれば、「いみじう人のたたかせ給ひし。辛うじて起きて侍りしかば、うへにかたらば斯くなんとの給ひしかども、よもきかせ給はじとて臥し侍りにき」と語る。心もとなの事やとて聞くほどに、主殿司きて、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。只今まかり出づるを、聞ゆべき事なんある」といへば、「見るべきことありて、うへになんのぼり侍る。そこに」といひてやりつ。

局はひきもやあけ給はんと、心ときめきして、わづらはしければ、梅壺の東おもての半部あげて、「ここに」といへば、めでたくぞ歩み出で給へる。櫻の直衣いみじく花々と、うらの色つやなどえもいはずけうらなるに、葡萄染のいと濃き指貫に、藤のをり枝ことくしく織りみだりて、紅の色擣目など、輝くばかりぞ見ゆる。次第に白きつす色など、あまた重りたる、狭きままに、片つかたはしもながら、少し簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪に書き、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはと見えたる。

御前の梅は、西は白く東は紅梅にて、少しおちかたになりたれど、猶をかしきに、うらくくと田の氣色のどかにて、人に見せまほし。簾の内に、まして若やかなる女房などの、髪つるはしく長くほれかかりなど、そひ居たしめる、今少し見

所ありて、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふる／＼しき人の、髪なども我にはあらねばや、處々わななきちりびひて、大かた色ことなるころなれば、あるかなきかなる薄にびども、あはひも見えぬ衣どもなどあれば、露のはえも見えぬに、おはしまさねば装も著す、袿すがたにて居たるこそ、物ぞこなひに口をしけれ。

「職へなんまゐる、ことづけやある、いつかまゐる」などのたまふ。さても昨夜あかしもはてで、されどもかねてき言ひてしかば待つらんとて、月のいみじう明きに、西の京よりくるままに、局をたたきしほど、辛うじて寐おびれて起き出でたりしけしき、答のはしたなさなど語りてわらひ給ふ。「無下にこそ思ひつうじにしか。などさるものをばおきたる」など實にさぞありけん、いとほしくもをかしくもあり。暫しありて出で給ひぬ。外より見ん人はをかしう、内にいかなる人のあらんと思ひぬべし。奥のかたより見いだされたらんうしろこそ、外にさる人やともえ思ふまじけれ。

暮れぬればまゐりぬ。御前に人々多くつどひゐて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ、定めいひしうひ誦じ、仲忠がことなど、御前にも、おとりまさりたる事など仰せられける。「まづこれは如何にとことわれ。仲忠が童生のあやしさを、せちに仰せらるるぞ」などいへば、「何かは、琴なども天人おるばかり弾きて、いとわるき人なり。みかどの御むすめやはえたる」といへば、仲忠が方人と心を得て「さればよ」などいふに、「この事どもよりは、ひる齋信が参りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるるに、人々「さてまことに常よりもあらまほしう」などいふ。「まづそのことこそ啓せめと思ひて参り侍つるに、物語の事にまぎれて」とて、ありつる事を語り聞えさせば、「誰も／＼見つれど、いとかく縫ひたる絲針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。

西の京といふ所の荒れたりつる事、諸共に見る人あらましかばとなん覺えつる、垣なども皆破れて、苔生ひてなど語りつれば、宰相の君の、「かはらの松はありつや」と答へたりつるを、いみじうめで、「西のかた都門を去れることいくばくの地ぞ」と口ずさびにしつる事など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

「 八〇段 」

里にまかだたるに、殿上人などの来るも、安からずぞ人々いひなすなる。いとあまり心に引きいりたる覺はたなければ、さいはん人もにくからず。また夜も晝も

くる人をば、何かはなしなどもかがやきかへさん。誠に睦しくなどあらぬも、こそは来めれ。あまりつるさくも實にあれば、このたび出でたる所をば、いづくともなべてには知らせず。経房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。

左衛門尉則光が来て、物語などするついでに、昨日も宰相中將殿の、妹のあり處ざりとも知らぬやうあらじと、いみじう問ひ給ひしに、更に知らぬよし申ししに、あやにくに強ひたまひし事などいひて、「ある事あらがふは、いと佗しうこそありけれ。ほと／＼笑みぬべかりしに、左中將のいとつれなく知らず顔にて居給へりしを、かの君に見だにあはせば笑みぬべかりしに佗びて、臺盤のうへに怪しき和布のありしを、唯とりに取りて食ひまぎらはししかば、中間にあやしの食物やと人も見けんかし。されど、かしこうそれにてなん申さずなりにし。笑ひなましかば不用ぞかし。まことに知らぬなめりと思したりしも、をかしうこそ」など語れば、「更にな聞え給ひそ」などいといひて、曰「ろく久しくなりぬ。

夜いたく更けて、門おどろ／＼しく叩けば、何のかく心もとなく遠からぬ程を叩くらんと聞きて、問はずれば、瀧口なりけり。左衛門の文とて、文をもてきたり。皆ねたるに、火近く取りよせて見れば、「明日御讀經の結願にて、宰相中將の御物忌に籠り給へるに、妹の在處申せと責めらるるに、すぢなし、更にえ隠し申すまじき。そこや聞かせ奉るべき。いかに仰に隨はん」とぞいひたる。返事も書かで、和布を一寸ばかり紙に包みてやりつ。

さて後にきて、「一夜責めて問はれて、すずるなる所に率てありき奉りて、まめやかにさいなむに、いとからし。さてかくも御かへりのなくて、そぞろなる和布の端をつつみて取へりしかば、取りたがへたるにや」といふに、怪しの違物や。人のもとにさる物包みて贈る人やはある。いささかも心得ざりけると見るがにくければ、物もいはで、硯のある紙のはしに、

かづきする蟹の住家はそかなりとゆめいふなとやめをくはせけん

とかきて出したれば、「歌よませ給ひつるか、更に見侍らじ」とてあぶぎかへして遁げていぬ。

かつ互に後見かたらひなどする中に、何事ともなくて、少し中あしくなりたるころ、文おこせたり。「便なき事侍るとも、ちぎり聞えし事は捨て給はで、よそにてもさぞなどは見給へ」といひたり。常にいふ事は、「おのれをおばさん人は、歌

などよみてえさすまじき。すべて仇敵となん思ふべき。今はかぎりありて絶えな  
んと思はん時、さる事はいへ」といひしかば、この返しに、  
くづれよる妹脊の山のなかなればさらによし野のかはとだに見い

といひ遣りたりしも、誠に見ずやなりけん、返事もせず。さてかつぶり得て  
遠江介などいひしかば、にくくしてこそやみにしか。

「八一段」

物のあはれ知らせがほなるもの 鼻たるまもなく、かみてものいふ聲。まゆぬ  
くも。

「八二段」

さてその左衛門の陣にいきて後、里に出でて暫しあるに、「疾く参れ」など仰事  
のはしに、「左衛門の陣へいきし朝ぼらけなん、常におぼし出でらる。いかでさ  
つれなくうちぶりてありしならん。いみじくめでたからん」とこそ思ひたりしか「な  
ど仰せられたる御返事に、かしこまりのよし申して、「私にはいかでかめでたしと  
思ひ侍らざらん。御前にも、さりとて、中なるをとめとはおぼしめし御覽じけん  
となん思ひ給へし」と聞えさせれば、たち歸り、「いみじく思ふべかんめるなり。  
誰がおもてぶせなる事をば、いかでか啓したるぞ。ただ今宵のうちに萬の事をす  
てて参られよ。さらすばいみじくくませ給はんとなん仰事ある」とあれば、よ  
ろしからんにてだにゆゆし。ましていみじくある文字には、命もさながら捨て  
てなんとて参りにき。

「八三段」

職の御曹司におはしますころ、西の廂に不斷の御讀經あるに、佛などかけ奉り、  
法師のぬたるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、縁のもとにあやしき者の聲  
にて、「なほその佛具のおろし侍りなん」といへば、「いかでまだきには」と答ふ

るを、何のいふにかあらんと立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじく  
煤けたる狩袴の、筒とかやのやうに細く短きを、帯より下五寸ばかりなる、衣と  
かやいふべからん、同じやうに煤けたるを着て、猿のさまにていふなりけり。「あ  
れは何事いふぞ」といへば、聲ひきつくるひて、「佛の御弟子にさぶらへば、佛の  
おろし賜へと申すを、この御坊達の惜みたまふ」といふ、はなやかにみやびかな  
り。「かかるものは、うちくんじたるこそ哀なれ、うたても花やかなるかな」とて、  
「他物は食はで、佛の御おろしをのみ食ふが、いとたふとき事かな」といふけしき  
を見て、「なか他物もたべざらん。それがさぶらはねばこそ取り申し侍れ」とい  
へば、菓子、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、無下に中よく  
なりで、萬の事をかたる。

若き人々いできて、「男やある、いつこにか住む」など口々に問ふに、をかしき  
こと、そへことなどすれば、「歌はつたふや、舞などするか」と問ひもはてぬに、  
「よるはたれと寐ん、常陸介と寐ん、ねたる膚もよし」これが未いと多かり。また  
「男山の峯のもみち葉、さぞ名はたつ」と頭をまるがしふる。いみじくにく  
ければ笑、ひにくみて「いね」といふもいとをかし。「これに何取らせん」と  
いふを聞かせ給ひて、「いみじう、なかかくかたはらいたき事はせさせつる。えこ  
そ聞かで、耳をふたぎてありつれその衣一つとらせて、疾くやりてよ」と仰事あ  
れば、とりて「それ賜はらするぞ、きぬすすけたり、白くて著よ」とて投げとらせ  
たれば、伏し拜みて、肩にぞうちかけて舞ふものか。誠ににくくて皆入りにし。後  
にはならひたるにや、常に見えしらがひてありく。やがて常陸介とつけたり。衣  
もしるめず、同じすすけにてあれば、いつち遣りにけんなどにくむ。

右近の内侍の参りたるに、「かかるものなんかたらひつけて置きたんめる。かう  
して常にくること」と、ありしやつなど、小兵衛といふ人してまねばせて聞かせ  
給へば、「あれいかで見侍らん、かならず見せさせ給へ、御得意なんなり。更によ  
もかたらひとらじ」など笑ふ。

その後また、尼なるかたはのいとあてやかなるが出でたるを、又呼びいでて  
物など問ふに、これははづかしげに思ひてあはれなれば、衣ひとつたまはせたる  
を、伏し拜むはされどよし。さてうち泣き悦びて出でぬるを、はやこの常陸介い  
きあひて見てけり。その後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でん。

さて十二月の十餘日のほどに、雪いと高つふりたるを、女房どもなどして、物  
の蓋に入れつといと多くおくを、おなじくば庭にまことの山をつくらせ侍らんと



て、侍召して仰事にていへば、集りてつくるに、主殿司の人にて御きよめに参りたるなども皆よりて、いと高くつくりなす。宮つかさなど参り集りて、こと加へことにつくれば、所の衆三四人まゐりたる。主殿司の人も二十人ばかりになりけり。里なる侍召しに遣しなす。「今日この山つくる人には禄賜はずし。雪山に参らざらん人には、同じからずとどめん」などいへば、聞きつけたるは惑ひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらす。作りはつれば、宮つかさ召して、衣二ゆひとらせて、縁に投げ出づるを、一つつとり寄りて、をがみつつ腰にさして皆まかんでぬ。袍など著たるは、かたへさうで狩衣にてぞある。

「これいつまでありなん」と人々のたまはするに、「十餘日はありなん」ただこの頃のほどをあるかぎり申せば、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日まで候ひなん」と申すを、御前にも、えさはあらじと思すめり。女房などは、すべて年の内、晦日まであらじとのみ申すに、あまり遠くも申してけるかな。實にえしもさはあらざらん。朔日などぞ申すばかりけると下にはおもへど、さばれさまでなくと、言ひそめてんことはとて、かたうあらがひつ。

二十日のほどに雨など降れど、消ゆべくもなし。長ぞ少しおとりもてゆく。白山の觀音、これ消させ給ふなと祈るも物狂ほし。

さてその山つくりたる日、式部丞忠隆御使にてまゐりたれば、褥さし出し物などいふに、「今日の雪山つくらせ給はぬ所なんなき。御前のつばにも作らせ給へり。春宮弘徽殿にもつくらせ給へり。京極殿にもつくらせ給へり」などいへば、

ここにのみめづらしと見る雪の山とこゝろへにふりにけるかな

と傍なる人していはすれば、たび／＼傾きて、「返しはえ仕うまつりけがさじ、あざれたり。御簾の前に人をかたり侍らん」とてたちなき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらん」とぞの給はする。

晦日がたに、少しちひさくなるやうなれど、なほいと高くであるに、晝つかた縁に人々出居などしたるに、常陸介いできたり。「なほいと久しく見えざりつる」といへば、「なほか、いと心憂き事の侍りしかば」といふに、「いかに、何事ぞ」と問ふに、「なほかく思ひ侍りしなり」とてながやかによみ出づ。

うらやまし足もひかれずわたつ海のいかなるあまに物たまふらん

となん思ひ侍りしといふをにくみ笑ひて、人の目もみいれねば、雪の山にのぼり、かかづらひありきていぬる後に、右近の内侍にかくなるといひやりたれば、「などか人そへてここには給はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山までかかりつたひけんこそ、いと悲しけれ」とあるを又わらふ。

さて雪山はつれなくて年もかへりぬ。ついたちの日また雪多くふりたるを、うれしくも降り積みたるかなと思ふに、「これはあいなし。初のをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。

うへにて肩へいと疾うあるれば、侍の長なるもの、袖葉の如くなる宿直衣の袖の上に、青き紙の松につけたるをおきて、わななき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて参りぬ。まだ大殿ごもりたれば、母屋にあたりたる御格子おこなはんなど、かきよせて、一人ねんじてあぐる、いと重し。片つ方なればひしめくに、おどろかせ給ひて、「などさはする」との給はすれば、「齋院より御文の候はんには、いかでか急ぎあげ侍らざらん」と申すに、「實にいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あげさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに頭つつみなどして、山たちばな、ひかげ、やますげなど美しげに飾りて、御文はなし。ただなるやう有らんやはとて御覽すれば、卯槌の頭つつみたるちひさき紙に、

山とよむ斧のひびきをたづぬればいはひの杖の音にぞありける

御返しにかかせ給ふほどもいとめでたし。齋院にはこれより聞えさせ給ふ。御返しも猶心ことにかきけがし、多く御用意見えたる。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降りきたるに、かづきて参るもをかしう見ゆ。このたびの御返事を知らずなりにしこそ口惜しかりしか。

雪の山は、誠に越のにやあらんと見えて、消えげもなし。くろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心地して、いかで十五日まちつけさせんと念ずれど、「七日をだにえ過ぎ」と猶いへば、いかでこれ見はてんと皆人おもふほどに、俄に三日内裏へ入らせ給ふべし。いみじうくちをし、この山のはてを知ら

ずなりなん事と、まめやかに思ふほどに、人も「實にゆかしかりつるものを」などいふ。御前にも仰せらる。同じくはいひあてて御覽せせんと思へるかひなれば、御物の具はこび、いみじうさわがしきにあはせて、木守といふ者の、築地のほどに廂さしてゐたるを、縁のもと近く呼びよせて、「この雪の山いみじく守りて、童などに踏みちらさせ毀たせで、十五日までさふらはせ。よくよく守りて、その日にあらば、めでたき禄たまはせんとす。わたくしにも、いみじき悦いはん」など語らひて、常に臺盤所の人、下司などに乞ひて、くるる菓子や何やと、いと多くとらせたれば、うち笑みて、「いと易きこと、たしかに守り侍らん。童などぞのぼり侍らん」といへば、「それを制して聞かざらん者は、事のよしを申せ」などいひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日まで侍ひて出でぬ。其程も、これが後めたきまに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、拜みつる事など、かへりては笑ひあへり。里にても、明るるすなはちこれを大事にして見せにやる。十日のほどには五六尺ばかりありといへば、うれしく思ふに、十三日の夜雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらんと、いみじく口惜し。今一日もまちついでと、夜も起き居て歎けば、聞く人も物狂ほしと笑ふ。人の起きて行くにやがて起きいで、下司おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「圓座ばかりになりて侍る。木守いとかしこ童も寄せ守りて、明日明後日までさふらひぬべし。禄たまらんと申す」といへば、いみじくうれしく、いつしか明日にならば、いと疾う歌よみて、物に入れてまゐらせんと思ふも、いと心もとなつわびし。まだくらきに、大なる折櫃などもたせて、「これにしろからん所、ひたもの入れてもてこ。きたなげならんはかき捨てて」などいひくくめて遣りたれば、いと疾くもたせてやりつる物ひきさげて、「はやつ失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしようみ出でて、人にもかたり傳へせんとつめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならん。昨日さばかりありけんものを、夜のほどに消えぬらんこと」といひ屈すれば、「木守が申しつるは、昨日いと暗うなるまで侍りき。禄をたまはらんと思ひつるものを、たまはらずなりぬる事と、手をつちて申し侍りつる」といひさわぐに、内裏より仰事ありて、「さて雪は今日までありつや」との給はせられたれば、いとねたくちをしけれど、「年のうち朔日までだにあらじと人々啓し給ひし。昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなん思ひ給ふる。今日まではあまりの事になん。夜の程に、人のにくがりて取りすて侍

るにやとなん推しはかり侍ると啓せさせ給へ」と聞えさせつ。

さて二十日に参りたるにも、まつこの事を御前にていふ。「みな消えつ」とて蓋のかぎりひきさげて持てきたりつる。帽子のやうにて、すなはちまつで来りつるが、あさましかりし事、物のふたに小山うつくしうつくりて、白き紙に歌いみじく書きて参らせんとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひける事を違へたれば罪得らん。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて取りすてさせしぞ。かへりごとに、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出でて、いみじう手をすりていひけれど、おほせことぞ、かのより来らん人にかつきかすな。さらば屋うち毀たせんといひて、左近のつかさ、南の築地の外にみな取りすてし。いと高くて多くなんありつといふなりしかば、實に二十日まで待ちつけて、ようせすば今年の初雪にも降りそひなまし。うへにも聞し召して、いと思ひよりがたくあらがひたりと、殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌をかたれ、今はかくいひ願しつれば、同じこと勝ちたり。かたれ」など御前にも給はせ、人々も給へど、「なにせんに、さばかりの事を承りながら啓し侍らん」などまめやかに憂く心づがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは多くの人なゆめりと見つるを、これにぞ怪しく思ひし」など仰せらるるに、いとどつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いではれ、いみじき世の中ぞかし。後に降り積みたりし雪をうれしと思ひしを、それはあいなしとて、かき捨てよと仰事はべりしか」と申せば、「實にかたせじとおぼしけるらん」とうへも笑はせおはします。

#### 「八四段」

めでたきもの 唐錦。銚太刀。作佛のもく。色あひよく花房長くさきたる藤の、松にかかりたる。

六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき公達なれども、えしも著給はぬ綾織物を、心にまかせて著たる青色すがたなど、いとめでたきなり。所衆雑色、ただの人の子どもなどにて、殿原の四位五位六位も、官位あるが下にうち居て、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずあさましくめでたきや。宣旨などもてまゐり、大饗の甘栗使などに参りたるを、もてなし饗應し給ふさまは、いづこなりし天降人ならんとこそ覺ゆれ。

御むすめの女御后におはします。まだ姫君など聞ゆるも、御使にてまありたるに、御文とり入るるよりうちはじめ、しとねさし出づる袖口など、明暮見しものとおぼえず。下襲の裾ひきちらして、衛府なるは今すこしをかしう見ゆ。みづから益さしたまふを、わが心にも覺ゆらん。いみじうかしこまり、べちに居し家の公達をも、けしきばかりこそかしこまりたれ、同じやうにうちつれありく。うへの近くつかはせ給ふ様など見るは、ねたくさへこそ覺ゆれ。

御文かかせ給へば、御硯の墨すり、御團扇などまあり給へば、われつかふまつるに、三年四年ばかりのほどを、なりあしく物の色よろしうてまじろはんは、いふかひなきものなり。かうぶり得て、おりんこと近くならんに、命よりはまさりて惜しかるべき事を、その御たまはりなど申して惑ひけるこそ、いと口をしけれ。昔の藏人は、今年の春よりこそ泣きたちけれ。今の世には、はしりくらべをなんする。

博士のざえあるは、いとめでたしといふも愚なり。顔もいとにくげに、下臍なれども、世にやんごとなき者に思はれ、かしこき御前に近づきまあり、さるべき事など問はせ給ふ御文の師にて侍ふは、めでたくこそおぼゆれ。願文も、さるべきものの序作り出して譬めらるる、いとめでたし。

法師のざえある、すべていふべきにあらず持經者の一人して讀むよりも、數多が中にて、時など定りたる御讀經などぞ、なほいとめでたきや。くらうなりて、「いづら御讀經あぶらおそし」などいひて、讀みやみたる程、忍びやかにつつけ居たるよ。後の晝の行啓、御うづや。みやはじめの作法。獅子、狛犬、大床子などもてまありて、御帳の前にしつらひすゑ、内膳、御竈わたしたてまつりなどしたる。姫君など聞えした人とこそつゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき。

春日まつで。葡萄染の織物。すべて紫なるは、なにもくめでたくこそあれ、花も、糸も、紙も。紫の花の中には杜若ぞ少しくき。色はめでたし。六位の宿直すがたのをかしきにも、紫のゆゑなめり。ひろき庭に雪のふりしきたる。今上一の宮、まだ童にておはしますが、御叔父の上達部などの、わかやかに清げなるに抱かれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬引かせて御覽し遊ばせ給へる、思ふ事おはせじとおぼゆる。

「 八五段 」

なまめかしきもの ほそやかに清げなる公達の直衣すがた。をかしげなる童女の、うへの袴など、わざとにはあらで、ほころびがちな汗衫ばかり著て、薬玉など長くつけて、高欄のもとに、扇さしかくして居たる。若き人のをかしげなる、夏の几帳のしたうち懸けて、しろき綾、二藍ひき重ねて、手ならひしたる。

薄様の草紙、村濃の糸してをかしくとぢたる。柳の萌えたるに青き薄様に書きたる文つけたる。鬚籠のをかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重がさねの扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげなり。能くしたる檜破子。白き組のほそき。新しくもなく、いたくふりてもなき檜皮屋に、菖蒲うるはしく葺きわたしたる。青やかなる御簾の下より、朽木形のあざやかに、紐いとつややかに、かかりたる紐の吹きなびかされたるもをかし。夏の帽額のあざやかなる、簾の外の高欄のわたりに、いとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、碇の緒くひつきて引きありくもなまめいたり。

五月の節のあやめの藏人、菖蒲のかづらの、赤紐の色にはあらぬを、領巾裙帯などして、薬玉を皇子たち上達部などの立ち並び給へるに奉るも、いみじうなまめかし。取りて腰にひきつけて、舞踏し拜し給ふもいとをかし。火取の童。小忌の公達もいとなまめかし。六位の青色のとのあすがた。臨時の祭の舞人。五節の童なまめかし。

「 八六段 」

宮の五節出させ給ふに、かしづき十二人、他所には御息所の人出すをばわるき事にぞすると聞くに、いかにおぼすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今二人は女院、淑景舎の人、やがて姉妹なりけり。

辰の日の青摺の唐衣、汗衫を著せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじう隠して、みな装束したちて、暗うなりたるほどに持て来て著す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくやうしたる白き衣に、榎木のかた繪にかきたる、織物の唐衣のうへに著たるは、誠にめづらしき中に、童は今少しなまめきたり。下つかへまでつぎ立ちいでぬるに、上達部、殿上人驚き興じて、小忌の女房とつけたり。小忌の公達は、外に居て物いひなどす。五節の局を皆こぼちすかして、いと怪しくてあらず、いと異様なり。「その夜までは猶づるはしくこそあらめ」との給はせて、さも惑はさず、几帳どものほころびゆひつつ、こぼ

れ出でたり。

小兵衛といふが赤紐の解けたるを、「これを結ばばや」といへば、實方の中將、よりつくるふに、ただならず。

あしびきの山井の水はこほれるをいかなる紐のとくるならん

といひかく。年わかき人の、さる顯證の程なれば、いひにくきにやあらん、返しもせず。そのかたはらなるおとな人達も、打ち捨てつつ、ともかくもいはぬを、宮司などは耳とどめて聴きけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、ことかたより入りて、女房の許によりて、「などかづはおはする」などぞささめくなるに、四人ばかりを隔てて居たれば、よく思ひ得たらんにもいひにくし。まして歌よむと知りたらん人の、おぼろげならざらんは、いかでかと、つつまじきこそはわろけれ。「よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ねたうこそはいへ」と爪はじきをしてありくも、いとをかしければ、

つす氷あはにむすべる細なればかざす日かげにゆるぶばかりぞ

と辨のおもといふに傳へさすれば、きえいりつつえもいひやらす。「などかゝ」と耳を傾けて問ふに、少しことどもりする人の、いみじうつくるひ、めでたしと聞かせんと思ひければ、えも言ひつづけずなりぬるこそ、なか／＼恥かす心地してよかりしか。

おりのほるおくりなどに、なやましといひ入れぬる人をも、の給はせしかば、あるかぎり群れ立ちて、ことにも似ず、あまりこそつるさげなめれ。舞姫は、すけまさの馬頭の女、染殿の式部卿の宮の御弟の四の君の御はら、十二にていとをかしげなり。

はての夜も、おひかづきいくもさわがず。やがて仁壽殿よりとほりて、清涼殿の前の東のすのこより舞姫をさきにて、うへの御局へ参りしほど、をかしかりき。

「 八七段 」

細太刀の平緒つけて、清げなる男のもてわたるも、いとなまめかし。紫の紙を

包みて封じて、房長き藤につけたるも、いとをかし。

「 八八段 」

内裏は五節のほどこそすずろにただならで、見る人もかしく覺ゆれ。主殿司などの、いろ／＼の細工を、物忌のやうにて、彩色つけたるなども、めづらしく見ゆ。清涼殿のそり橋に、もとゆひの村濃いとけざやかにて出でたるも、さま／＼につけてをかしうのみ、上雜仕童ども、いみじき色ふしと思ひたる、いとことわりなり。山藍日陰など柳筥にいれて、冠したる男もてありく、いとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇やなにやと拍子にして、「つかさまされときなみぞたつ」といふ歌をうたひて、局どもの前わたるほどはいみじく、添ひたちたらん人の心さわぎぬべしかし。まして颯と一度に笑ひなどしたる、いとおそろし。行事の藏人の掻練重、物よりことにきよらに見ゆ。褥など敷きたれど、なか／＼えものほりぬす。女房の出でたるさま譽めそしり、このころは他事はなか／＼めり。帳臺の夜、行事の藏人いと嚴しうもてなして、かいつくるひ二人、童より他は入るまじとおさへて、面にくきまでいへば、殿上人など「猶これ一人ばかりは」などのたまふ。「うらやみあり。いかでか」などかたくいふに、宮の御かたの女房二十人ばかりおし凝りて、こと／＼しういひたる藏人何ともせず、戸をおしあけてさざめき入れば、あきれて「いとこはすぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞ、かしづきども皆入る。けしきいとねたげなり。うへもおはしまし、いとをかしと御覽はおはしますらんかし。童舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顔ども、いとらうたげにをかしかりき。

「 八九段 」

無名といふ琵琶の御琴を、うへの持てわたらせ給へるを、見などして、掻き鳴しなどすと言へば、ひくにはあらず、緒などを手まさべりにして、「これが名よ、いかにとかや」など聞えさするに、「ただいとはかなく名もなし」との給はせたるは、なほいとめでたくこそ覺えしか。

淑景舎などわたり給ひて、御物語のついでに、「まるがもとにいとをかしげなる

笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、僧都の君の「それは隆圓にたつべ。おのれが許にめでたき琴侍り、それにかへさせ給へ」と申し給ふを、ききも入れ給はで、猶他事をたまふに、答させ奉らんと數多たび聞え給ふに、なほ物のたまはねば、宮の御前の「否かへじとおぼいたるものを」との給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限なき。この御笛の名を僧都の君もえ知り給はざりければ、ただうらめしとぞおぼしたるめ。これは職の御曹司におはしましし時の事なり。うへの御前に、いなかへじといふ御笛のさぶらふなり。

御前に侍ぶ者どもは、琴も笛も皆めつらしき者つきてこそあれ。琵琶は玄象、牧馬、井上、滑橋、無名など、また和琴なども、朽目、鹽竈、一貫などぞ聞ゆる。水龍、小水龍、宇多法師、釘打、葉一、なにくれと多く聞えしかど忘れにけり。宜陽殿の一の欄にといふことくさは、頭中將こそしたまひしか。

「九〇段」

うへの御局の御簾の前にて、殿上人曰ひと曰、琴、笛吹き遊びくらして、まかで別るるほど、まだ格子をまゐらぬに、おほとなぶらをさし出でたれば、戸の開きたるがあらはなれば、琵琶の御琴をたださまにもたせ給へり。紅の御衣のいふも世の常なる、袿又はりたるも數多たてまつりて、いと黒くつややかなる御琵琶に、御衣の袖をつちかけて、捕へさせ給へるめでたきに、そばより御額のほど白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは、譬ふべき方なくめでたし。近く居給へる人にさし寄りて、「半かくしたりけんも、えかうはあらざりけんかし。それはただ人にこそありけめ」といふを聞きて、心地もなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、「われは知りたりや」となん仰せらるると傳ふるもをかし。

「九一段」

ねたきもの これよりやるも、人のいひたる返しも、書きて遣りつる後、文字一つ二つなど思ひなほしたる、頼の物ぬふに、縫ひはてつと思ひて針を抜きたれば、はやうしりを結はざりけり。又かへさまに縫ひたるもいとねたし。南の院におはします頃、西の對に殿のおはします方に宮もおはしますせば、寢殿に集りあて

さうくしければ、ふれあそびをし、渡殿に集り居などしてあるに、「これ只今とみのものなり、誰もく集りて、時かはさず縫ひて参らせよ」とて平縦の御衣を給はせられたれば、南面に集り居て、御衣片身つつ、誰か疾く縫ひ出つると挑みつつ、近くも向はず縫ふさまもいと物狂ほし。命婦の乳母いと疾く縫ひはてうち置きつる。弓長のかたの御身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つけず、とぢめもしあへず、惑ひ置きて立ちぬるに、御背合せんとすれば、早う違ひにけり。笑ひのしりて、「これ縫ひ直せ」といふを、「誰があしう縫ひたりと知りてか直さん、綾などならばこそ、裏を見ざらん縫ひたがへの人のげになほさめ。無紋の御衣なり。何をしるしにてか直す人誰かあらん。ただまだ縫ひ給はざらん人に直させよ」とて聞きも入れねば、「さいひてあらんや」とて、源少納言、新中納言など、いひ直し給ひし顔見やりて居たりしこそをかしかりしか。これはよきりのぼらせ給はんとて、「疾く縫ひたらん人を思ふと知らん」と仰せられしか。

見すまじき人に、外へ遣りたる文取り違へて持て行きたる、ねたし。「げに過ちてけり」とはいはで、口かたうあらがひたる、人目をだに思はずば、走りもうちつべし。おもしろき萩薄などを植ゑて見るほどに、長櫃もたるもの、鋤など提げて、ただほりに掘りていぬるこそ、佗しつねたかりけれ。よろしき人などのある折は、さもせぬものを、いみじう制すれど「唯すこし」などいひていぬる、いふがひなくねたし。

受領などの來て無禮に物いひ、さりとして我をばいかがと思ひたるけはひに、いひ出でたる、いとねたげなり。見すまじき人の、文を引き取りて、庭におりて見たる、いとわびしうねたく、追ひて行けど、簾の許にとまりて見るこそ、飛びも出でぬべき心地すれ。すずなる事腹だちて、同じ所にも寝ず、身じくり出つるを、忍びて引きすれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて、人も「さはよかなりにて、あやにくがりて、大かた皆人も寝たるに、さすがに起き居たらん怪しくて、夜の更くるままに、ねたく起きてぞいぬべかりけるなどと思ひ臥したるに、奥にも外にも物うちなりなどして恐しければ、やをらまるび寄りて衣ひきあぐるに、虚寐したるこそいとねたけれ。「猶こそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

「九二段」

かたはらいたきもの 客人などにあひて物いふに、奥の方にうち解けごと人のいふを、制せで聞く心地。思ふ人のいたく酔ひておなじ事したる。聞きぬたるをも知らで人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいし。

旅だちたる所ちかき所などにて、下衆どものざれかはしたる。にくげなる兒を、おのれが心地にかなしと思ふままに、うつくしみあそばし、これが聲の眞似にていひける事など語りたる。才ある人の前にて、才なき人の物おぼえがほに人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬわが歌を人に語りきかせて、人の譽めし事などいふもかたはらいし。人の起きて物語などする傍に、あさましう打ちとけて寐たる人。まだ音も弾きととのへぬ琴を、心一つをやりて、さやうのかた知りつる人の前にて弾く。いとどしう住まぬ聲の、さるべき所にて鼻にあひたる。

「 九三段 」

あさましきもの 指櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせく久しくなどやあらんとこそ思ひしか。ただ夢の心地してあさましうあやなし。

人のために恥しき事、つつみもなく、兒も大人もいひたる。かならず來なんと思ふ人を待ち明して、暁がたに、唯いささか忘れて寐入りたるに、鳥のいと近くかうと鳴くに、うち見あげたれば、晝になりたるいとあさまし。てうばみにどう取られたる。無下に知らず、見ず、きかぬ事を、人のさし向ひて、あらがはずべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。賭弓にわななくわななく久しうありてはづしたる矢の、もて離れてことかたへ行きたる。

「 九四段 」

くちをしきもの 節會、佛名に雪ふらで、雨のかき暮し降りたる。節會、さるべきをりの、御物忌に當りたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さる事出で來て俄にとまりたる。いみじうする人の、子うまで年ごろ具したる。あそびをもし、見すべき事もあるに、かならず來なと思ひて呼びに遣りつる人の、さは

る事ありてなどいひて來ぬ、くちをし。

男も女も宮仕所などに、同じやうなる人、諸共に寺へまつて、物へも行くに、このもしうこぼれ出でて、用意はげしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の、馬にても車にても行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、すぎくしからん下衆などにて、人に語りつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

「 九五段 」

五月の御精進のほど職におはしますに、塗籠の前、一間なる所を、殊にしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。

朔日より雨がちにて曇りくらす。「つれづれなるを、杜鵑の聲たづねありかばや」といふを聞いて、われもくくと出でたつ。「賀茂の奥になにがしとかや、七夕の渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。そのわたりになん日ごとに鳴く」と人の言へば、「それは鯛なり」と答ふる人もあり。そこへとて、五日のあした、宮づかさ車の事いひて、北の陣より、「五月雨はとがめなきものぞ」とて、さしよせて四人ばかりぞ乗りて行く。うらやましがりて、「今一つして同じくば」などいへば、「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、馬場といふ所にて人多くさわぐ。「何事するぞ」と問へば、「手結にて眞弓射るなり。しはし御覽じておはしませ」とて車止めたり。「右近の中將みな著き給へる」といへど、さる人も見えず。六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ、はやく過ぎよ」とて行きもて行けば、道も祭のころ思ひ出でられてをかし。

かついふ所には、明順朝臣の家あり。そこもやがて見んといひて車よせておりぬ。田舎だち事そぎて、馬の繪書きたる障子、網代屏風、三稜草簾など、殊更に昔の事を寫し出でたり。屋のさまもはかなだちて、端近くあさはかなれど、をかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに鳴きあひたる杜鵑の聲を、くちをしう御前に聞しめさず、さはかり慕ひつる人々にもなど思ふ。所につけては、かかる事をなん見るべきとて、稻といふもの多く取り出でて、わかき女どものきたなげならぬ、そのわたりの家のむすめ、女などひきゐて來て、五六人してこかせ、見も知らぬくるべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、珍しくて笑ふに、杜鵑の歌よまんなどしつる、忘れぬべし。

唐繪にあるやうなる懸盤などして物くはせたるを、見ている人なければ、家あるじ、「いとわるくひなびたり。かかる所に來ぬる人は、ようせずばあるもなど責め出してこそ參るべけれ。無下にかくてはその人ならず、などいひてとりはやし、「この下藤は手づから摘みつる」などいへば、「いかで女官などのやつに、つきなみてはあらん」などいへば、とりおろして、「例のはひぶしに習はせ給へる御前たちなれば」とて、とりおろしまかなひ騒ぐほどに、「雨ふりぬべし」といへば、急ぎて車に乗るに、「さてこの歌は、「ここにこそ詠まめ」といへば、「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつつ、車の簾傍などに長き枝を葺き指したれば、ただ卯花重をここに懸けたるやつにぞ見えける。供なる男どももいみじう笑ひつつ、網代をさへつきうがちつつ、「こゝまだし、「こゝまだし」とさし集むなり。

人もあはなんと思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふがひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いとくちをし。近う來ぬれば、「さりともしとかうて止まんやは。この車のさまをだに人に語らせてこそ止まめ」とて、一條殿の許にとどめて、「侍從殿やおはす、杜鵑の聲聞きて、今なんかへり侍る」といはせたる。使、「只今まゐる。あが君〜となんの給へる。さぶらひに間擴げて、指貫たてまつりつ」といふに、待つべきにもあらずとて、はしらせて、土御門さまへやらするに、いつの間にか装束しつらん、帯は道のままにゆひて、しば〜と追ひくる。供に侍、雑色、ものはかで走るめる。とくやれどいとど忙しくて、土御門にきつきめるにぞ、喘ぎ惑ひておはして、まつこの車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつつの人の乗りたるとなん更に見えぬ。猶おりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもも興じ笑ふ。「歌はいかにか、それ聞かん」とのたまへば、「今御前に御覽せさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「などか他御門のやつにあらば、この土御門しもつへもなく造りそめけん」と、今日こそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸らんずらん。こなたさまは唯後れじと思ひつるに、人目も知らず走られたるを、あう往かんこそいとすさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし、うちへ」などいふ。「それも烏帽子にてはいかでか」「とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば、笠なき男ども、唯ひきにひき入れつ。一條より笠を持てきたるをささせて、うち見かへりうち見かへり、「このたびはゆる〜と、物憂げにて、卯の花ばかりを取りおはするをかし。

さて參りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。うらみつる人々、怨じ心うがりなが

ら、藤侍從、一條の大路走りつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。「さていつら歌は」と問はせ給ふ。かう〜と啓すれば、「くちをし」の事や。つへ人などの聞かんに、いかでかをかしき事なくてあらん。その聞きつらん所にて、ふとこそよまましか。あまり儀式ことぞめつらんぞ怪しきや。ここにてもよめ。いふかひなし」などのたまはずれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ合せなどする程に、藤侍從の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄様に、

ほととぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし

かへしまつらんなど、同へ硯とりに遣れば、「ただこれして疾くいへ」とて、御硯の蓋に紙など入れて賜はせられたれば、「宰相の君かきたまへ」といふを、「なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、雷もおどろおどろしう鳴りたれば、物も覺えず、唯おろしにおろす。職の御曹子は、部をぞ御格子にまゐり渡し惑ひしほどに、歌のかへりことも忘れぬ。

いと久しく鳴りて、少し止むほどはくらくなりぬ。只今なほその御返事たてまつらんとて、取りかかるほどに、人々上達部など、雷の事申しにまゐり給ひつれば、西面に出でて物など聞ゆるほどにまぎれぬ。人はた、「さしてえたらん人こそ知らめ」とてやみぬ。「大かたこの事に宿世なき日なり、どうじて、今はいかでさなん往きたりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「今もなほそれ往きたりし人どものいはざらん。されどもさせじと思ふにこそあらめ」と物しげに思しめしたるもいとをかし。「されど今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべき事かは」などのたまはせしかば、やみにき。

二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君、「いかにぞ手づから折りたるといひし下藤は」とのたまふを聞かせ給うて、「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙のちりたるに、

したわらびこそこひしかりけれ

とかかせ給ひて、「もといへ」と仰せらるるをかし。

ほととぎすたづねてききし聲よりも

と書きて参らせたれば、「いみじうつけばりたりや。かうまでだに、いかで杜鵑の事をかけつらん」と笑はせ給ふも恥しながら、「何か、この歌すべて詠み侍らじとなん思ひ侍るものを、物のりをりなど人のよみ侍るにも、よめなど仰せらるれば、えさぶらぶまじき心地なんし侍る。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅のりをりは菊などをよむ事は侍らん。されど歌よむといはれ侍りしすゑは、少し人にまさりて、そのをりの歌はこれこそありけれ、さはいへどそれが子なればなどいはれたらんこそ、かひある心地し侍らめ。露とり分きたるかたもなくて、さすがに歌がましく、われはと思へるさまに最初に詠みいで侍らんなん、なき人のためにとほしく侍る」なごまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、「さうばただ心にまかす。われは詠めともいはじ」「このたまはすれば、「いと心やすくなり侍りぬ。今は歌のこと思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、庚申させ給ひて、内大臣殿、いみじう心まうけさせ給へり。

夜うち更くるほどに題出して、女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがし出すに、宮の御前に近くさぶらひて、物啓など他事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌はよまで離れぬたる、題とれ」とのたまふを、「さる事承りて、歌よむまじくなり侍れば、思ひかけ侍らす」「異様な事、まことにさる事は侍る。などが許させ給ふ。いとあるまじき事なり。よし異時は知らず、今宵はよめ」など責めさせ給へど、けぎよつ聞きも入れて侍ふに、こと人ども詠み出して、よしあしなど定めらるるほどに、いささかなる御文をかきて賜はせたり。あけて見れば、

もとすけが後といはるる君しもやこよひの歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞ類なきや。いみじく笑へば、「何事ぞ〜」と大臣ものたまふ。

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまじそよままし

「いみじき事なむらはすば、千歌なりとも、これよりぞ出でまつて来まし」と啓す。

「九六段」

職におはします比

「九七段」

御かた〜公達上人など、御前に人多く侍へば、廂の柱によりかかりて、女房と物語してゐたるに、物をなげ賜はせたる。あけて見れば、「思ふべしやいなや、第一ならずばいかが」と問はせ給へり。

御前にて物語などする序にも、「すべて人には一に思はれずば、さらに何にかせんに。唯いみじうに生まれ、悪しうせられてあらん。二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらん」などいへば、一乗の法なりと人々わらふ事のすぢなめり。

筆紙たまはりたれば、「九品蓮臺の中には下品といふとも」と書きてまゐらせたれば、「無下に思ひ屈じにけり。いとわるし。いひそめつる事は、さこそ有らめ」とのたまはすれば、「人に隨ひてこそ」と申す。「それがわるきぞかし。第一の人に、又一に思はれんとこそ思はめ」と仰せらるるもいとをかし。

「九八段」

中納言殿まぬらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじき骨をえて侍れ。それをはらせて参らせんとするを、おぼろけの紙ははるまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじく侍る。さらにまだ見ぬ骨のさまなりとなん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」とことたかく申し給へば、「さて扇のにはあらで海月のなり」と聞ゆれば、「これは隆家がことにしてん」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちに入れつべけれど、人ごと「な落しそ」と侍ればいかがはせん。

「九九段」

雨のつちはへ降るころ、今日も降るに、御使にて式部丞信經まゐりたり。例の



茵さし出したるを、常よりも遠く押し遣りてめたれば、「あれは誰が料ぞ」といへば、笑ひて「かかる雨にのぼり侍らば足形つきて、いとふびんに汚なげになり侍りなん」といへば、「なごせんぞくわつ」「そはなごめ」といふを、「これは御前にかしこつ仰せらるるにはあらず、信經が足形の事を申さざらましかば、えの給はざらまし」とて、かへすぐいひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ほめかなと傍いたく。

「はやう皇太后宮に、えぬたきといひて名高き下仕なんありける。美濃守にてうせにける藤原時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて、これやこの高名のえぬたき、などさも見えぬといひける返事に、それは時柄もさも見ゆる名なりといひたりけるなん、敵に選りてみいかでさる事はあらん。殿上人上達部までも、興ある事にの給ひける。又さりけるなめりと、今までかくいひ傳ふるは」と聞えたり。「それ又時柄がいはせたるなり。すべて題出しがらん、詩も歌もかしこき」といへば、「實にさる事あることなり。さらば題出さん、歌よみ給へ」といふに、「いとよき事、ひとつはなにせん、同じうは數多つかう奉らん」などいふほどに、御題は出でぬれば、「あなおそろし、まかりいでぬ」とて立ちぬ。「手もいみじう眞字も假字もあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなんある」といふもをかし。

作物所の別當するころ、誰が許にやりけるにかあらん、物の繪やつやるとて、「これがやうにつかうまつるべし」と書きたる眞字のやう、文字の世に知らずあやしきを見つけて、それが傍に、「これがままたつかうまつらば、異様にこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々取りて見ていみじう笑ひけるに、大腹だちてこそつらみしか。

「一〇〇段」

淑景舎春宮にまゐり給ふほどの事なんど、いかがはめでたからぬ事なし。正月十日にまゐり給ひて、宮の御方に御文などは繋う通へど、御對面などはなきを、二月十日、宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみかぎつくるひ、女房なども皆用意したり。夜半ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなく明けぬ。

登華殿の東の二間に御しつらひはしたり。翌朝いと疾く御格子まゐりわたして、

あかつきに、殿、うへ、ひとつ御車にて参り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東に隔てて、北向に立てて、御疊褥うち置きて、御火桶ばかりまゐりたり。御屏風の南御帳の前に、女房いと多くさぶらぶ。

こなたにて御髪などまるるほど、「淑景舎は見奉りしや」と問はせ給へば、「まだいかでか。積善寺供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「その柱と屏風とのもとによりて、わがうしろより見よ。いとつづくし君ぞ」との給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。

紅梅の固紋、浮紋の御衣どもに、紅のうちたる御衣、三重がうへに唯引き重ねて奉りたるに、「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。今は紅梅は著でもありぬべし。されど萌黄などのにくければ。紅にはあはぬなり」との給はすれど、唯いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣に、やがて御容のにはひ合せ給ふぞ、なほことよき人も、かくやおはしますらんとぞゆかしき。

さてぬざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屏風に添ひつきてのぞくを、「あしかんめり、うしろめたきわざ」と聞え、こつ人々もいとをかし。御障子の廣うあきたれば、いとよく見ゆ。うへは白き御衣ども、紅のはりたる二つばかり、女房の裳なぬめり。引きかけておくによりて、東面におはすれば、ただ御衣などぞ見ゆる淑景舎は北にすこしよりて南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃きあやの御衣、少しあかき蘇枋の織物の袿、萌黄の固紋のわかやかなる御衣奉りて、扇をつとさし隠し給へり。いとみじく、げにめでたく美しく見え給ふ。殿は薄色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども、御紐さして、廂の柱に後をあてて、こなたさまに向きておはします。めでたき御有様どもを、うちゑみて、例の戲言をせさせ給ふ。淑景舎の、繪に書きたるやうに、美しげにてぬさせ給へるに、宮いとやすらかに、今すこしおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣にほひ合せ給ひて、なほ類はいかでかと思えさせ給ふ。

御手水まゐる。かの御かたは宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人して持てまゐるめり。唐廂のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらぶ。狭して、かたへは御おくりして皆歸りにけり。櫻の汗衫、萌黄紅梅などいみじく、汗衫長く裾引き、取り次ぎまゐらす、いとなまめかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ、小將の君、北野の三位の女、宰相の君などぞ近くはある。あなをかしたるほどに、この御かたの御手水番の采女、青末濃の唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎてまゐるほど、これはた

おほやけしう唐めきてをかし。

御膳のをりになりて、御髪あげまゐりて、藏人どもまかなひの髪あげてまゐらする程に、隔てたりつる屏風も押しあけつれば、垣間見の人、かくれ養とられたる心地して、あかずわびしければ、御簾と几帳の中にて、柱のもとよりぞ見奉る。衣の裾裳など、唐衣は皆御簾のそとに押し出されたれば、殿の、端のかたより御覽じ出して「誰そや、霞の間よりみゆるは」と咎めさせ給ふに、「少納言が、物ゆかしがりて侍るならん」と申させ給へば、「あなはづかし。かれはふるき得意を、いとにくげなる女ども持ちたりともこそ見侍れ」などのたまふ御けしき、いとしたり顔なり。

あなたにも御膳まゐる。「羨しく、かた／＼のは皆まゐりぬめり。疾くきこしめして、翁女におろしをだに給へ」など、ただ日ひと日、猿樂ことをし給ふ程に、大納言殿、三位中将、松君も將てまゐり給へり。殿いつしかと抱き取り給ひて、膝にすゑ給へる、いとつづくし。狭き縁に、所せき日の御装束の下襲など引きちらされたり。大納言殿はもの／＼しう清げに、中将殿はらう／＼しう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、うへの御宿世こそめでたけれ。御圍座など聞え給へど、「陣につき侍らん」とて急ぎ立ち給ひぬ。

しばしありて、式部の丞ながしとかや、御使にまゐりたれば、御膳やどりの北によりたる間に、褥さし出でて居ゑたり。御かへりは今日疾く出させ給ひつ。まだ褥も取り入れぬほどに、東宮の御使に、ちかよりの少將まゐりたり。御文とり入れて、渡殿は細き縁なれば、こなたの縁に褥さし出でたり。御文とり入れて、殿、うへ、宮など御覽じわたす。「御返はや」などあれど、頼にも聞え給はぬを、某が見侍れば出で給はぬなぬめり。さらぬをりは間もなくこれよりぞ聞え給ふなる「など申し給へば、御面はすこし赤みながら、少しうち微笑み給へる、いとめでたし。「疾く」などうへも聞え給へば、奥さまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、もろともに書かせ奉り給へば、いとどつつましげなり。宮の御かたより、萌黄の織物の小袷袴おし出されたれば、三位中将がつけ給ふ。くるしげに思ひて立ちぬ。

松君のをかしう物のたまふを、誰も／＼つづくしがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引出でたらんに、わろくは侍らじかし」などの給はする。げになどか、今までさる事のとぞ心もとなき。

未の時ばかりに、筵道まゐるといふ程もなく、うちそよめき入らせ給へば、宮も

こなたに寄せ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。廊に殿上人いと多かり。殿の御前に宮司召して菓子着めさす。「人々酔はせ」などおほせらる。誠に皆ゑひて、女房と物いひかはすほど、かたみにをかしと思ひたり。

日の入るほどに起きさせ給ひて、山井の大納言召し入れて、御うちまゐらせ給ひて、かへらせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御衣のゆふばえなども、かしこければとどめつ。山井の大納言は、いりたたぬ御兄にても、いとよくおはすかし。にほひやかなる方は、この大納言にもまさり給へるものを、世の人は、せちにいひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山井の大納言、三位中将、藏人頭など皆さぶらひ給ふ。

宮のほらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ参り給へり。「今宵はえ」などしぶらせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、また春宮の御使しきりにある程いとさわがし。御むかへに、女房、春宮のなども参りて、「疾く」とそそのかし聞ゆ。「まつさば、かの君わたし聞え給ひて」との給はすれば、「さりともしいかでか」とあるを、「なほ見おくり聞えん」などの給はするほど、いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まつ淑景舎わたり給ひて、殿などかへらせ給ひてぞ、のぼらせ給ふ。道のほども、殿の御猿樂ことにいみじく笑ひて、ほとほとうちはしよりも落ちぬべし。

「一〇一段」

殿上より梅の花の皆散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、「唯はやく落ちにけり」と答へたれば、その詩を誦じて、黒戸に殿上人いと多く居たるを、うへの御前きかせおはしまして、「よろしき歌など詠みたらんよりも、かかる事はまさりたりかし。よついらへたり」と仰せ給はる。

「一〇二段」

二月のつこもり、風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち降りたるほど、黒戸に主殿司きて、「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、公任の君

宰相中將殿のとあるを見れば、ふところ紙に、ただ、

すこし春あるにこちこそすれ

とあるは、實に今日のけしきにいとよくあひたるを、これがもとは、いかがつくべからんと思ひ煩ひぬ。「誰々が」と問へば、それ／＼といふに、皆恥しき中に、宰相中將の御答をば、いかがことなしにひひ出でんと、心ひとつに苦しきを、御前に御覽せさせんとすれども、うへのおはしまして、おほとこのもりたり。主殿司はとく／＼といふ。實に遅くさへあらんはとりどころなければさばれとて、

そらさむみ花にまがへてするゆきに

と、わななく／＼書きてとらせて、いかが見たまふらんと思ふもわびし。

これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覺ゆるを、俊賢の中將など、なほ内侍に申してなさんと定めたまひしとばかりぞ、兵衛佐中將にておはせしが語りたまひし。

「一〇三段」

はるかなるもの 千日の精進はじむる日。半臂の緒ひねりはじむる日。陸奥國へゆく人の逢阪の關こゆるほど。うまれたる兒のおとなになるほど。大般若經讀經一人して讀み始むる。十二年の山ごもりの始めてのぼる日。

「一〇四段」

方弘はいみじく人に笑はるるものかな。親などいかに聞くらん。供にありくものども、いと人々しきを呼びよせて、「何しにかかるものにはつかはるるぞ、いかが覺ゆる」など笑ふ。

物いとよくするあたりにて、下襲の色、つへのきぬなども、人よりはよくて著たるを、「これは他人に著せばや」などいふに、實にぞ詞遣などのあやしき。里に

宿直物とりやるに、「男一人まかれ」といふに、「一人して取りにまかりなんものを」といふに、「あやしの男や、一人して二人の物をばいかで持つべきぞ。一升瓶に二升は入るや」といふを、なでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて、「御返事疾く」といふを、「あなにくの男や、竈に豆やくべたる。この殿上の墨筆は、何者の盗みかくしたるぞ。飯酒ならばこそ、ほしうして人の盗まめ」といふを、又わらふ。

女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上人は誰々がありつる」と人の問へば、それかれなど四五人ばかりといふに、「又は」と問へば、「さてはいぬる人もぞありつる」といふを、また笑ふも、又あやしき事にこそはあらめ。「人間に寄りきて、わが君こそまつ物きこえん。まつ／＼人ののたまへる事ぞといへば、何事にかとて几帳のもとによりたれば、軀籠により給へといふに、五體ごめにとなんいひつる」といひて、また笑ふ。

除目の中の夜、指油するに、燈臺のうちしきを踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようたらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺はたふれぬ。襪はうちしきにつきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。

頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤に人もつかず。それに方弘は豆一盛を取りて、小障子のうしろにてやをら食ひければ、ひきあらはして笑はるる事ぞかぎりなきや。

「一〇五段」

見ぐるしきもの 衣の背縫かたよせて著たる人。又のけくびしたる人。下簾襪げなる上達部の御車。例ならぬ人の前に子を率ていきたる。袴著たる重の足駄はきたる、それは今様のものなり。つば装束したる者の、急ぎて歩みたる。法師、陰陽師の、紙冠して被したる。

また色黒つ、瘦せ、にくげなる女のかづらしたる。鬢がちにやせ／＼なる男と晝寝したる、何の見るかひに臥したるにかあらん。夜などはかたちも見えず、又おしなべてさる事となりたれば、我にくげなりとて、起き居るべきにもあらずかし。翌朝疾く起き往ぬる、めやすし。晝晝寐して起きたる、いとよき人こそ今少しをかしけれ。えせかたちはつやめき寐はれて、ようせすば、頬ゆがみもしつべし。互に見かはしたらん程の、いけるかひなきよ。色黒き人の、生絹單著たる、いと見ぐるしかし。のしひとへも同じくすきたれど、それはかたはにも見えず。ほ

その通りたればにやあらん。

「一〇六段」

いひにくきもの 人の消息、仰事などの多かるを、序のままに、初より奥まで  
いといひにくし。返事また申しにくし。恥しき人の物おこせたるかへりごと。お  
となになりたる子の、思はずなること聞きつけたる、前にてはいといひにくし。

「一〇七段」

關は 逢阪の關。須磨の關。鈴鹿の關。くさだの關。白川の關。衣の關。ただ  
こえの關は、はばかりの關と、たとしへなくこそ覺ゆれ。

よこばしりの關。清見が關。みるめの關。よしなよしなの關こそ、いかに思ひ返  
したるならんと、いと知らまほしけれ。それを勿來の關とはいふにやあらん。逢  
阪などをまで思ひ返したらば、佗しからんかし。足柄の關。

「一〇八段」

森は 浮田の森。うへ木の森。岩瀬の森。たちぎの森。

「一〇九段」

原は あしたの原。粟津の原。篠原。萩原。園原。

「一一〇段」

卯月の晦日に、長谷寺にまつづとて、淀の渡といふものをせしかば、船に車を  
かき居ゑてゆくに、菖蒲菰などの末みじかく見えしを、取らせたれば、いと長か  
りける。菰つみたる船のありきこそ、いみじつをかりしかりか。高瀬の淀には、  
これをよみけるなめりと見えし。

三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひ  
さを著て、脛いとたかき男童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

「一一一段」

常よりもことにきこゆるもの 元三の車の音。鳥のこゑ。暁のしはぶき。物の  
音はさらなり。

「一一二段」

繪にかきておとるもの 瞿麥。さくら。山吹。物語にめでたしといひたる男女  
のかたち。

かきまさりするもの 松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。

「一一三段」

冬はいみじくさむぎ。夏は世にしらすあつき。

「一一四段」

あはれなるもの 孝ある人の子。鹿の音。よき男のわかきが御嶽精進したる。へ  
だて居てうちおこなひたる暁のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人な  
どの目さまして聞くらん思ひやり、まつづる程のありさま、いかならんとつし  
みたるに、平にまつでつきたるこそいとめでたけれ。烏帽子のさまなどぞ少し入  
わるき。なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまつづとこそは知りたれ。  
右衛門佐信賢は「あぢきなきことなり。ただ清き衣を著てまつでんに、なでふ  
事あらん、必よもあしくてよと、御嶽のたまはじ」とて、三月晦日に、紫のいと  
濃き指貫、しるぎ、青山吹のいみじくおどろくしきなどにて、隆光が主殿亮な  
るは、青色の紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うちつづき詣でたりける  
に、歸る人もまつづる人も、珍しく怪しき事に、「すべてこの山道に、かかる姿の

人見えざりつ」とあさましがりしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日の程に、筑前の守うせにしかはりになりにしこそ、實にいひけんに違はずもと聞えしか。これはあはれなる事にはあらねども、御嶽のついでなり。

九月三十日、十月一日の程に、唯あるかなきかに聞きつけたる蟋蟀の聲。鶏の子いだきて伏したる。秋深き庭の淺茅に、露のいろいろ玉のやうにて光りたる。川の風に吹かれたる夕ぐれ。曉に目覺したる夜なども、すべて思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて心にしも任せぬ。山里の雪。

男も女も清げなるが黒き衣著たる。二十日六七日ばかりの曉に、物語して居明して見れば、あるかなきかに心細げなる月の、山の端近く見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うち過したる僧たちの行したる。荒れたる家に律はひかかり、蓬など高く生ひたる庭に、月の隈なく明き。いと荒つはあらぬ風の吹きたる。

「一一五段」

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき景色なるはいとわろし。

初瀬などに詣でて、同などするほどは、榎階のもとに車引きよせて立てるに、帯ばかりしたる若き法師ばらの、履といふものをはきて、聊つつみもなく下り上ると、何ともなき經のはしうち讀み、俱舎の頌を少しいひつづけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいとあやふく、傍によりて高欄おさへてゆくものを、ただ板敷などのやうに思ひたるもをかし。「同じたり」などいひて、沓ども持てきておろす。衣かへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳唐衣などこはくしくさうぞきたるもあり。深沓半靴などはきて、廊のほどなど沓すり入るは、内裏わたりめきて又をかし。

内外など許されたる若き男ども、家の子など、又立ちつづきて、「そこもとはおちたる所に侍るめり。あがりたる」など教へゆく。何者にかあらん。いと近くさし歩み、さいだつものなどを、「しばし、人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、實にとて少し立ち後るるもあり。又聞きも入れず、われまづ疾く佛の御前にとゆくもあり。局にゆくほど、人の居並みたる前を通り行けば、いとつたてあるに、犬ふせぎの中を見入れたる心地、いみじく尊く、などて月頃もまつでず過しつらんとて、まつ心もおこなる。

御燈常燈にはあらで、うちに又人の奉りたる、おそろしきまで燃えたるに、佛のきら／＼と見え給へる、いみじくたふとげに、手ごとに文を捧げて、禮盤に向ひてるぎ誓ふも、さばかりゆすりみちて、これはと取り放ちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしほり出したるこゑ／＼の、さすがに又紛れず。「千燈の御志は、なにがしの御ため」と僅に聞ゆ。帶うちかけて拜み奉るに、「ここにかうさぶらぶ」といひて、櫛の枝を折りて持てきたるなどの尊きなども猶をかし。犬ふせぎのかたより法師よりきて、「いとよく申し侍りぬ。幾日ばかり籠らせ給ふべき」など問ふ。「しか／＼の人こもらせ給へり」などいひ聞かせていぬるすなはち、火桶菓子など持てきつつ貸す。半挿に手水など入れて、盥の手もなきなどあり。「御供の人はかの坊に」などいひて呼びもて行けば、かはりがはりぞ行く。誦經の鐘の音、わがななりと聞けば、たのもしく聞ゆ。

傍によるしき男の、いと忍びやかに顔などつく。立居のほど心あらんと聞えたるが、いたく思ひ入りたる氣色にて、いも寝す行ふこそいとあはれなれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊げなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などを、けざやかに聞きにくくはあらで、少し忍びてかみたるは、何事を思ふらん、かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。

日ころこもりたるに、晝は少しのどかにぞ、早うはありし。法師の坊に、男ども童などゆきてつれ／＼なるに、ただ傍に貝をいと高く、俄に吹き出したるこそおどろかるれ。清げなるたて文など持せたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山響きあひてきら／＼しう聞ゆ。鐘の聲ひびきまさりて、いつこならんと聞く程に、やんごとなき所の名つちいひて、「御産たひらかに」など教化などしたる、すずろにいかならんと覺束なく念ぜらるる。これはただなる折の事なうめり。正月などには、唯いと物さわがしく、物のぞみなどする人の隙なく詣づる見るほどに、行もしやられず。

日のうち暮るるにまつづるは、籠る人なうめり。小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などほうとたておくと見れば、ただ局に出でて、犬ふせぎに簾垂をさら／＼とかくるさまなどぞいみじく、しつたたるは安げなり。そよ／＼とあまたおりて、大人だちたる人の、いやしからず、忍びやかなる御前はひにて、かへる人にやあらん、「そのうちあやふし。火の事制せよ」などいふもあり。

七つ八つばかりなる男子の、愛敬つきおこりたる聲にて、さぶらひ人呼びつけ、

物などいひたるけはひもいとをかし。また三つばかりなるちこのねおびれて、うちしはぶきたるけはひもつつくし。乳母の名、母などうち出でたらんも、これならんといと知らまほし。

夜ひと夜、いみじうのしりおこなひあかす。寐も入らざりつるを、後夜などはてて、少しうちやすみ寐ぬる耳に、その寺の佛經を、いとあら／＼しう、高くうち出でて讀みたるに、わざとたふとしともあらず。修行者たちたる法師のよむな／＼と、ふとうち驚かれて、あはれに聞ゆ。

また夜などは、顔知らで、人々しき人の行ひたるが、青鈍の指貫のはたばりたる、白き衣どもあまた著て、子どもな／＼と見ゆる若き男の、をかしううちさうぞきたる、童などして、さぶらひの者ども、あまたかしこまり圍遶したるもをかし。かりそめに屏風たてて、額などすこしくめり。顔知らぬは誰ならんといとゆかし。知りたるは、さな／＼と見るもをかし。若き人どもは、とかく肩どもなどの邊にさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず、別當など呼びて、打ちささめき物語して出でぬる、えせものとは見えすかし。

二月晦日、三月朔日ころ、花盛に籠りたるもをかし。清げなる男どももの、忍ぶと見ゆる二三人、櫻青柳などをかして、くくりあげたる指貫の裾も、あてやかに見なざる、つきづきし男に、装束をかしたる餌袋いだけせて、小舎人童ども、紅梅萌黄の狩衣に、いろ／＼のきぬ、摺りもどろかしたる袴など著せたり。花など折らせて、待めきて、細やかなるものなど具して、金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人あれど、いかでかは知らん。打ち過ぎていぬるこそ、さすがにさう／＼しけれ。「氣色を見せましものを」などいふもをかし。

かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所に、つかふ人のかぎりしてあるは、かひなくこそ覺ゆれ。猶おなじほどにて、一つ心にをかしき事も、さまざまいひ合せつべき人、かならず一人二人、あまたも誘はまほし。そのある人の中にも、口をしからぬもあれども、目馴れたるなるべし。男などもさ思ふにこそあめれ。わざと尋ね呼びもてありくめるはいみじ。

「一一六段」

こころづきなきもの 祭、御襖など、すべて男の見る物見車に、ただ一人乗りて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんことながらずとも、わかき男ども

の物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。すきかげに唯一人がよひて、心ひとつにまもり居たらんよ、いかばかり心せばく、けにくきならんと思ひゆる。物へもいき、寺へもまうつる日の雨、つかふ人などの、「我をばおぼさず、某こそ只今時の人」などいふをほのききたる。人よりは少しくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すずるなる物怨し、われさかしがる。

「一一七段」

わびしげに見ゆるもの 六七月の午末の時ばかりに、穢げなる車にえせ牛かけで、ゆるがし行くもの。雨ふらぬ日はりむしろしたる車。降る日はりむしろせぬも。年老いたる乞兒。いと寒きをりも、暑きにも、下種女のなりあしきが子を負ひたる。ちひさき板屋の黒つきたなげなるが、雨にぬれたる。雨のいたく降る日、ちひさき馬に乗りて前駈したる人の、かうぶりもひしげ、袍も下襲もひとつになりたる、いかにわびしからんと思えたり。夏はされどよし。

「一一八段」

あつげなるもの 隨身の長の狩衣。袖の袷。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪おほかる。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨。日中の時など行ふ。又おなじころの銅の鍛冶。

「一一九段」

はづかしきもの 男の心のうち。いさとき夜居の僧。密盗人のさるべき隈に隠れ居て、いかに見るらんを、誰かはしらん、暗きまざれに、懐に物引き入る人もあらんかし。それは同じ心にをかしと思ふらん。

夜居の僧は、いとほづかしきものなり。若き人の集りては、人のうへをいひ笑ひ、誇り憎みもするを、つく／＼と聞き集むる心のうちもはづかし。「あなうたて、かしがまし」など、御前近き人々の物けしきばみいふを聞き入れず、いひ／＼てのはては、うち解けてぬめる後もはづかし。

男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし、たのむるこそ恥しけれ。まして情あり、このましき人に知られたるなどは、愚なりと思ふべくもてなさすかし。心のうちにのみもあらず。又皆これが事はかれに語り、かれが事はこれに言ひきかすべかんめるを、我が事は知らず、かく語るをば、こよなきなんめりと思ひやすらんと思ふこそ恥しけれ。いであはれ、又あはじと思ふ人に逢へば、心もなきものなんめりと見えて、恥しくもあらぬものぞかし。いみじくあはれに、心苦しげに見すてがたき事などを、いささか何事とも思はぬも、いかなる心ぞとこそあさましけれ。さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕の人などをかたらひて、ただにもあらずなりたる有様などを、知らずやみぬるよ。

「一二〇段」

無徳なるもの 潮干の渦なる大なる船。髪みじかき人の、かつらとりおろして髪けづるほど。大なる木の風に吹きたふされて、根をささげてよこたはれふせる。相撲のまけているうしろ手。えせものに従者かんがふる。翁の髻はなちたる。人の妻などの、すずるなる物怨じして隠れたるを、かならず尋ねさわがんものをと思ひたるに、さしも思ひたらず、ねたげにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば、心と出できたる。狛犬しく舞ふものの、おもしろがりはやり出でて踊る足音。

「一二一段」

修法は、佛眼眞言など讀みたてまつりたる、なまめかしうたふとし。

「一二二段」

はしたなきもの 他人を呼ぶに、我もとてさし出でたるもの。まして物とらするをりはいとど。おのづから人のうへなごうち言ひ誇りなどもしたるを、幼き人の聞き取りて、その人のあるまへにいひ出でたる。

あはれなる事など人のいひてうち泣くに、實にいとあはれとは聞きながら、涙のふつと出でぬ、いとはしたなし。泣顔つくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事を聞くには、又すずるに唯いできにこそ出でくれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院御棧敷のあなたに御輿を留めて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有様にて、かしこまり申させ給ふが、世に知らずいみじきに、誠にこぼるれば、化粧したる顔も皆あらはれて、いかに見苦しがるらん。宣旨の御使にて、齋信の宰相中將の御棧敷に参り給ひしこそ、いとをかしう見えしか。ただ隨身四人、いみじうさうぞきたる、馬ぞひのほそうしたてたるばかりして、二條の大路、廣うきよらにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ参りて、少し遠くよりおりて、そばの御簾の前に侍ひ給ひし、院の別當ぞ申し給ひし。御返し承りて、又はしらせ歸り参り給ひて、御輿のもとにて奏し給ひし程、いふも愚なりや。

さてうち渡らせ給ふを見奉らせ給ふらん女院の御心、思ひやりまめらすは、飛び立ちぬべくこそ覚えしか。それには長泣をして笑はるぞかし。よろしききは人だに、なほこの世にはめでたきものを、かうだに思ひまめらすもかしこしや。

「一二三段」

關白殿の黒戸より出でさせ給ふとて、女房の廊に隙なくさぶらふを、「あないみじの御許だちや翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらん」と分け出でさせ給へば、戸口に人々の、色々の袖口して御簾を引き上げたるに、權大納言殿、御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いとものくしつきよげに、よそほしげに、下襲の裾ながく、所狭くさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人に沓をとらせ給ふよと見ゆ。

山井の大納言、そのつきつきさらぬ人々、くろきものをひきちらしたるやつに、藤壺のへいのもとより、登華殿の前まで居竝みたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御太刀など引きつくるひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿の、清涼殿の前にたたせ給へば、それは居させ給ふまじきなんめりと見る程に、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ、猶いかばかりの昔の御行のほどならんと見奉りしこそいみじかりしか。

中納言の君の忌の日とて、くすしがり行ひ給ひしを、「たへ、その珠數しばし。行

ひてめでたき身にならんとか」とて集りて笑へど、なほいとこそめでたけれ。御前に聞しめして、「佛になりたらんこそ、これよりは勝らめ」とて打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まぬらす。大夫殿の居させ給へるを、かへすく聞ゆれば、「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。ましてこの後の御ありさま、見奉らせ給はましかば、理とおぼしめされなまし。

「一二四段」

九月ばかり、夜一夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露、こぼつばかりぬれかかりたるも、いとをかし。透垣、羅文、薄などの上にかいたる蜘蛛の巣の、こぼれ残りて、所々に糸も絶えざまに雨のかかりたるが白き玉を貫きたるやつなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふと上様へあがりたる、いみじういとをかしといひたること人の心地には、つゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

「一二五段」

七日の若菜を、人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに、見も知らぬ草を、子供の持てきたるを、「何とか是をばいふ」といへど、頼にもいはず。「いざ」など此彼見合せて、「みみな草となんいふ」といふ者のあれば、「うべなりけり、聞かぬ顔なるは」など笑ふに又をかしげなる菊の生ひたるを持てきたれば、

つめどなほみみな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり

といはまほしけれど、聞き入るべくもあらず。

「一二六段」

二月官廳に、定考といふ事するは何事にあらん。釋奠もいかならん。孔子など

は掛け奉りてする事なるべし。聰明とて、上にも宮にも、怪しき物など土器に盛りてまぬらす。

「頭辨の御許より」とて、主殿司、繪などやつなる物を、白き色紙につつみて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもてきたり。繪にやあらんと急ぎ取り入れて見れば、餅餠といふものを、二つ立てつつみたるなり。添へたるたて文に、解文のやつに書きて、

「進上餅餠一つつみ、例によりて進上如件、少納言殿に」

とて、月日かきて、「任那成行」とて、奥に、「この男はみづから参らんとするを、書はかたわろしとてまぬらぬなり」といみじくをかしげに書き給ひたり。御前に参りて御覽せざすれば、「めでたくもかかれたるかな。をかしうしたり」など響めさせ給ひて、御文はとらせ給ひつ。「返事はいかがすべからん。この餅餠もてくるには、物などやとらすらん。知りたる人もがな」といふを聞しめして、「惟仲が聲しつる、呼びて問へ」との給はすれば、はしに出でて、「左大辨にも聞えん」と、侍していはすれば、いとよくうるはしうてきたり。「あらず、私事なり。もしこの辨少納言などのもとに、かかる物もてきたる下部などには、することやある」と問へば、「さる事も侍らず、唯とどめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、えさせ給へるか」といへば、「いかがは」と答ふ。唯返しをいみじう赤き薄様に、「みづから持てまうでこぬ下部は、いとれいたうなりとなん見ゆる」とて、めでたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして、「下部さぶらふ」との給へば、出でたるに、「さやうのものぞ、歌よみして遣せ給へると思ひつるに、美々しくもいひたりつるかな。女少しわれはと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語りよけれ。まるなどにさる事はん人は、かへりて無心ならんかし」との給ふ。「則光、成康など、笑ひて止みにし事を、殿の前に人々と多かりけるに、語りまをしたまひければ、いとよく言ひたるとなんの給はせし」と人の語りし。これこそ見苦しき我ぼどもなりかし。

「一二七段」

「などてつかさえはじめたる六位筋に、職の御曹司のたつみの隅の築地の板を



せしぞ、更に西東をもせよかし、又五位もせよかし」などいふことを言ひ出でて、「あぢきなき事どもを。衣などにすすなる名どもをつけけん、いとあやし。衣の名に、ほそながをばさまいひつべし。なぞ汗衫は、しりながといへかし。男の童の著るやうに。なぞからぎぬは、みじかきぎぬとこそいはれ。されどそれは、唐土の人の著るものなれば。うへのきぬの袴、さいふべし。下襲もよし。また大口、長さよりは口ひろければ。袴いとあぢきなし。指貫もなぞ、あしぎぬ、もしはさやうのものは、足ぶくろなどもいへかし」など、萬の事をいひのしるを、「いであなかしがまし、今はいはじ、寐給ひぬ」といふ答に、「夜居の僧のいとわろからん、夜ひと夜こそ猶のたまはめ」と、にくしと思ひたる聲さまにていひ出でたりしこそ、をかかりしにそへて驚かれにしが。

「一二八段」

故殿の御ために、月ごとの十日、御經佛供養せさせ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人いとおほかり。清範講師にて、説く事どもいとかなしければ、殊に物のあはれふかかるとまじき若き人も、皆泣くめり。

終て酒のみ詩誦などするに、頭中將齊信の君、月と秋と期して身いづくにかといふ事をうち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでかは思ひいで給ひけん。

おはします所に分け参るほどに、立ち出でさせ給ひて、「めでたしな。いみじうけうの事にいひたる事にこそあれ」とのたまはすれば、「それを啓しにて、物も見させて参り侍りたるなり。猶いとめでたくこそ思ひはべれ」と聞えさせれば、「ましてさ覺ゆらん」と仰せらるる。

わざと呼びもいで、おのづからあふ所にては、「なかまを、まほに近くは語ひ給はぬ。さすがにくしくなと思ひたるさまにはあらずと知りたるを、いと怪しくなん。さばかり年ころになりぬる得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何事をおもひでにせん」との給へば、「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらん後には、え譽め奉らざらんが口惜しきなり。うへの御前などにて、役とあつまりて譽め聞ゆるに、いかでか。ただおほせかし。かたはらいたく、心の鬼いで来て、言ひにくく侍りなんものを」といへば、笑ひて、「などさる人しも、他目より外に、譽むるたぐひ多かり」との給ふ。「それがにく

からずばこそあらめ。男も女も、けぢかき人をかたひき、思ふ人のいささかあしき事をいへば、腹だちなどするが、わびしう覺ゆるなり」といへば、「たのもしげなの事や」との給ふもをかし。

「一二九段」

頭辨の職にまあり給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。「明日御物忌なるにこもるべければ、丑になりなば悪しかりなん」とてまあり給ひぬ。

つとめて、藏人所の紙屋紙ひきかさねて、「後のあしたは残り多かる心地なんする。夜を通して昔物語も聞え明さんとせしを、鶏の聲に催されて」と、いとみじう清げに、裏表に事多く書き給へる、いとめでたし。御返に、「いと夜深く侍りける鶏のこゑは、孟嘗君のにや」ときこえたれば、たちかへり、「孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の客僅にされりといふは、逢阪の關の事なり」とあれば、

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ阪の關はゆるさじ

心かしくき關守侍るめりと聞ゆ。立ちかへり、

逢阪は人こえやすき關なればとりも鳴かねどあけてまつとが

とありし文どもを、はじめの、僧都の君の額をさへつきて取り給ひてき。後々のは御前に。

さて「逢阪の歌はよみへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ給ふ。「さてその文は、殿上人皆見てしは」との給へば、實に覺しけりとは、これにてこそ知りぬれ。「めでたき事など人のいひ傳へぬは、かひなき業ぞかし。また見苦しければ、御文はいみじく隠して、人につゆ見せ侍らぬ志のほどをくらぶるに、ひとしうこそは」といへば、「かう物思ひしりていふこそ、なほ人々には似ず思へど、思ひ限なくあしうしたりなど、例の女のやうにいはいはんとこそ思ひつるに」とて、いみじう笑ひ給ふ。「こはなぞ、よろこびをこそ聞えぬ」などいふ。「まろが文をかくし給ひける、又猶うれしきことなりいかに心憂くつらからまし。今よりもなほ頼み聞えん」などの給ひて、後に經房の中將「頭辨はいみじう譽め給ふ

とは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の譬めらるるは、いみじく嬉しく、なほ、まめやかにの給ふもをかし。「うれしきことども二つにてこそ。かの譬めたまふなるに、また思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それはめづらしう、今の事のやつにもよるこび給ふかな」との給ふ。

「 一三〇段 」

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、こゑくしていへば、「出でて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、「こは誰ぞ。おどろくしうきはやかなるは」といふに、物もいはで、御簾をもたげて、そよとさし入るるは、呉竹の枝なりけり。「おい、このきみにこそ」といひたるを聞きて、「こぞや、これ殿上に行きて語らん」とて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。

頭辨はとまり給ひて、「怪しくいぬるものどもかな。御前の竹ををりて歌よまんとしつるを、職にまゐりて、同じくば、女房など呼び出でてをと言ひてきつるを、呉竹の名をいと疾くいはれて、いぬるこそをかしけれ。誰が教をしりて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などのたまへば、「竹の名も知らぬものを、なまねたしと思しつらん」といへば、「實ぞえ知らじ」などの給ふ。

まめことなど言ひ合せて居給へるに、「この君と稱すといふ詩を誦して、又集り來れば、」殿上にていひ期しつる本意もなくは、なかかり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」との給へば、「さる事には何の答をかせん。いとなかくならん。殿上にても言ひのしりつれば、うへも聞しめて、興せさせ給ひつる」とかたる。辨もるともに、かへすく同じ事を誦じて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とりどりに物ども言ひかはして歸るとて、なほ同じ事を諸聲に誦じて、左衛門の陣に入るまで聞ゆ。翌朝、いと疾く、少納言の命婦といふが御文まぬらせたるに、「この事を啓したれば、しもなるを召して、」さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず、何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らん」と申せば、「とりなすとも」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譬めけりと聞かせ給ふをば、さ言はるる人をよるこびせ給ふもをかし。

「 一三一段 」

圓融院の御はての年、皆人御服ぬぎなどして、あはれる事を、おほやけより始めて、院の人も、花の衣などいひけん世の御事など思ひ出づるに、雨いたう降る日、藤三位の局に、糞蟲のやうなる童の、大なる木のしるぎにたて文をつけて、「これ奉らん」といひければ、「いつこよりぞ、今日明日御物忌なれば、御部もまぬらぬぞ」とて、しもは立てたる部のかみより取り入れて、さなんとはきかせ奉らず、「物忌なれば見えず」とて、上についさして置きたるを、つとめて手洗ひて、「その巻數」とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てめけてゆけば、老法師のいみじげなるが手にて、

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつるしひしばの袖

とかきたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらん。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかかる事のたまはじ。なほ誰ならん。藤大納言ぞかの院の別當におはせしかば、そのし給へる事なめり。これをうへの御前、宮などに、疾つきこしめさせばやと思ふに、いと心もなけれど、なほ恐しう言ひたる物忌をしてんと念じくらしめて、またつとめて、藤大納言の御許に、この御返しをしてさしおかされたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。

それを二つながら取りて、急ぎ参りて、「かかる事なん侍りし」と、うへもおはします御前にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて、「藤大納言の手のさまにはあらで、法師にこそあめれ」との給はすれば、「さとは誰がしわざにか。すきくしき上達部、僧綱などは誰かはある。それにやかれにや」など、おほめきゆかしがり給ふに、うへ、「このわたりに見えしにこそは、いとよく似たなめれ」と打ちほほませ給ひて、今一すぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へば、「いであな心う、これおほされよ、あな頭いたや、いかで聞き侍らん」と、ただせめに責め申して、恨み聞えて笑ひ給ふに、やうく仰せられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の刀自といふものの供なりけるを、小兵衛が語ひ出したるにやありけん」など仰せらるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、「などかく謀らせおはします。なほうたがひもなく手を打ち洗ひて伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさまも、いとほこりに愛敬つきてをかし。

さてうへの臺盤所にも笑ひののしりて、局におりて、この童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰が文を、誰がとらせしぞ」といへば、しれ／＼とつち笑みて、ともかくもいはで走りにけり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

「一三二段」

つれ／＼なるもの 所さりたる物忌。馬おりぬ雙六。除目に官得ぬ人の家。雨うち降りたるはまして徒然なり。

「一三三段」

つれ／＼なぐさむるもの 物語。暮。雙六。三四ばかりなる兒の物をかすいふ。又いとちひさき兒の物語したるが、笑みなどしたる。菓子。男のうちさるがひ、物よくいふがきたるは、物忌なれどいれつかし。

「一三四段」

とりどころなきもの かたちにくげに心あしき人。みそひめの濡れたる。これいみじうわるき事いひたると、萬の人にくむなることとて、今とどむべきにもあらず。又あとびの火箸といふ事、などてか、世になき事ならねば、皆人知りたらん。實に書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草紙を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、唯思はん事のかぎりを書かんとてありしなり。

「一三五段」

なほ世にめでたきもの 臨時の祭の御前はかりの事は、何事にかあらん。試樂もいとをかし。

春は空のけしきのどかにて、うら／＼とあるに、清涼殿の御前の庭に、掃部司

のたたみどもを敷きて、使は北おもてに、舞人は御前のかたに、これらは僻事にもあらん。所の衆ども、衝重どもとりて前ごとに居ゑわたし、陪従もその日は御前に出で入るぞかし。公卿殿上人は、かはる／＼盃とりて、はてにはやくがひといふ物、男などのせんだにうたてあるを、御前に女そ出でて取りける、思ひかけず人やあらんとも知らぬに、火焼屋よりさし出でて、多く取らんと騒ぐものは、なか／＼うちこぼしてあつかふ程に、かるらかにふと取り出でぬるものには遅れて、かしこき納殿に、火焼屋をして、取り入るこそをかしけれ。掃部司のものども、たたみとるやおそきと、主殿司の官人ども、手ごとに籌とり、すなごならず。

承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子うちて遊ぶを、疾く出でこなんと待つに、有度瀆うたひて、竹のませのもとに歩み出でて、御琴うちたる程など、いかにせんとぞ覺ゆるや。一の舞のいとるはしく袖をあはせて、二人はしり出でて、西に向ひて立ちぬ。つき／＼出づるに、足踏を拍子に合せては、半臂の緒つくるひ、冠袍の領などつくるひで、あやもなきこま山などうたひて舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。

大比禮など舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、終てぬるこそいと口惜しけれど、又あるべしと思ふはたのもしきに、御琴かきかへして、このたびやがて竹の後から舞ひ出でて、ぬぎ垂れるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。掻練の下襲など亂れあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いで更にいへば世の常なり。

このたびは又もあるまじければにや、いみじくこそ終てなん事は口惜しけれ。上達部なども、つづきて出で給ひぬれば、いとさつ／＼しう口をしきに、賀茂の臨時の祭は、還立の御神樂などにこそなぐさめらるれ。庭燎の烟の細うのぼりたるに、神樂の笛のおもしろうわななき、ほそ吹きましたるに、歌の聲もいとあはれに、いみじくおもしろく、寒くさえ氷りて、うちたるきぬもいとつめたう、扇もたる手のひゆるもおほえず。オの男ども召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。

里なる時は、唯渡るを見るに、飽かねば、御社まで行きて見るをりもあり。大なる木のもとに車たてたれば、松の烟たなびきて、火のかげに半臂の緒、きぬのつやも、晝よりはこよなく勝りて見ゆる。橋の板を踏みならしつ、聲合せて舞ふ程もいとをかしきに、水の流るる音、笛の聲などの合ひたるは、實に神も嬉しとおほしめすらんかし。

少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしめけるに、な  
くなりて、上の御社の一の橋のもとにあんなるを聞けば、ゆゆしう、せちに物お  
もひれじと思へど、猶このめでたき事をこそ、更に入思ひすつまじけれ。

「八幡の臨時の祭の名残こそいとつれづれなれ。なごてかへりて又舞ふわざを  
せざりけん、さらばをかしまし。禄を得て後よりまかづるこそ口惜しけれ」  
などいふを、うへの御前に聞き召して、「明日かへりたらん、めして舞はせん」な  
ど仰せらるる。「實にやさぶらぶらん、さらばいかにめでたからん」など申す。う  
れしがりて、宮の御前にも、「猶それまはせさせ給へ」と集りて申しまごひしかば、  
そのたびかへりて舞ひしは、嬉しかりしものかな。さしもや有らざらんと打ちた  
ゆみつるに、舞人前に召すを聞きつけたる心地、物にあたるばかり騒ぐもいと物  
くるほし。

下にある人々まごひのぼるさまこそ、人の従者、殿上人などの見るらんも知ら  
ず、裳を頭にうちかつきてのぼるを、笑ふもことわりなり。

「一三六段」

故殿などおはしまさで、世の中に事出で、物さわがしくなりて、宮又うちにも  
いらせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久  
しう里に居たり。御前わたりおぼつかなきにぞ、猶えかくてはあるまじかりける。

左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮にまゐりたれば、いみじく物こそあはれ  
なりつれ。女房の装束、裳唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしくても侍ふかな。

御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄  
色の裳、紫苑、萩などをかしく居なみたるかな。御前の草のいと高きを、などか  
これは茂りて侍る。はらはせてこそといひつれば、露おかせて御覽せんとて殊更  
にと、宰相の君の聲にて答へつるなり。をかしくも覺えつるかな。御里居いと心  
憂し。かかる所に住居せさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、必侍ふべき物  
に申し召されたるかひもなくなど、あまた言ひつる。語りきかせ奉れとなめりか  
し。参りて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡  
丹の、唐めきをかき事」などの給ふ。「いさ人のにくしと思ひたりしかば、又  
にく侍りしかば」と答へ聞ゆ。「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

實にいかならんと思ひまゐらする御氣色にはあらで、さぶらぶ人たすの、「左大

殿のかたの人しるすぢにてあり」などささめき、さし集ひて物などいふに、下より  
参るを見ては言ひ止め、はなち立てたるさまに見ならはずにくければ、「まぬれ」  
などあるたびの仰をも過して、實に久しつなりにけるを、宮の邊には、唯彼方が  
たになして、虚言なども出で來へし。

例ならず仰事などもなくて、日頃になれば、心細くて打ちながむる程に、長女文  
をもてきたり。「御前より左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、こ  
にてさへひき忍ぶもあまりなり。人傳の仰事にてあらぬなめりと、胸つぶれてあけ  
たれば、かみには物もかかせ給はず、山吹の花びらを唯一つ包ませたまへり。それに

「いはで思ふぞ」

と書かせ給へるを見るもいみじう、日ごろの絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉  
しきに、まつ知るさまを長女も打ちまもりて、「御前にはいかに、物のをりごとに  
思し出で聞えさせ給ふなるものを」とて、「誰も怪しき御ながるとのみこそ侍るめ  
れ。なごか参らせ給はぬ」などいひて、「ここのなる所に、あからさまにまかりて参  
らん」といひていぬる後に、御返事書きてまぬらせんとするに、この歌のもと更  
に忘れたり。「いとあやし。同じふる事といひながら、知らぬ人やはある。こも  
とに覺えながら、言ひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、ちひさき童  
の前に居たるが、「下ゆく水のとこそ申せ」といひたる。なごてかく忘れつるなら  
ん。これに教へらるるもをかし。

御かへりまゐらせて、少しほど經て参りたり。いかがと、例よりはつつまじう  
して、御几帳にはたかくれたるを、「あれは今参か」などと笑はせ給ひて、「にく  
き歌なれど、このをりは、さも言ひつべかりけりとなん思ふを、見つけでは暫時  
えこそ慰むまじけれ」などの給はせて、かはりたる御氣色もなし。

童に教へられしことばなど啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ、あま  
りあなづるふる事は、さもありぬべし」など仰せられて、ついでに、人のなぞく  
あはせしける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にうづ／＼じかりけるが、  
「左の一番はおのれいはん、さ思ひ給へ」などたのむるに、さりとむわるき事は言  
ひ出でじと選り定むるに、「その詞を聞かん、いかに」など問ふ。「唯まかせてもの  
し給へ、さ申していと口惜しつはあらじ」といふを、實にと推しはかる。日いと

近うなりぬれば、「なほこの事のためへ非常にをかき事もこそあれ」といふを、

「いさ知らず。さらばあなたのまれそ」などむつかれば、覺束なしと思ひながら、その日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人など、よき人々多く居並みてあはするに、左の一番にいみじう用意しもてなしたるさまの、いかなる事をか言ひ出でんと見えたれば、あなたの人も、こなたの人も、心もとなく打ちまもりて、「なぞ〜」といふほど、いと心もとなし。「天にはり引」といひ出でたり。右の方の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物もおほえすあさましうなりて、いとにくく愛敬なくて、「あなたによりて、殊更にまけさせんとしけるを」などと、片時のほどに思ふに、右の人をこにおもふて、うち笑ひて、「ややさらば知らず」と、口ひきたれて猿樂しかくるに、「數させ〜」とてさせせつ。「いと怪しき事、これ知らぬもの誰かあらん。更に數さすまじ」と論ずれど、「知らずといひ出でんは、などてかまくるにならざらん」とて、つぎ〜のもの、この人に論じかたせける。いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ事はさこそあれ。「何しかはえ知らずといひし」と、後に恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、御前なるかぎりには、さは思ふべし。「口をししく思ひけん、こなたの人の心地聞し召したりけん、いかににくかりけん」など笑ふ。これは忘れたることかは。皆人知りたることなや。

「一三七段」

正月十日、空いとくらう、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけさやかに照りたるに、えせものの家の後、荒畠などいふものの、土もつるはしうあをからぬに、桃の木わかだちて、いとしもとがちにさし出でたる、片つ方は青く、いま片枝は濃くつややかにて、蘇枋やうに見えたるに、細やかなる童の、狩衣はかけやりなどして、髪は麗しきがのぼりたれば、又紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男子、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、又髪をかしげなる童女の、袖ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち著たる、三四人、「卵槌の木よからん切りておろせ、ここに召すぞ」などいひて、おろしたれば、はしりがひ、とりわき、「我に多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴著たる男走り來て乞ふに、「まで」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたるをりも、さやうにぞあるかし。

「一三八段」

清げなるをのこの、雙六を日ひと日うちて、なほ飽かぬにや、みじかき燈臺に火を明くかかけて、敵の采をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤のうへにたてて待つ。狩衣の領の顔にかければ、片手しておし入れて、いとこはからぬ烏帽子をふりやりて、「さはいみじう呪ふとも、うちはづしてんや」と、心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこりに見ゆれ。

「一三九段」

暮をやんごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきに拾ひおくに、おとりたる人の、ぬすまひもかしこまりたる氣色に、暮盤よりは少し遠くて、およびつつ、袖の下のいま片手にて引きやりつつうちたるもをかし。

「一四〇段」

おそろしきもの 橡のかき。焼けたる所。みつぶぎ。菱。髪おほかる男の頭洗ひてほすほど。栗のいが。

「一四一段」

きよしと見ゆるもの 土器。新しき鏡。疊にさす薦。水を物に入るる透影。新しき細櫃。

「一四二段」

いやしげなるもの 式部丞の爵。黒き髪のすぢぶとき。布屏風の新しき。舊り黒みたるは、さるいふかひなき物にて、なか〜何とも見えす。新しくしたてて、櫻の花多くさかせて、胡粉、朱砂など色どりたる繪書きたる。遣戸、厨子、何も田

舎物はいやしきなり。筵張の車のおそひ。檢非違使の袴。伊豫簾の筋ふとき。人の子に法師子のふとりたる。まことの出雲筵の疊。

「一四三段」

むねつぶるもの 競馬見る。元結よる。親などの心地あしうして、例ならぬけしきなる。まして世の中などさわがしきころ、萬の事おぼえず。又物いはぬ兒の泣き入りて乳をも飲まず、いみじく乳母の抱くにも止まで、久しう泣きたる。例の所などにて、殊に又いちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり、人なごのそのうへなどいふに、まづこそつぶるれ。いみじくにくき人の来るもいみじくこそあれ。昨夜きたる人の、今朝の文のおそき、聞く人さへつぶれる。思ふ人の文とりてさし出でたるも、またつぶる。

「一四四段」

うつくしきもの 瓜に書きたる兒の顔。雀の子のねすなきするにをどりくる。又紅粉などつけて居たれば、親雀の蟲など持て来てくくむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目敏に見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の目に、髪のおほひたるを搔きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。

おほきにはあらぬ殿上わらはの、さつぞきたてられて歩くもうつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。

雛の調度。蓮のうき葉のいとちひさきを、池よりとりあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何もくちひさき物はいとうつくし。

いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白うつくしきが、二藍のつすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをこの、聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし。

鶏の雛の、足だかに、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよくとかがしましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

「一四五段」

ひとばえするもの ことなることなき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。恥しき人に物いはんとするにも、まづさきにたつ。

あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるは、あやにくだちて、物など取りちらして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のままにもえあらぬが、親のきたる所えて、ゆかしかりける物を、「あれ見せよや母」などひきゆるがすに、おとななど物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引き捜し出でて見るこそいとにくけれ。それを「まさな」とばかり打ち言ひて、取り隠さで、「さなせそ、そこなふな」とばかり笑みていふ親もにくし。われえはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

「一四六段」

名おそろしきもの 青淵。谷の洞。鱒板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうおそろし。暴風。ふさう雲。ほごぼし。おほかみ。牛はさめ。らう。らうの長。いにすし。それも名のみならず、みるもおそろし。繩筵。  
強盜。又よろづにおそろし。ひちかさ雨。地楊梅。生靈。鬼ところ。鬼藤。荊棘。枳殼。いりずみ。牡丹。うしおに。

「一四七段」

見るにことなることなき物の文字にかきてことくしきもの 覆盆子。鴨頭草。みづぶき。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。  
いたどりはまして虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。

「一四八段」

むつかしげなるもの 繡物のうら。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巢の中より數多まらばし出したる。裏まだつかぬかはぎぬの縫目。殊に清けならぬ所のくらぎ。

ことなる事なき人の、ちひさき子どもなど數多持ちてあつかひたる。いと深うしも志なき女の、心地あしうして久しく悩みたるも、男の心の中にはむつかしげなるべし。

「一四九段」

えせものの所つるをりの事 正月の大根。行幸のをりの姫大夫。六月十二月の三十日の節折の藏人。

季の御讀經の威儀師。赤袈裟著て僧の文ども讀みあげたる、いとらうくじ。御讀經佛名などの、御裝束の所の衆。春日祭の舍人ども。大饗の所のあゆみ。正月の薬子。卯杖の法師。五節の試の御髪上。節會御陪膳の采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡するをりのかん取。

「一五〇段」

くるしげなるもの 夜泣といふ物する兒の乳母。思ふ人二人もちて、こなたかなたに恨みふすべられたる男。こはき物怪あづかりたる驗者。驗だに早くばよがるべきを、さしもなきを、さすがに人わらはれにあらじと念する、いとくるしげなり。理なく物うたがひする男に、いみじう思はれたる女。

一の所にときめく人も、え安くはあらねど、それはよかんめり。こころいられたる人。

「一五一段」

つらやましきもの 經など習ひて、いみじくたどくしくて、忘れがぢにて、

かへすくおなじ所を讀むに、法師は理、男も女も、くるくるとやすらかに讀みたるこそ、あれがやうに、いつの折とこそ、ふと覺ゆれ。心地など煩ひて臥したるに、うち笑ひ物いひ、思ふ事なげにて歩みありく人こそ、いみじくうらやましけれ。

稻荷に思ひおこして参りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのぼる程に、いささか苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、唯ゆきにさきだちて詣づる、いとうらやまし。二月午の日の曉に、いそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりけり。やうく暑くさへなりて、まことにわびしう、など、かからぬ人も世にあらんものを、何しに詣でつらんとまで涙落ちてやすむに、三十餘ばかりなる女の、つば裝束などにはあらで、ただ引きこえたるが、「まるは七たびまつでし侍るぞ。三たびはまつでぬ、四たびはことにもあらず未には下向しぬべし」と道に逢ひたる人にうち言ひて、くだりゆきしこそ、ただなる所にては目もとまるまじきことの、かれが身に只今ならばやとおほえしか。

男も、女も、法師も、よき子どもちたる人、いみじうつらやまし。髪長く麗しう、さがりばなどめでたき人。やんことなき人の、人にかしづかれ給ふも、いとうらやまし。手よく書き、歌よく詠みて、物のをりにもまつとり出でらるる人。よき人の御前に、女房いと數多さぶらふに、心にくき所へ遣すべき仰書などを、誰も鳥の跡のやうにはなどはあらん、されど下などにあるをわざと召して、御硯おろしてかかせ給ふ、うらやまし。さやうの事は、所のおとななどになりぬれば、實になにはわたりの遠からぬも、事に隨ひて書くを、これはさはあらで、上達部のもと、又始めてまぬらんなど申さする人の女などには、心ことに、うへより始めてつくるはせ給へるを、集りて、戲にねたがりいふめり。

琴笛ならふに、さこそはまだしき程は、かれがやうにいっしかと覺ゆめれ。うち東宮の御乳母、うへの女房の御かたくゆるされたる。三味堂たてて、よひあかつきにいのられたる人。雙六うつに、かたきの賣ききたる。まことに世を思ひすてたるひじり。

「一五二段」

とくゆかしきもの 巻染、村濃、括物など染めたる。人の子産みたる、男女疾く聞かまほし。よき人はさらなり、えせもの、下種の方際だにきかまほし。除目のまだつとめて、かならずする人のなるべきをりも聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

「一五三段」

こころもなきもの 人の許に、頓の物ぬひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でて、今や／＼とくるしう居入りつつ、あなたをまもらへたる心地。子産むべき人の、ほど過ぐるまでさるけしきのなき。遠き所より思ふ人の文を得て、かたく封じたる續飯など放ちあくる、心もとなし。物見に急ぎ出でて、事なりにけりて、白き谷など見つけたるに、近くやりよする程、佗しうおりてもいぬべき心地こそすれ。

知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いはせたる。いつしかと待ち出でたる兒の、五十日百日などのほどになりたる、行末いと心もとなし。頓のものの縫ふに、くらきを針に糸つくる。されど我はさるものにて、ありぬべき所をとらへて人につけさするに、それも急げばにやあらん、頓にもえさし入れぬを、「いで唯なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひがほにえさらぬは、にくささへそひぬ。

何事にもあれ、急ぎて物へ行くをり、まつわがさるべき所へ行くとして、「只今おこせん」と出でぬる車待つ程こそ心もとなけれ。大路往きけるを、さなりけると喜びたれば、外さまに往ぬるいとくちをし。まして物見に出でんとてあるに、「事はなりぬらん」などいふを聞くこそわびしけれ。

子つみける人の、後のこと久しき。物見にや、又御寺まつでなどに、諸共にあるべき人を乗せに往きたるを、車さし寄せたてるが、頓にも乗らで待たするもいと心もとなく、うちすてても往ぬべき心地する。とみに煎炭おこす、いと心もとなし。人の歌の返し疾くすべきを、え詠み得ぬほど、いと心もとなし。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべきをりもあり。又まして女も男も、ただに言ひかはすほどは、疾きのみこそはと思ふほどに、あいなく僻事も出でくるぞかし。

又心地あしく、物おそろしきほど、夜の明るるまつこそ、いみじう心もとなけ

れ。はぐろめのひる程も心もとなし。

「一五四段」

故殿の御服の頃、六月三十日の御被といふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方あしとて、官のつかさのあいたる所に渡らせ給へり。その夜は、さばかり暑くわりなき闇にて、何事もせばう瓦葺にてさまことなり。例のやうに格子などもなく、唯めぐりて御簾ばかりをぞかけたる、なか／＼珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。前裁には萱草といふ草を、架垣ゆひていと多く植ゑたりける、花きはやかに重りて咲きたる、むべ／＼しき所の前裁にはよし。時づかさなどは唯かたはらにて、鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがりて、若き人々二十餘人ばかり、そなたに行きてはしり寄り、たかき屋にのぼりたるを、これより見あぐれば、薄鈍の裳、同じ色の衣單襲、紅の袴どもを著てのぼりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじわかさなれど、おしあげられたる人はえまじらで、うらやましげに見あげたるもをかし。

日暮れてくらまぎれにぞ、過したる人々皆立ちまじりて、右近の陣へ物見に出でて、たはぶれ騒ぎ笑ふもあめりしを、「かうはせぬ事なり、上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などの居る障子を皆打ち通しそこなひたり」など苦しがるものもあれど、ききも入れず。

屋のいと古くて、瓦葺なればにやあらん、暑さの世に知らねば、御簾の外に夜も臥したるに、ふるき所なれば、蜈蚣といふもの、日ひと日おちかかり、蜂の巢のおほきにて、つき集りたるなど、いとおそろしき。

殿上人曰ごとくに参り、夜も居明し、物言ふを聞きて、「秋ばかりにや、太政官の地の、今やかうのにはとならん事を」と誦し出でたりし人こそをかしかりしか。

秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がらなしめり。さすがに蟲の聲などは聞えたり。八日にかへらせたまへば、七夕祭などにて、例より近づ見ゆるは、ほどのせばければなしめり。

宰相中將齊信、宣方の中將と参り給へるに、人々出でて物などいふに、ついでもなく、「明日はいかなる詩をか」といふに、いささか思ひめぐらし、とどこほりなく、「人間の四月をこそは」と答へ給へる、いみじうをかしこそ。

過ぎたることなれど、心えていふはをかしき中にも、女房などこそさやつの物



わすれはせぬ、男はさもあらず、詠みたる歌をだになまおぼえなるを、まことにをかし。内なる人も、外なる人も、心えずとおもひたるぞ理なるや。

この三月三十日廊の一口に、殿上人あまた立てりしを、やつ／＼すべりうせなどして、ただ頭中將、源中將、六位ひとりのこりて、よろづのこといひ、經よみ、歌うたひなどするに、「明けはてぬなり、歸りなん」とて、露は別の涙なるべしといふことを、頭中將うち出し給へれば、源中將もるともに、いとをかしう誦じたるに、「いそきたる七夕かな」といふを、いみじうねたがりて、曉の別のすぢの、ふと覺えるままにいひて、わびしうもあるわざかな」と、「すへてこのわたりにては、かかる事思ひまはさずいふは、口惜しきぞかし」などいひて、あまりあかくなりしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、わけておほしにしを、七夕のをり、この事を言ひ出せばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかは、その程に見つけなどもせん、文かきて、主殿司してやらんなど思ひし程に、七日に參り給へりしかば、うれしくて、その夜の事などいひ出せば、心もぞえたまふ。すずるにふといひたらば、怪しなどやうちかたがき給はん。

さらばそれには、ありし事はたとへてあるに、つゆおぼめかて答へ給へりしかば、實にいみじうをかしかりき。月しろいつしかと思ひ侍りしに、わが心ながらすき／＼と覺えしに、いかでさはた思ひまうけたるやうにの給ひけん。もろともねたがり言ひし中將は、思ひもよらで居たるに、「ありし曉の詞いましめらるるは、知らぬか」との給ふにぞ、「實にさしつ」などいひ、「男は張鷟」などいふことを、人には知らせず、「この君と心えていふを、何事ぞ」と源中將はそひつきて問へど、いはねば、かの君に「猶これの給へ」と怨みられて、よき中なれば聞せてけり。いとあへなく言ふ程もなく、近うなりぬるをば、「押小路のほどぞ」などいふに、我も知りけると、いつしか知られんとて、わざと呼び出で、「書盤侍りや、まるもつたんと思ふはいかが、手はゆるし給はんや。頭中將とひとし事なり。なおほしわきそ」といふに、「さのみあらば定めなくや」と答へしを、かの君に語り聞えければ、「嬉しく言ひたる」とよろこび給ひし。なほ過ぎたることを忘れぬ人はいとをかし。

宰相になり給ひしを、う／＼の御前にて、「詩をいとをかしう誦し侍りしものを、蕭蕭稽の古廟をも過ぎにしなども、誰か言ひはべらんとする。暫しならでもさぶらへかし。口惜しきに」など申ししかば、いみじう笑はせ給ひて、「さなんいふとて、なさじかし」など仰せられしをかし。されどなり給ひにしかば、誠にさう

／＼しかりしに、源中將おとらずと思ひて、ゆゑだちありくに、宰相中將の御うへをいひ出でて、「いまだ三十の期に速はずといふ詩を、こと人には似ず、をかしう誦し給ふ」などいへば、「なかそれによらぬ、まさりてこそせめ」とて詠むに、「更なるもあらず」といへば、「わびしの事や、いかで、あれがやつに誦せて」などの給ふ。「三十の期といふ所なん、すべていみじう、愛敬づきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひありくに、陣につき給へりけるをりに、わきて呼び出でて、「かつなんいふ。猶こそ教へ給へ」といひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとにて、いみじくよく似せて詠むに、あやしめて、「こは誰ぞ」と問へば、ゑみごゑになりて、「いみじき事聞えん。かう／＼昨日陣につきたりしに、問ひ來てたにたるなめり。誰ぞと、にくからぬ氣色にて問ひ給へれば」といふも、わざと習ひ給ひけんをかしければ、これだに聞けば、出でて物などいふを、「宰相の中將の徳見る事、そなたに向ひて拜むべし」などいふ。下にありながら、「うへに」などいはするに、これをつち出づれば、「誠はあり」などいふ。御前にかくなど申せば、笑はせ給ふ。

内裏の御物忌なる日、右近のさうくわんみつなにかやいふものして、疊紙に書きておこせたるを見れば、「參せんとするを、今日は御物忌にてなん。三十の期におよばずは、いかが」といひたれば、返事に、「その期は過ぎぬらん、朱買臣が妻を教へけん年にはしも」と書きてやりたりしを、又ねたがりて、うへの御前にも奏しければ、宮の御かたにわたらせ給ひて、「いかでかかる事は知りしぞ。四十九になりける年こそ、さは誠めけれとて、宣方はわびしういはれにたりといふめるは」と笑はせ給ひしこそ、物ぐるほしかりける君かなとおぼえしか。

「一五五段」

弘徽殿とは、閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる。その御方に、うちふしといふ者の女、左京といひてさぶらひけるを、「源中將かたらひて思ふ」など人々笑ふ。宮の職におはしまいに參りて、「時々は御宿直など仕うまつるべけれど、さるべきさまに女房などもてなし給はねば、いと宮つかへおるかにさぶらぶ。宿直所をだに賜りたらんは、いみじうためにさぶらひなん」などいひ居給ひつれば、人々になどいふ程に、「誠に人は、うちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたり

には、しげく参り給ふなるものを」とさし答へたりとて、「すべて物きこえず。方人と頼み聞ゆれば、人のいひふるしたるさまに取りなし給ふ」など、いみじうまめだちてうらみ給ふ。「あなあやし、いかなる事をか聞えつる。更に聞きとどめ給ふことなし」などいふ。傍なる人を引きゆるがせば、「さるべきこともなきを、ほとほり出で給ふ、さまこそあらめ」とて、花やかに笑ふに、「これもかのいはせ給ふならん」とて、いとものしと思へり。「更にさやうの事をなんいひ侍らぬ。人のいふだににくきものを」といひて、引き入りにしかば、後にもなほ、「人にはぢがましき事いひつけたる」と恨みて、「殿上人の、笑ふとていひ出でたるなり」との給へば、「さては一人を恨み給ふべくもあらざんめる、あやし」などいへば、その後には絶えてやみ給ひにけり。

「一五六段」

昔おぼえてふようなるもの、纏綿縁の疊の舊りてふし出できたる。唐繪の屏風の表そこなはれたる。藤のかかりたる松の木枯れたる。地摺の装の花かへりたる。衛士の目くらき。几帳のかたびらのふりぬる。帽額のなくなりぬる。七尺のかづらのあかくなりたる。葡萄染の織物の灰かへりたる。色好の老いくづをれたる。おもしろき家の木立やけたる。池などはさながらあれど、浮草水草しげりて。

「一五七段」

たのもしげなきもの、心みじかくて人忘れがちなる。聾の夜がれがちなる。六位の頭しるき。虚言する人の、さすがに人のことなしがほに大事うけたる。一番に勝つ雙六。六七八十なる人の、心地あしうして日ごろになりぬる。風はやきに帆あげたる船。經は不斷經。

「一五八段」

読経は 不斷經。

「一五九段」

近くてとほきもの 宮のほとりの祭。思はぬ兄弟、親族の中。鞍馬の九折といふ道。十二月の晦日、正月一日のほど。

「一六〇段」

遠くてちかきもの 極樂。船の道。男女の中。

「一六一段」

井は 堀兼の井。走井は逢阪なるがをしき。山の井、さしもあさきためしに  
なりはじめけん。

飛鳥井、みもひも寒しと譬めたるこそをかしけれ。玉の井、少將の井。櫻井。后町の井。千貫の井。

「一六二段」

野は 嵯峨野さらなり。印南野。交野。こま野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そ  
うけ野こそすずるにをかしけれ。などさつけたるにかあらん。安倍野。宮城野。春  
日野。紫野。

「一六三段」

上達部は 春宮大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相中將。三位の中  
將。東宮權大夫。侍從宰相。

「一六四段」

公達は 頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人

兵衛佐。

「一六五段」

受領は 紀伊守。和泉守。大和守。

「一六六段」

やどりのつかさの權の守は 下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

「一六七段」

大夫は 式部大夫。左衛門大夫。史大夫。

「一六八段」

法師は 律師。内供。

「一六九段」

女は 典侍。掌侍。

「一七〇段」

六位藏人、おもひかくべき事にもあらずかうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋せばき家もたりて、また小椋垣など新しくし、車やどりに車ひきたて、前ちかく木おほくして、牛つながせて、草などかはするこそいとにくけれ。庭いと清けにて、紫革して、伊豫簾かけわたして、布障子はりて住居たる。夜は「門強くさせ」など事行ひたる、いみじいおひなきなく「こころうきなし」。

親の家、舅はさらなり、伯父兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからんは、

おのづからむつまじう、うち知りたる受領、又國へ行きていたづらなる、さらずば女院、宮腹などの屋あまたあるに、官まち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。

「一七一一段」

女のひとり住む家などは、唯いたう荒れて、築土などもまたからず、池などのある所は、水草ぬ、庭なども、いと蓬茂りなどこそせねども、所々砂の中より青き草見え、淋しげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いとつかため、きはくしきは、いとつたてこそ覺ゆれ。

「一七二一段」

宮仕人の里なども、親ども二人あるはよし。人しげく出で入り、奥のかたにあまたさまざまの聲多く聞え、馬の音して騒しきまであれどかなし。

されど忍びてもあらはれても、おのづから、「出で給ひけるを知らず」とも、「又いつか参り給ふ」などもいひにさしのぞく。心かけたる人は、「いかかは」と門あけなどするを、うたて騒しうあやふげに、夜半までなど思ひたるけしき、いとにくし。「大御門はさしつや」など問はずれば、「まだ人のおはすれば」など、なまふせがしげに思ひて答ふるに、「人出で給ひなば疾くさせ。このころは盗人いと多かり」などいひたる、いとむつかしう、うち聞く人だにあり。

この人の供なるものども、この客今や出づると、絶えずさしのぞきて、けしき見るものどもを、わらふべかんめり。眞似うちするも、聞きてはいかにいとど厳しういひ咎めん。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人は、必來などやする。されど健なるかたは、「夜更けぬ、御門もあやふかんなる」といひてぬるもあり。誠に志ことなる人は、「はや」などあまた度やはるれど、猶居あかせば、たびくありくに、あけぬべきけしきをめづらかに思ひて、「いみじき御門を、今宵らいさうとあけひろげて」と聞えこちて、あぢきなく曉にぞさすなる。いかがにくき。親そひぬるは猶こそあれ。まして誠ならぬは、いかに思ふらんとさへつつまじうて。兄の家なども、實に聞くにはさぞあらん。

夜中曉ともなく、門いと心がしくもなく、何の宮、内裏わたりの殿ばらなる人々の出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も、見出したるこそをかしけれ。有明などはましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寝られず、人のつへなどもいひ、歌など語り聞くまに、寝いりぬるこそをかしけれ。

「 一七三段 」

ある所に、中の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに往きて、有明の月のいみじう照りておもしろきに、名残思ひ出でられんと、言の葉を盡していへるに、今はいぬらんと遠く見送るほどに、えもいはず艶なる程なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立部あいたる陰のかたに添ひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひ知らせんと思ふに、「有明の月のありつとも」とうちいひて、さしのぞきたるかみの頭にも寄りこず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光、催されて驚かざる心地しければ、やをら立ち出でにけりとこそかたりしか。

「 一七四段 」

雪のいと高くはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端ちかう、同じ心なる人二三ばかり、火桶中に居ゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさびて、あはれなるもをかしきも、いひあはするこそをかしけれ。

よひも過ぎぬらんと思ふほどに、杳の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひきこえながら、何でふ事にさはり、そこに暮しつるよしなどいふ。今日來ん人をなどやうのすぢをぞ言ふらんかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つ方の足はしもながらあるに、鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、内にも外にも、いふ事どもは飽かずおぼゆる。

あけぐれのほどに歸るとて、雪何の山に満てるとうち誦じたるは、いとをかしきものなり。女のかぎりしては、さもえ居明さざらましを、ただなるよりはいとをかしう、すきたる有様などを言ひあはせたる。

「 一七五段 」

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、楊器にもらせ給ひて、梅の花をさして、月いと明きに、「これに歌よめ、いかがいふべき」と兵衛の藏人に賜ひたりければ、雪月花の時と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌などよまんには世の常なり、かう折にあひたる事なん、言ひ難き」とこそ仰せられけれ。同じ人を御供にて、殿上に人侍はざりける程、佇ませおはしますに、すびつの烟の立ちければ、「かれは何の烟ぞ、見て來」と仰せられければ、見てかへり参りて、

わたつみの沖にこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけり

と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りてこがるるなりけり。

「 一七六段 」

御形の宣言、五寸ばかりなる殿上わらはのいとをかしげなるをつくりて、髻結ひ、装束などうるはしくして、名かきて奉らせたりけるに、ともあきらのおほきみと書きたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

「 一七七段 」

宮に始めて参りたるころ、物の恥しきこと數知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳の後に待ぶに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手もえさし出すまじうわりなし。これはとあり、かれはかかりなどの給はするに、高杯にまゐりたるおほと油なれば、髻のすぢなども、なか／＼晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見なごす。いとつめたきころなれば、さし出させ給へ

る御手のわづかに見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心地には、いかがはかかる人こそ世におはしましけれど、驚かるるまでぞまもりまゐらす。

曉には疾くなど急がる。「葛城の神も暫し」など仰せらるるを、いかですぢかひても御覽せんとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官まゐりて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きてはなつを、「待て」など仰せらるれば、笑ひてかへりぬ。

物など問はせ給ひの給はするに、久しうなりぬれば、「おりまほしうなりぬらん、さ早」とて、「よさらは疾く」と仰せらるる。

みざり歸るや遅きとあけちらしたるに、「雪いとをかし、今日は晝つかた參れ、雪にくもりてあらはにもあるまじ」など、たび／＼召せば、「この同主人も、」さのみや籠り居給ふらんとする。いとあへなきまで御前許されたるは、思しめすやうこそあらめ。思ふに違ふはにくきものぞ」と、唯いそがしに急がせば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ苦しき。火焼屋のうへに降り積みたるも珍しうをかし。

御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはします。上臈御まかなひし給ひけるままに近くさぶらふ。次の間に長炭櫃に間なく居たる人人、唐衣著垂れたるほどなり。安らかなるを見るも羨しく、御文とりつき、立ち居ふるまふさまなど、つつまじげならず、物いひゑみわらふ。いつの世にか、さやうに交ひならんと思ふさへぞつつまじき。あうよりて、三四人集ひて繪など見るもあり。

暫時ありて、さき高うおふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども取りやりなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめりと、御几帳のほころびより僅に見入れたり。

大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色、雪にはえてをかし。柱のもとに居給ひて、「昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍らば、おぼつかなさ」などのたまふ。「道もなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御答あんなる。うち笑ひ給ひて、「おはれともや御覽する」と、などの給ふ御有様は、これよりは何事かまさらん。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事ども、違はざんめりとおぼゆ。

宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる、御髪のかからせ給へるなど、繪に書きたるをこそ、かかることは見るに、現にはまだ知らぬを、夢の

心地ぞする。女房と物いひ戯れなどし給ふを、答えささか恥しとも思ひたらず聞えかへし、空言などの給ひかくるを、争ひ論じなど聞ゆるは、目もあやに、あさましきまで、あいあく面ぞ赤むや。御菓子まゐりなどして、御前にも參らせ給ふ。

「御几帳の後なるは誰ぞ」と問ひ給ふなるへし。さぞと申すにこそあらめ、立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居給ひて、物などの給ふ。まだ參らざりしとき聞きおき給ひける事などの給ふ。「實にさありし」などの給ふに、御几帳隔てて、よそに見やり奉るだに恥しかりつるを、いとあさましう、さし向ひ聞えたる心地、うつつとも覺えず。行幸など見るに、車のかたにいささか見おこせ給ふは、下簾ひきつくりひ、透影もやと扇をさし隠す。猶いと我心ながらも、おほけなくいかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこきかげと捧げたる扇をさへ取り給へるに、振りかくへき髪のあやしさを入思ふに、すべて誠にさる氣色やつきてこそ見ゆるめ、疾く立ち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、「繪は誰が書きたるぞ」などの給ひて、頓にも立ち給はねば、袖を押しあてて、うつぶし居たるも、唐衣にしるい物つつりて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、論なう苦しと思ふらんと心得させ給へるにや、「これ見給へ、これは誰が書きたるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「賜ひて見侍らん」と申し給へば、「猶こゝへ」との給はすれば、「人をとらへてたて侍らぬなり」との給ふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはらいたし。人の草假字書きたる草紙、取り出でて御覽す。「誰がにかあらん、かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らん」と怪しき事どもを、唯答せんとしたまふ。

一所だにあるに、又さきうちおはせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、猿樂ことなどつちし、響め笑ひ興じ、我も、なにがしとある事、かかる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり来るにやと覺えてしを、侍ひ馴れ、日こる過ぐれば、いとさしもなきわざにこそありけれ。かく見る人々も、家のうち出で初めけん程は、さこそは覺えけめど、かく爲もて行くに、おのづから面馴れぬべし。

物など仰せられて、「我をば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに、「いかにかは」と啓するに合せて、臺盤所のかたに、鼻をたかくひたれば、「あな心つ、虚言するなりけり。よし／＼」とていらせ給ひぬ。いかでか虚言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事は、鼻こそは虚言しけれとおぼゆ。さても誰かかくにくきわ

ざしつらんと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おしひしぎかへしてあるを、ましてにくしと思へど、まだうひ／＼しければ、ともかくも啓しなほさで、明けぬればおりたるすなはち、淺緑なる薄様に、艶なる文をもてきたり。見れば、

いかにしていかに知らまいいつはりをそらにただすの神なかりせば

となん、御けしきはとあるに、めでたくも口をししくも思ひ亂るるに、なほ昨夜の人ぞたづね聞かまほしき。

つすきこそそれにもよらねはなゆゑにつき身の程を知るぞわびしき

猶こればかりは啓しなほさせ給へ、職の神もおのづからいと畏しとて、參らせて後も、うたて、折しもなどできはたありけん、いとをかし。

「一七八段」

したりがほなるもの 正月一日のつとめて、最初にはなひたる人。きしろふたの蔵人に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目に、その年の一の國得たる人の、よろこびなどいひて、「いとかしこうなり給へり」など人のいふ答に、「何か、いと異様に亡びて侍るなれば」などいふも、したり顔なり。

また人多く挑みたる中に、選られて壻に取られたるも、我はと思ひぬべし。こはき物怪調じたる驗者。掩韻の明疾うしたる。小弓射るに、片つ方の人咳嗽をし紛はして騒ぐに、念じて音高う射てあてたるこそ、したり顔なるけしきなれ。暮をうつに、さばかりと知らず、ふくつけきは、又こと所にかがぐりありくに、ことかたより、目もなくして、多くひろひ取りたるも嬉しからじや。ほりかに打ち笑ひ、ただの勝よりはほりかななり。あり／＼て受領になりたる人の氣色こそうれしげなれ。僅にある従者の無禮にあなづるも、妬しと思ひ聞えながら、いかがせんとて念じ過しつるに、我にもまさる者どもの、かしこまり、ただ仰承らむと追従するさまは、ありし人とやは見えたる。女房うちつかひ、見えざりし調度装束の湧き出づる。受領したる人の中將になりたるこそ、もと公達のなりあがりたるよりも、氣高うしたり顔に、いみじう思ひたしめぬ。

「一七九段」

位こそ猶めでたきものにはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍従の君など聞ゆるをりは、いと侮り易きものを、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、無下にせんかたなく、やんごとなく覺え給ふ事のよなきよ。ほど／＼につけては受領もさこそはあんめれ。數多國に行きて、大貳や四位などになりて、上達部になりぬれば、おも／＼し。されど、さりとしてほど過ぎ、何ばかりの事はあはれ。又多くやはある。受領の北の方にてくだるこそ、よろしき人の幸福には思ひてあなめれ。只人の上達部の女にて、后になり給ふこそめでたけれ。

されどなほ男は、わが身のなり出づるこそめでたくうち仰ぎたるけしきよ。法師の、なにがし供奉などいひてありくなどは、何とかは見ゆる。經たふとく讀みみめ清けなるにつけても、女にあなづられて、なりかかりこそすれ、僧都僧正になりぬれば、佛のあらはれ給へるにこそとおぼし惑ひて、かしこまるさまは、何にかは似たる。

「一八〇段」

かしこき物は、乳母の

「一八一段」

やまひは 胸。物怪。脚氣。唯そこはかとなく物食はぬ。

十八九ばかりの人の、髪いと麗しくて、たけばかりすそふさやかなるが、いとよく肥えて、いみじう色しろう、顔あいぎやうづき、よしと見ゆるが、齒をいみじく病みまどひて、額髪もしとどに泣きぬらし、髪の亂れかかるも知らず、面赤くて抑へ居たるこそをかしけれ。

八月ばかり、白き單衣、なよらかなる袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあざやかなるを引きかけて、胸いみじう病めば、友だちの女房たちなどはる／＼來つづ、「いといとほしきわざかな、例もかくや惱み給ふ」など、事なしに問ふ人

もあり。心かけたる人は、誠にいみじと思ひ歎き、人知れぬ中などは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。

いと麗しく長き髪を引きゆひて、物つくとして起きあがりたる気色も、いと心苦しうらたげなり。

うへにも聞し召して、御讀經の僧の聲よき給はせられたれば、訪人どももあまた見來て、經聞きなどするもかくれなきに、目をくばりつつ讀み居たるこそ、罪や得らんとおぼゆれ。

「一八二段」

すき／＼して獨住する人の、夜はいづらにありつらん、曉に歸りて、やがて起きたる、まだねぶたげなる気色なれど、硯とり寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしに任せてなどはあらず、心とどめて書く。まひろげ姿をかしう見ゆ。

白き衣どものうへに、山吹紅などをぞ著たる。白き單衣のいたく萎みたるを、うちまもりつつ書き立てて、前なる人にも取らせず、わざとたちて、小舎人童のつき／＼しきを、身近く呼び寄せて、うちささめきて、往ぬる後も久しく詠めて、經のさるべき所々など、忍びやかに口ずさびに爲居たり。奥のかたに、御手水、粥などしてそのかせば、歩み入りて、文机に押しかかりて文をぞ見る。おもしろかりける所々は、うち誦したるもいとをかし。

手洗ひて、直衣ばかりうち著て、祿をそそらに讀む。實にいとたふとき程に、近き所なるべし、ありつる使うちけしきはめば、ふと讀みさして、返事に心入るるこそいとほしけれ。

「一八三段」

いみじう暑き

「一八四段」

南ならずは東の

「一八五段」

大路ちかなる所にて聞けば

「一八六段」

わるきものは 詞の文字あやしうつかひたるこそあれ。ただ文字一つに、あやしうも、あてにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらん。さるはかう思ふ人萬の事に勝れてもえあらじかし。いづれを善き悪しきとは知るにかあらん。さりとも人を知らじ、唯さうち覺ゆるもいふめり。難義の事をいひて、「その事させん」とす「といはんといふを」と文字をうしなひて、唯「いはんずる」「里へ出でんずる」などいへば、やがていとわるし。まして文を書きては、いふべきにもあらず。物語こそあしう書きなすれば、いひがひなく、作者さへいとほしけれ。「なほす」「定本のまま」など書きつけたる、いと口惜し。「秘點つくるまに」などいふ人もありき。「もとむ」といふ事を「見ん」と皆いふめり。いと怪しき事を、男などは、わざとつくるはで、殊更にいふはあしからず。わが詞にもてつけていふが、心おとりする事なり。

「一八七段」

宮仕人の許に來などする男の、そこにて物くふこそいとわるけれ。くはする人もいとにくし。思はん人の、「まつ」など志ありていはんを、忌みたるやうに口をふたぎて、顔を持てのくべきにもあらねば、くひ居るにこそあらめ。いみじう酔ひなどして、わりなく夜更けて泊りたりとも更にゆづけだにくはせじ。心もなかりけりとて來ずばさてなん。さとにて、北面よりし出してはいかがせん。それだに猶ぞある。

「一八八段」

嵐は 嵐。こがらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨のあし横ざまに、さわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿絹の、汗の香などかわき、生絹の單衣に、引き重ねて著たるもをかし。この生絹だにいとあつかはしう、捨てまほしかりしかば、いつの間にかうなりぬらんと思ふもをかし。あかつき、格子妻戸など押しあげたるに、嵐のさと吹きわたりて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月三十日、十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろ／＼とこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、棕の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

野分の又の日こそ、いみじう哀におぼゆれ。

立部、透垣などのふしなみたるに、前裁ども心ぐるしげなり。大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などのうへに、よろほひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつばなどに、颯と際を殊更にしたらんやうに、こま／＼と吹き入りたるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえぬ。

いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、羅などの小袿著て、まことしく清げなる人の、夜は風のさわぎにねざめつれば、久しう寐おきたるまに、鏡うち見て、母屋よりすこしみざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが、肩にかかりたるほど、實にめでたし。

物あはれなる氣色見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざと大人などは見えぬが、生絹の單衣のいみじうほころびたる、花もかへり、濡れなどしたる、薄色の宿直物を著て、髪は尾花のやうなるそぎすも、長ばかりは衣の裾にはづれて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる。わらはへの、若き人の根籠に吹き折られたる前裁などを取り集め起し立てなどするを、羨しげに押し量りて、つき添ひたるうしろもをかし。

「 一八九段 」

こころにくきもの 物へだてて聞くに、女房とは覚えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答わかやかにして、うちそよめきて参るけはひ、物まゐる程にや、筋飯匙などのとりまぜて鳴りたる、提の柄のたふれ伏すも、耳こそとどまれ。

打ちたる衣の鮮かなるに、騒しうはあらで、髪のみりやられたる。いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらは参らで、長炭櫃に、いと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいとつややかに見え、御簾の帽額のあげたる、鈎のきはやかなるもげざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪の見えたる、をかし。はしのいときはやかにすぢかひたるもをかし。夜いたう更けて、人の皆寝ぬる後に、外のかたにて、殿上人など物いふに、奥に、碁石筈にいる音のあまた聞えたる、いと心にくし。簀子に火ともしたる。物へだてて聞くに、人の忍ぶるが、夜半などうち驚きて、いふ事は聞えず、男も忍びやかに笑ひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

「 一九〇段 」

島は 浮島。八十島。たはれ島。水島。松が浦島。籬の島。豊浦の島。たと島。

「 一九一段 」

濱は そのの濱。吹上の濱。長濱。打出の濱。諸寄の濱。千里の濱こそ廣うおもひやられるれ。

「 一九二段 」

浦は 生の浦。鹽竈の浦。志賀の浦。名高の浦。こりずまの浦。和歌の浦。

「 一九三段 」

森は 大荒木の森。忍の森。ここの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うづきの森。きくだの森。いはせの森。立間森。常盤の森。くるべきの森。神南備の森。假寐の森。浮田の森。うへ木の森。石田の森。かうたての森といふが耳とどまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、ただ一木あるを、何につけたるぞ。ここの森。木幡の森。



「一九四段」

寺は 壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住處なるがあはれなるなり。石山。粉川。志賀。

「一九五段」

經は 法華經はさらなり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

「一九六段」

佛は 如意輪は、人の心をおぼしむづらひて、類杖を突きておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手、すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

「一九七段」

文は 文集。文選。博士の申文。

「一九八段」

物語は すみよし、うつぼの類は、殿うつり。月まつ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心すむる松が枝。こまの物語は、ふるきかはばりさし出でてもいにしが、をかしきなり。

「一九九段」

陀羅尼は あかつき。讀經は ゆふぐれ。

「二〇〇段」

あそびは 夜人の顔見えぬほど。あそびわざは、さまあしけれども、鞠もをかし。小弓。掩韻。暮。

「二〇一段」

あそびわざは 小弓。暮。さまあしけれど鞠もをかし。

「二〇二段」

舞は 駿河舞。求子。太平樂はさまあしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いとおもしろし。漢土に敵に具して遊びけんなど聞くに。

鳥の舞。拔頭は、頭の髪ふりかけたるまみなどはおそろしけれど、樂もいとおもしろし。落蹲は、二人して膝ふみて舞ひたる。こまがた。

「二〇三段」

ひきものは 琵琶。箏のこと。しらべは 風香調。黄鐘調。蘇香の急。鶯のさへづりといふしらべ。相府蓮。

「二〇四段」

笛は 横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やうく近うなりゆくもをかし。近かりつるがはるかになりて、いとほのかに聞ゆるも、いとをかし。車にても徒歩にて馬にても、すべて懐にさし入れてもたるも、何とも見えず。さばかりをかきものはなし。まして聞き知りたる調子など、いみじつめでたし。曉などに、忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも、猶をかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて、遣るも、ただ文のやうに見えたり。

笙の笛は、月のあかきに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく、もてあつかひにくくぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それは横笛もふきなしありかし。

いちりきは、いとむつかしう、秋の蟲をいはず、蟬などに似て、うたてけぢかく聞かまほしからず。ましてわろう吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだ御前には出ではてで、物の後にて、横笛をいみじう吹き立てたる、あなおもしろと聞くほどに、半ばかりより、うちそへて吹きのぼせたる程こそ、唯いみじう麗しき髪もたらん人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やうく琴笛あはせて歩み出でたる、いみじうをかし。

「二〇五段」

見るものは 行幸。祭のかへさ。御賀茂詣。

臨時の祭、空くもりて寒げなるに、雪少しうち散りて、挿頭の花、青摺などにかかりたる、えもいはずをかし。太刀の鞘の、きはやかに黒つまだらにて、白く廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかかりたる。地摺袴の中より、氷かと驚くばかりなる打目など、すべていとめでたし。

今少し多く渡らせまほしきに、使は必にくげなるもあるたびは、目もとまらぬ。されど藤の花に隠されたる程はをかしう、猶過ぎぬかたを見送らるるに、陪従のしなおくれたる、柳の下襲に、かざしの山吹おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして、「賀茂の社のゆふだすき」と歌ひたるは、いとをかし。

行幸にならずらふるものは何かあらん。御輿に奉りたるを見参らせたるは、明暮御前に侍ひ、仕う奉る事もおぼえず、かうくしういつくしう、常は何ともなきつかさ、ひめまうちぎみさへぞ、やんことなう珍しう覺ゆる。

御綱助、中少將などいとをかし。祭のかへさいみじうをかし。きのふは萬の事うるはしうて、一條の大路の廣う清らなるに、日の影もあつく、車にさし入りたるもまばゆければ、扇にて隠し、居なほりなげして、久しう待ちつるも見苦しう、汗などもあえしを、今日はいと疾く出でて、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらもちなえて見ゆ。

日は出でたれど、空は猶うち曇りたるに、いかで聞かんと、目をさまし、起き居て待たる杜鵑の、數多さへあるにやと聞ゆるまで、鳴きひびかせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれに似せんとおぼしく、うち添へたるこそ、憎けれど又をかしけれ。

いつしかと待つに、御社の方より、赤き衣など著たる者どもなど連れ立ちてく

るを、「いかにぞ、事成りぬや」などいへば、「まだ無期」など答へて、御輿、腰輿など持てかへる。これに奉りておはしますらんもめでたく、けぢかく如何でさる下司などの侍ふにかとおそろし。

はるかげにいふ程もなく歸らせ給ふ。葵より始めて、青朽葉どものいとをかしく見ゆるに、所の衆の青色白襲を、けしきばかり引きかけたるは、卯の花垣根ちかうおぼえて、杜鵑もかげに隠れぬべう覺ゆかし。昨日は車ひとつに數多乗りて、二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ著て、簾取りおろし、物ぐるほしきまで見えし公達の、齋院の垣下にて、ひの装束うるはしくて、今日は一人づつ、をさくしく乗りたる後に、殿上童のせたるもをかし。

わたりはてぬる後には、なかさしも惑ふらん。我もくくと、危くおそろしきまで、前に立たんと急ぐを、「かうな急ぎぞ、のとやかに遣れ」と扇をさし出でて制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣き所に強ひてとめさせて立ちたるを、心もとなくにくしと思ひたる、きほひかかる車どもを見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしき程にやり過して、道の山里めきあはれなるに、うつ木垣根といふ物の、いと荒々しう、おどろかしげにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくもひらけはせず、つぼみがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたなどに挿したるも、桂などの萎みたるが口惜しきに、をかしうおぼゆ。遠きほどは、えも通るまじう見ゆる行くさきを、近う行きもてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、後に引きつづきてくるも、ただなるよりはをかしと見る程に、「峯にわかるる」といひたるもをかし。

「二〇六段」

五月ばかり、山里にありく、いみじくをかし。澤水も實にたたいと青く見えわたるに、うへはつれなく草生ひ茂りたるを、ながくとたださまに行けば、下はえならざりける水の、深うはあらねど、人の歩むにつけて、とはしりあげたるいとをかし。

左右にある垣の枝などのかかりて、車のやかたに入るも、急ぎてとらへて折らんと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるも口惜し。蓬の車に押しひしがれたるが、輪のまひたちたるに、近うかがへたる香もいとをかし。

「二〇七段」

いみじう暑きころ、夕すずみといふ程の、物のさまなどおほめかしきに、男車のさきおふはいふべき事にもあらず、ただの人も、後の簾あげて、二人も一人も乗じて、走らせて行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶ひきならし、笛の音聞ゆるは、過ぎていぬるも口惜しくさやうなるほどに、牛の鞆の香の、怪しうかぎ知らぬさまなれど、うち嗅がれたるが、をかしきこそ物ぐるほしけれ。

いと暗闇なるに、さきにともしたる松の煙の、かの車にかかれるもいとをかし。

「二〇八段」

五月四日の夕つかた、青き草おほくいとつるはしく切りて、左右になひて、赤衣きたる男のゆくこそをかしけれ。

五六月の夕かた、青き草を細う麗しくきりて、赤衣著たる子供の、ちひさき笠を著て、左右にいと多くもちてゆくこそ、すずるにをかしけれ。

「二〇九段」

賀茂へ詣つる道に、女どもの、新しき折敷のやつなるものを笠にきて、いと多くたてりて、歌をうたひ、起き伏すやうに見えて、唯何すともなく、うしろざまに行くは、いかなるにかあらん、をかしと見る程に、郭公をいとなめくつたふ聲ぞ心憂き。「ほどとぎすよ、おれよ、かやつよ、おれなきてぞ、われは田にたつ」とうたふに、聞きも果てずいかなりし人かいたくなきてぞといひけん。「なかだかわらはおひ、いかでおどす人」と。鶯に郭公は劣れるといふ人こそ、いとつらう憎くけれ。

鶯は夜なかぬいとわろし。すべて夜なくものはめでたし。兒どもぞはめでたからぬ。

「二一〇段」

八月晦日がたに、太秦にまうづとて見れば、穂に出でたる田に、人多くてさわぐ。稻刈るなりけり。早苗とりしか、いつの間にとはまこと。實にさいつころ賀茂に詣つとて見しが、哀にもなりにけるかな。

これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稻の、もとは青きを刈りもちて、刀か何にあらん、もとを切るさまのやすげに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすらん、穂をうへにて竝み居る、いとをかしう見ゆ。庵のさまことなり。

「二一一段」

九月二十日あまりほど、

「二一二段」

清水などにまいりて、

「二一三段」

五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れて怪しきを、引き折りあげたるに、その折の香残りて、かがへたるもいみじうをかし。

「二一四段」

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などはうち忘れたるに、衣を引きかづきたる中に、煙の残りたるは、今のよりもめでたし。

「二一五段」

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むままに、水晶などのわれたるやうに、水のちりたるこそをかしけれ。

「二二六段」

おほきにてよきもの 法師。くだもの。家。餌囊。硯の墨。男の目。あまりほそきは女めきたり、又鏡のやうならんはおそろし。火桶。酸漿。松の木。山吹のはなびら。馬も牛も、よきは大にこそあめれ。

「二二七段」

みじかくてありぬべきもの とみの物ぬふ糸。燈臺。下種女の髪、うるはしく短くてありぬべし。人の女の聲。

「二二八段」

人の家につき、しきもの 厨。侍の曹司。幕のあたりしき。懸盤。童女。はしたもの。衝立障子。三尺の几帳。装束よくしたる餌囊。からかさ。かきいた。棚厨子。ひさげ。銚子。中盤。圓座。ひぢをりたる廊。竹王繪かきたる火桶。

「二二九段」

ものへ行く道に、清げなる男の、豎文のほそやかなる持ちて急ぎ行くこそ、何地ならんとおぼゆれ。又清げなる童女などの、袖いと鮮かにはあらず、萎えばかり、履子のつややかなるが、革に土多くついたるをはきて、白き紙に包みたる物、もしは箱の蓋に、草紙どもなど入れて持て行くこそ、いみじう、呼び寄せて見まほしけれ。

門ぢかなる所をわたるを、呼び入るるに、愛敬なく答もせて往く者は、つかふらん人こそ推しはからるれ。

「二二〇段」

よるづの事よりも、わびしげなる車に、装束わろくて物見る人、いともどかし。説經などはいとよし。罪うしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて、見苦しがるべきを、まして祭などは、見でありぬべし。下簾もなく、白きひとへうち垂れなどしてあんめりかし。唯その日の料にとて、車も下簾もしたてて、いと口をしうはあらじと出でたるだに、まさる車など見つけては、何しになど覺ゆるものを、ましていかばかりなる心地にて、さて見るらん。おりのぼりありく公達の車の、推し分けて近う立つ時などこそ、心ときめきはすれ。

よき所に立てんといそがせば、疾く出でて待つほどいと久しきに、居張り立ちあがりなど、あつく苦しく、まち困ずる程に、齋院の垣下に参りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など、七つ八つ引きつづけて、院のかたより走らせてくるこそ、事なりにけりと驚かれて、嬉しけれ。

殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもに水飯くはすとて、棧敷のもとに馬ひき寄するに、おぼえある人の子どもなどは、雑色などおりて、馬の口などしてをか。さらぬものの、見もいれられぬなどぞ、いとほしげなる。

御輿の渡らせ給へば、簾もあるかぎり取りおろし、過ぎさせ給ひぬるに、まどひあぐるもをか。その前に立てる車は、いみじう制するに、なぞて立つまじきぞと、強ひて立つれば、いひわづらひて、消息などするこそをかしけれ。所もなく立ち重りたるに、よき所の御車、人給ひきつづきて多くくるを、いづくに立たんと見る程に、御前ども唯おりに下りて、立てる車どもを唯のけに退けさせて、人給つづきて立てるこそ、いとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所あるかたにゆるがしもて行くなど、いとわびしげなり。きら／＼しきなどをば、えさしも推しひしがすかし。

いと清げなれど、又ひなび怪しく、げすも絶えず呼びよせ、ちこ出しすゑなどするもあるぞかし。

「二二一段」

廊に便なき人なん、曉に笠ささせて出でけるといひ出でたるを、よく聞けば我がうへなりけり。地下などいひても、めやすく、人に許されぬばかりの人にもあ

らぎんめるを、怪しの事やと思ふほどに、うへより御文もて来て、「返事只今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大笠の繪をかきて、人は見えず、唯手のかぎり笠をとらへさせて、下に

三笠山やまの端あけしあしたより

とかかせ給へり。猶はかなき事にても、めでたくのみ覚えさせ給ふに、恥しく心づきなき事は、いかで御覽せられじと思ふに、さるそらごとなどの出でくるこそ苦しけれと、をかしうて、こと紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてや濡れぎぬには待らんと啓したれば、右近内侍などにかたらせ給ひて、笑はせ給ひけり。

「一二二段」

三條の宮におはしますころ、五日の菖蒲輿など持ちてまぬり。薬玉まぬらせなどわかき人々、御匣殿など、薬玉して、姫宮若宮つけさせ奉りいとをかしき薬玉ほかよりも参らせたるに、あをさしといふものを人の持てきたるを、青き薄様を艶なる硯の蓋に敷きて、「これませしにさふらへば」とてまぬらせたれば、

みな人は花やてふやといそぐ日もわがころをば君ぞ知りける

と、紙の端を引き破りて、書かせ給へるもいとめでたし。

「一二三段」

御乳母の大輔の、けふ日向へくだるに、賜はする扇ごもの中に、片つかたには、日いと花やかにさし出でて旅人のある所、井手の中將の館などいふさまいとをか

しう書きて、今片つかたには、京のかた雨いみじう降りたるに、ながめたる人などかきたるに、

あかねさす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらんと

ことばに御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて、遠くこそえいくまじけれ。

「一二四段」

清水に籠りたる頃、茅蝸のいみじう鳴くをあはれと聞くに、わざと御使しての給はせたりし。唐の紙の赤みたるに、

山ちかき入相の鐘のこゑことに戀ふるころのかずは知るらん

ものを、こよなのながあやと書かせ給へる。紙などのなめげならぬも取り忘れたるたびに、紫なる蓮の花びらに書きてまぬらす。

「一二五段」

駅むまは 梨原。ひくれの驛。望月の驛。野口の驛。やまの驛。あはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事のありしかば、なほ取りあつめてあはれなり。

「一二六段」

社は 布留の社。活田の社。龍田の社。はなぶちの社。美久理の社。杉の御社。しるしあらんとをかし。

任事の明神いとたのもし。さのみ聞きけんとかいはれ給はんと思ふぞいとをかしき。蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけん、やめ給ひけん、いとをかし。

この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、唯若き人  
をのみ思しめして、四十になりぬるをば、失はせ給ひければ、他の國の遠きに往  
きかくれなどして、更に都のうちに入る者なかりけるに、中將なりける人の、い  
みじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七十ちかき親ふたりをもたりけるが、  
かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしと懼ち騒ぐを、いみじう幸ある人に  
て、遠き所には更に住ませじ、一日に一度見ではえあるまじとて、密によるく  
家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑて、往きつつ見る。お  
ほやけにも人にも、うせ隠れたるよしを知らせてあり。なごてか、家にいり居た  
らん人をば、知らずもおはせかし、うたてありける世にこそ親は上達部などにや  
ありけん、中將など子にてもたりけんは。いと心かしく、萬の事知りたりけれ  
ば、この中將若けれど、才あり、いたり賢くして、時の人に思すなりけり。

唐土の帝、この國の帝を、いかで謀りて、この國うち取らむとて、常にこころみ  
争事をしておくり給ひけるに、つやくと、まろに、美しげに削りたる木の二尺  
ばかりあるを、「これが本末いつかたぞ」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやう  
なければ、帝思しめし煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行きて、かうくの  
事なんあるといへば、「口はやからん川に立ちながら、横ざまに投げ入れ見んに、  
かへりて流れん方を、末と記してつかはせ」と教ふ。参りて我しり顔にして、「こ  
ころみ侍らん」とて、人々具して投げ入れたるに、さきに行くかたに印をつ  
けて遣したれば、實にさなりけり。

又二尺ばかりなる蛇の同じやうなるを、「これはいづれか雄雌」とて奉り。又  
更に人え知らず。例の中將行きて問へば、「二つをならべて、尾のかたに細きすば  
えをさしよせんに、尾はたらかさんを雌と知れ」といひければ、やがてそれを内  
裏のうちにてさ爲ければ、實に一つは動さず、一つは動しけるに、又しるしつけ  
て遣しけり。

ほど久しうて、七曲にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口あきたるが小さ  
きを奉りて、「これに緒通してたまはらん、この國に皆し侍ることなり」とて奉り  
たるに、いみじからん物の上手不用ならん。そこらの上達部より始めて、ありとあ  
る人知らずといふに、又いきて、かくなんといへば、「大きな蟻を二つ捕へて、  
腰に細き糸をつけ、又それに今少しふときをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見  
よ」といひければ、さ申して、蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、實にいと  
疾う穴のあなた口に出でにけり。さてその糸の貫かれたるを遣したりける後にな

ん、なほ日本はかしこかりけりとて、後々はさる事もせざりけり。

この中將をいみじき人に思しめして、「何事をし、いかなる位をか賜はるべ  
き」と仰せられければ、「更に官位をも賜はらじ、唯老いたる父母の隠れうせ  
て侍るを尋ねて、都にすますることを許させ給へ」と申しければ、「いみじう  
やすき事」とて許されにければ、よろづの人の親これを聞きて、よろこぶ事い  
みじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんありける。さてその人の神  
になりたるにやあらん、この明神の許へ詣でたりける人に、夜現れてのたまひける、

七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとも知らずやあるらん

とのたまひけると、人のかたりし。

## 「二二七段」

小一條院をば、今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿に  
おはします。西東はわたどのにて渡らせ給ふ。常に参つものばらせ給ふ。おまへは  
つばなれば、前裁などうゑ、笹ゆひていとをかし。

二月十日の日の、うらくとどかに照りたるに、わたどのの西の廂にて、う  
への御笛ふかせ給ふ。高遠の大眞、御笛の師にて物し給ふを、異笛ふたつして、高  
砂をりかへし吹かせ給へば、猶いみじうめでたしと言ふもよのつねなり。御笛  
の師にて、そのこともなど申し給ふ、いとめでたし。御簾のもとに集り出でて  
見奉るをりなどは、わが身に芹つみしなど覺ゆることこそなけれ。

すけただは木工允にて藏人にはなりにたる。いみじう荒々しうあれば、殿上人  
女房は、あらわにとぞつけたるを、歌につくりて、「さつなしのぬし、尾張人の種  
にぞありける」とつたふは、尾張の兼時が女の腹なりけり。これを笛に吹かせ給  
ふを、添ひ侍ひて、「なほたかう吹かせおはしませ、え聞きさふらはじ」と申せば、  
「いかでか、さりととも聞き知りなん」とて密にのみ吹かせ給ふを、あなたより渡ら  
せおはしまして、「このものなかりけり、只今こそふかめ」と仰せられて吹かせた  
まふ。いみじうをかし。

「一二八段」

身をかへたらん人などはかくやあらんと見ゆるものは、ただの女房にて侍る人の、御乳母になりたる。唐衣も著ず、裳をだに用意なく、白衣にて御前に添ひ臥して、御帳のうちの居所にして、女房どもを呼びつかひ、局に物いひやり、文とりつがせなどしてあるさまよ。言ひ盡すべくだにあらず。

雑色の藏人になりたるめでたし。去年の霜月の臨時の祭に御琴もたりし人とも見えず。君達に連れてありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。外よりなりたるなどは、おなじ事なれどさしもおぼえず。

「一二九段」

雪たかう降りて、今もなほふるに、五位も四位も、色づるはしう若やかなるが、袍の色いと清らにて、革の帯のかたつきたるを、宿直すがたにひきはこえて、紫の指貫も、雪に映えて、濃さ勝りたるを著て、袖の紅ならずば、おどろくしき山吹を出して、傘をさしたるに、風のいたく吹きて、横さまに雪を吹きかくれば、少し傾きて歩みくる、深沓半靴などのきはまで、雪のいと白くかかりたるこそをかしけれ。

「一三〇段」

廊の遣戸を、いと疾う押しあげたれば、御湯殿の馬道よりおりてくる殿上人の、萎えたる直衣指貫の、いたくほころびたれば、いろくの衣どもの、こぼれ出でたるを、押し入れなどして、北の陣のかたさまに歩み行くに、あきたる遣戸の前を過ぐとて、纒をひきこして、顔にふたぎて過ぎぬるをかし。

「一三一段」

岡は 船岡。片岡。鞆岡は笹の生ひたるがをかしきなり。かたらひの岡。人見の岡。

「一三二段」

ふるものは 雪。霰。霽はにけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮貫いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いと多つは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる、いとをかし。時雨。霰は板屋。霜も板屋。庭。

「一三三段」

日は 入日、入りはてぬる山際に、ひかりの猶とまりて、赤う見ゆるに、うす黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり。

「一三四段」

月は 有明。東の山の端に、ほそつて出づるほどあはれなり。

「一三五段」

星は 昂星。牽牛。明星。長庚。流星をだになからましかば、まして。

「一三六段」

雲は しろき。むらさき。黒き雲あはれなり。風吹くをりの天雲。明け離るるほどの黒き雲の、やうやう白くなりゆくもいとをかし。朝にさる色とかや、文にも作りけり。月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

「一三七段」

さわがしきものは 火。板屋のうへにて、烏の齋の産飯くふ。十八日清水に籠りあひたる。くらつなりて、まだ火もともさぬほどに、外々より

人の來集りたる。まして遠き所、他國などより家の主ののぼりたる、いと騒がし。近き程に火出で來ぬといふ、されど燃えは附かざりける。物見はてて車のかへり騒ぐほど。

「二三八段」

ないがしろなるもの 女官どもの髪あげたるすがた。唐繪の革の帶のうしろ。聖僧の擧動。

「二三九段」

ことばなめげなるもの 宮のめの祭文よむ人。舟こぐものども。雷鳴の陣の舍人。相撲。

「二四〇段」

さかしきもの 今やうの三年子。

兒の祈、被などする女ども。物の具こひ出でて、いのりの物どもつくるに、紙あまたおし重ねて、いと鈍き刀してきるさま、ひとへだに斷つべくも見えぬに、さる物の具となりければ、おのが口をさへ引きゆがめておし、切目おほかるものどもしてかけ、竹うち切りなどして、いとかうくしうしたてて、うちふるひ、祈る事どもいとさかし。かつは「何の宮のその殿の若君、いみじうおはせしを、かいのごひたるやうにやめ奉りしかば、祿多く賜はりし事、その人々召したりけれど、しるしもなかりければ、今に女をなん召す。御徳を見ること」など語るもをかし。げすの家の女あるじ。しれたるものそひしもをかし。まことに賢しき人を、をしへなどすべし。

宮仕所は 内。后宮。その御腹の姫君。一品の宮。齋院は罪深けれどをかし。ましてこのころはめでたし。春宮の御母女御。

「二四一段」

ただすぎにすぐるもの 帆をあげたる舟。人のよはひ。春夏秋冬。

「二四二段」

ことに人にしられぬもの 人の女親の老いたる。凶會曰。

「二四三段」

ふみことばなめき人こそ、いとどにくけれ。世をなのために書きなしたる、詞のにくきこそ。さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、實にわるき事ぞ。されど我えたらんは理、人のもとなるさへにくくこそあれ。

大かたさし向ひても、なめきは、などかく言ふらんとかたはらいたし。ましてよき人などをさ申す者は、さるはをこにていとにくし。

男しうなどわるくいふ、いとわるし。わが使ふものなど、おはする、のたまふなどいひたる、いとにくし。ここともに侍るといふ文字をあらせばやと聞くことこそ多かめれ。愛敬なくと、詞しなめきなどいへば、いはるる人も聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり嘲哂するなどはるるまである人も、わるきなるべし。殿上人宰相などを、ただなる名を、聊つつましげならずいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず、女房の局なる人をさへ、あのおもと君などいへば、めづらかに嬉しと思ひて、響むる事ぞいみじき。

殿上人公達を、御前より外にては官をいふ。また御前にて物をいふとも、きこしめさんには、などてかは、まろがなどいはん。さいはざらんにくし。かくいはんに、わるかるべき事かは。

「二四四段」

いみじくきたなきもの 軸輪。えせ板敷の筥。殿上のがうし。

「二四五段」



せめておそろしきもの 夜鳴る神。近き隣に盗人の入りたる。わが住む所に入りたるは、唯物もおぼえねば、何とも知らず。

「二四六段」

たのもしきもの 心地あしきころ、僧あまたして修法したる、思ふ人の心地あしきころ、眞にたのもしき人の言ひ慰めたのめたる。物おそろしき折の親どものかたはら。

「二四七段」

いみじうしたてて増取りたるに、いとほどなくすまめ増の、さるべき所などにて舅に逢ひたる、いとほしとや思ふらん。

ある人の、いみじう時に逢ひたる人の増になりて、一月もはかしくしうも來で止みにしかば、すべていみじう言ひ騒ぎ、乳母などやうの者は、まがしくしき事どもいふもあるに、そのかへる年の正月に藏人になりぬ。「あさましうかかるならひに、いかでとこそ人は思ひたぬめ」など言ひあつかふは聞くらんかし。

六月に、人の八講し給ひし所に、人々集りて聞くに、この藏人になれる増の、綾のうへの袴、蘇芳襲、黒半臂などいみじう鮮かにて、忘れにし人の車のとみのをに、半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしを、いかに見ると、車の人々も、知りたる限はいとほしがりを、他人どもも、「つれなく居たりしものかな」など後にもいひき。

なほ男は物のいとほしき、人の思はんことは知らぬなめり。

「二四八段」

世の中に猶いと心憂きものは、人にくまれんことこそあるべけれ。誰てふ物ぐるひか、われ人にさおもはれんとは思はん。されど自然に、宮つかへ所にも、親はらからの中にて、思はるおもはれぬがあるぞ、いとわびしきや。

よき人の御事は更なり、げすなどのほども、親などのかなしうする子は、目だ

ち見たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるはことわり、いかに思はざらんと覺ゆ。ことなることなきは、又これをかなしと思ふらんは、親なればぞかしとあはれなり。

親にも君にも、すべてうちかたらふ人にも人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。

「二四九段」

男こそ猶いとありがたく、怪しき心地したるものはあれ。いと清げなる人をすてて、にくげなる人をもたるもあやしかし。おほやけ所に入りたちする男、家の子などは、あるが中に、よからんをこそは選りて思は給はめ。及ぶまじからん際をだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりも思ひかくれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などを、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。かつ女の目にも、わろしと思ふをおもふは、いかなる事にかあらん。

かたちいとよく、心もをかしき人の、手もよう書き、歌をもあはれに詠みておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから、寄りつかず、らうたげにうち泣きて居たるを、見捨てて行きなどするは、あさましうおほやけはらだちて、眷屬の心地も心憂く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしきを思ひ知らぬよ。

「二五〇段」

よろづの事よりも、情ある事は、男はさらなり、女もこそめでたく覺ゆれ。なげの詞なれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしき事をいとほしとも、あはれなるをば實にいかに思ふらんなどいひけるを傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりもうれし。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそおぼゆれ。

必思ふべき人、訪ふべき人は、さるべきことなれば、取りわかれしもせず。さもあるまじき人のさし答をも、心易くしたるは嬉しきわざなり。いと易き事なれど、更にあらぬ事ぞかし。

大かた心よき人の、實にかどならぬは、男も女もありがたきことなソメリ。又さる人も多かるべし。

「二五一段」

人のうへいふを、腹立つ人こそ、いとわりなけれ。いかでかはあらん、我身をさし置きて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されどけしからぬやうにもあり。又おのづから聞きつけて恨もぞする、あいなし。また思ひ放つまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくば、うち出で笑ひもしつべし。

「二五二段」

人の顔に、とりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかし、珍しとこそ覺ゆれ。繪など數多たび見れば、目もたたずかし。近う立てる屏風の繪などは、いとめでたけれども見もやられず。人の貌はをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のままらるるよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

「二五三段」

古代の人の、指貫きたるこそ、いとたいくしけれ。

「二五四段」

十月十餘日の月いとあかきに、ありきて物見んとて、女房十五人ばかり、皆濃き衣をつへに著て、引きかくしつありし中に、中納言の君の、紅の張りたるを著て、頸より髪をかいこし給へりしかば、「あたらしきぞ」とて、「よくも似たまひしかな。鞆負佐」とぞわかき人々はつけたたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。

「二五五段」

成信の中將こそ、人の聲はいみじうよう聞き知り給ひしか。同じ所の人の聲などは、常に聞かぬ人は、更に入聞き分かず、殊に男は、人の聲をも手をも、見聞き聞きわかぬものを、いみじう密なるも、かしく聞き分き給ひこそ。

「二五六段」

大藏卿ばかり耳とき人なし。まことに蚊の睫の落つるほど、聞きつけ給ひつべくこそありしか。

職の御曹司の西おもてに住みしころ、大殿の四位少將と物いふに、側にある人の少將に、扇の繪の事いへとさざめけば、「今かの君立ち給ひなんにを」と密にいひ入るるを、その人だにえ聞きついで、「何とが」と耳をかたぶくるに、手をうちて、「にくし、さのたまは今日はたたじ」とのたまふこそ、いかで聞き給ひつらんと、あさましかりしか。

「二五七段」

うれしきもの、まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり捨てたる文を見るに、同じつづき數多見つけたる。いかならんと夢を見て、恐しと胸つづるに、ことにもあらず合せなどしたる、いとうれし。

よき人の御前に、人々數多待ふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、かたらせ給ふを、われに御覽じ合せてのたまはせ、いひきかせ給へる、いとうれし。遠き所は更なり、おなじ都の内ながら、身にやんごとなく思ふ人の悩むを聞きて、いかにくと覺束なく歎くに、おこたりたる消息得たるもうれし。

思ふ人の、人にも譬められ、やんごとなき人などの、口をしからぬものに思しのためもの折、もしは人と言ひかはしたる歌の聞えてはめられ、うちききなどに譬めらるる、みづからのうへには、まだ知らぬ事なれど、猶思ひやらるるよ。

いたうち解けたらぬ人のいひたる古き事の知らぬを、聞き出でたるもうれし。後に物の中などにて、見つけたるをかしう、唯これにこそありけれと、かのいひたりし人ぞをかしき。

檀紙、白き色紙、ただのも、白つ清きは得たるもうれし。恥しき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおほえたる、われながらうれし。常にはおほゆる事も、又人の問ふには、清く忘れて止みぬる折ぞ多かる。頓に物もとむるに、見出でたる。只今見るべき文などを、もとめ失ひて、萬の物をかへすく見たるに、捜し出でたる、いとうれし。

物あはせ、何くれと挑むことに勝ちたる、いかでか嬉しからざらん。又いみじうわれはと思ひて、したりがほなる人はかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これがたうは必せんずらんと、常に心づかひせらるるもをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬやうにて、たゆめ過すもをかし。にくき者のあしきめ見るも、罪は得らんと思ひながらうれし。指櫛むすばせて、をかしげなるも又うれし。思ふ人は、我身よりも勝りてうれし。

御前に人々所もなく居たるに、今のぼりたれば、少し遠き柱のもとなどに居たるを、御覧じつけて、「こち來」と仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。

「二五八段」

御前に人々あまた、物仰せらるる序などにも、「世の中のはらだたしう、むつかしう、片時あるべき心地もせで、いづちもく行きうせなばやと思ふに、ただの紙のいと白つ清らなる、よき筆、白き色紙、檀紙など得つれば、かくても暫時ありぬべかりけりとなん覺え侍る。また高麗縁の疊の筵、青つこまかに、縁の紋あざやかに、黒つ白つ見えたる、引き廣げて見れば、何か猶さらに、この世はえおもひはなつまじと、命さへ惜しくなんなる」と申せば、「いみじくはかなき事も慰むなるかな。姥捨山の月は、いかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。さぶらふ人も、「いみじくやすき患災のいのりかな」といふ。

さて後にほど經て、すずろなる事を思ひて、里にあるころ、めでたき紙を二十つつみに裹みて賜はせたり。仰事には、「疾く參れ」などのたまはせて、「これは聞しめし置きたる事ありしかばなん。わろかんめれば、壽命經もえ書くまじげにこ

そ」と仰せられたる、いとをかし。無下に思ひ忘れたりつることを、思しおかせ給へりけるは、猶ただ人にてだにをかし、ましておるかならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべきかたもなければ、ただ、

かけまくもかしこきかみのしるしには鶴のよはひになりぬべきかな

あまりにやと啓せさせ給へとてまゐらせつ。臺盤所の雜仕ぞ、御使には來たる。青き單衣などぞ取らせて。まことにこの紙を、草紙に作りてもてさわぐに、むつかしき事も紛るる心地して、をかしう心のうちもおほゆ。

二月ばかりありて、赤衣著たる男の、疊を持って來て、「これ」といふ。「あれは誰ぞ、あらはなり」など物はしたなついへば、さし置きて往ぬ。「いづこよりぞ」と問はすれば、「まかりにけり」とて取り入れたれば、殊更に御座といふ疊のさまにて、高麗などいと清らなり。心の中にはさにやあらんと思へど、猶おぼつかなきに、人ども出しもとめさすれど、うせにけり。怪しがり笑へど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづからも又いひに來なん。宮のほとりに案内しに參らせまほしけれど、なほ誰すずるにさるわざはせん、仰事なめりといみじうをかし。

二日はかり音もせねば、うたがひもなく、左京の君の許に、「かかる事なんある。さる事やけしき見給ひし。忍びて有様のたまひて、さる事見えすば、かく申したりとも、な漏し給ひそ」と言ひ遣りたるに、「いみじうかくさせ給ひし事なり。ゆめくまろが聞えたることなく、後にも」とあれば、さればよと、思ひしもしるく、をかしくて、文かきて、又密に御前の高欄におかせしものは、惑ひしほどに、やがてかきおとして、御階のもとにおちにけり。

「二五九段」

關白殿、二月十日のほどに、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ。女院、宮の御前もおはしますべければ、二月朔日のほどに、二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりしかば、何事も見入れず。

翌朝、日のうららかにさし出でたる程に起きたれば、いと白つあたらしうをかしげに作りたるに、御簾より始めて、昨日かけたるなんめり。御しつらひ、獅子

狛犬など、いつのほどにや入り居けんぞをかしき。

櫻の一文ばかりにて、いみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いと疾う咲きたるかな、梅こそ只今盛なゆめれと見ゆるは、作りたるなゆめり。すべて花のほひなど、咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけん。雨降らば、萎みなんかして見るぞ口惜しき。小家などいふ物の多かりける所を、今作らせ給へれば、木立などの見所あるは、いまだなし。ただ宮のさまぞ、けちかくをかしげなる。

殿渡らせ給へり。青鈍の堅紋の御指貫、櫻の直衣に、紅の御衣三つばかり、唯直衣にかさねてぞ奉りたる。御前より初めて、紅梅の濃きうすき織物、堅紋、立紋など、あるかぎり著たれば、唯ひかり満ちて、唐衣は萌黄、柳、紅梅などもあり。

御前に居させ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御答のあらまほしさを、里人に僅にのぞかせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して、「宮に何事を思しめすらん。こころめでたき人々を並べすゑて御覽するこそ、いと羨しけれ。一人わるき人なしか、これ家々の女ぞかし。あはれなり。よくかへりみてこそさぶらはせ給はめ。さてこの宮の御心をば、いかに知り奉りて集り参り給へるぞ。いかにいやしく物惜しませさせ給ふ宮とて、われは生れさせ給ひしよりいみじう仕まつれど、まだおろしの御衣一つ給はぬぞ。何かしりうことには聞えん」などの給ふがをかしきに、みな人々笑ひぬ。「まことぞ、をこなりとてかく笑ひまするが恥し」などの給はする程に、内裏より御使にて、式部丞某まゐれり。

御文は、大納言殿取り給ひて、殿に奉らせ給へば、ひき解きて、「いとゆかしき文かな。ゆるされ侍らばあけて見侍らん」との給はすれば怪しうとおぼいたゆめり。「辱くもあり」とて奉らせ給へば、取らせ給ひても、ひろげさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき。すみのまより、女房箇さし出でて、三四人御几帳のもとに居たり。「あなたにまかりて、祿の事ものし侍らん」とてたせ給ひぬる後に、御文御覽す。御返しは紅梅の紙に書かせ給ふが、御衣のおなじ色にはひたる、猶斯うしも推し量り参らする人はなくやあらんとぞ口をしき。今日は殊更にとて、殿の御かたより祿は出させ給ふ。女の装束に、紅梅の細長そへたり。着などあれば、酔はさまほしけれど、「今日はいみじき事の行幸に、あが君許させ給へ」と大納言殿にも申して立ちぬ。

君達などいみじう假粧し給ひて、紅梅の御衣も劣らじと著給へるに、三の御前は御匣殿なり。中の姫君よりも大に見え給ひて、うへなど聞えんにぞよかゆめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて、新しく参りたる人々には見え給はね

ば、いぶせき心地す。

さし集ひて、かの日の装束、扇などの事をいひ合するもあり。又挑みかはして、「まるは何が、唯あらんにまかせてを」などいひて、「例の君」などにくまる。夜さりまかづる人も多かり。かかる事にまかづれば、え止めさせ給はず。

うへ日々に渡り、夜もおはします。君達などおはすれば、御前人少なく候はねばいとよし。内裏の御使日々に参る。御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて、萎みわるうなるだにわびしきに、雨の夜降りたる翌朝、いみじうむとくなり。いと疾く起きて、「泣きて別れん顔に、心おとりこそすれ」といふを聞かせ給ひて、「げに雨のけはひしつるぞかし、いかならん」とて驚かせ給ふに、殿の御方より侍の者ども、下種など来て、數多花のもとに唯よりによりて、引き倒し取りて、「密に往きて、まだ暗からんに取れとこそ仰せられつれ、明け過ぎにけり、不便なるわざかな、疾く」と倒し取るに、いとをかしくて、いははいはなんと、兼澄が事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、「かの花盗む人は誰ぞ、あしかんめり」といへば、笑ひて、いとど逃げて引きもていぬ。なほ殿の御心はをかしうおはすかし。莖どもにぬれまるがれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。

掃殿寮まゐりて御格子まゐり、主殿の女官御きよめまゐりはてて、起きさせ給へるに、花のなければ、「あなあさまし。かの花はいづちいける」と仰せらる。「あかつき盗人ありといふなりつるは、なほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれがしつるぞ。見つや」と仰せらる。「さも侍らず。いまだ暗くて、よくも見侍らざりつるを、しろみたるものの侍れば、花を折るにやと、うしろめたさに申し侍りつる」と申す。「さりとともかくはいかにか取らん。殿の隠させ給へるなゆめり」とて笑はせ給へば、「いで、よも侍らじ。春風の爲て侍りなん」と啓するを、「かくいはんとて隠すなりけり。ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれ」と仰せらるるも、珍しき事ならねど、いみじうめでたき。

殿おはしませば、寐くたれの朝顔も、時ならずや御覽せんと引き入らる。おはしますまに、「かの花うせにけるは、いかにかくは盗ませしぞ、いぎたなかりける女房たちかな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば、「されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれ」と忍びやかにいふを、いと疾く聞きつけさせ給ひて、「さ思ひつる事ぞ、世に他人いでて見つけじ、宰相とそことの程ならんと推し量りつ」とて、いみじう笑はせ給ふ。「さりげなるものを、少納言は春風におほせける」と宮

の御前にうちあませ給へる、めでたし。「虚言をおほせ侍るなり。今は山田も作るらん」とうち誦せさせ給へるも、いとなまめきをかし。「さてもねたく見つけれにけるかな。さばかり誠めつるものを、人の所に、かかるしれものあるこそ」との給はず。「春風はそらにいとをかしも言ふかな」と誦せさせ給ふ。「ただことには、うるさく思ひよりて侍りつかし。今朝のさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふを小若君「されどそれはいと疾く見て、雨にぬれたりなど、おもてぶせなりといひ侍りつ」と申し給へばいみじうねたからせ給ふもをかし。

さて八日九日の程にまかづるを、「今少し近うなして」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる晝つかた、「花のこころ開けたりや、いかがいふ」との給はせられたれば、「秋はまだしく侍れど、よにこの度なんのぼる心地し侍る」など聞えさせつ。

出させ給ひし夜、車の次第もなく、まづくとのり騒ぐがにくければ、さるべき人三人と、「猶この車に乗るさまのいとさわがしく、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべく感ふいと見ぐるし。たださはれ、乗るべき車なくてえ参らずば、おのづから聞しめしつけて賜はせてん」など笑ひ合ひて立てる前より、押し凝りて、惑ひ乗り果てて出でて、「かつか」といふに、「まだここに」と答ふれば、宮司寄り来て、「誰々かおはする」と問ひ聞きて、「いと怪しかりけることかな。今は皆乗りぬらんとこそ思ひつれ。こはなどてかくは後れさせ給へる。今は得選を乗せんとしつるに。めづらかなるや」など驚きて寄せさせ給ふ。「さはまづその御志ありつらん人を乗せ給ひて、次にも」といふ聲聞きつけて、「けしからず腹ぎたなくおはしけり」などいへば、乗りぬ。その次には、誠にみづしが車にあれば、火もいと暗きを、笑ひて、二條の宮に参りつきたり。

御輿は疾く入らせ給ひて、皆しつらひ居させ給ひけり。「ここに呼べ」と仰せられければ、左京、小左近などいふ若き人々、参る人ごとに見れど、なかりけり。おるるに随ひ、四人つつ御前に参り集ひて侍ふに、「いかなるぞ」と仰せられけるも知らず、ある限おりはててぞ、辛うじて見つけられて、「かばかり仰せらるるには、などかくおそく」とて率ゑて参るに、見れば、いつの間に、かづは年ころの住居のさまに、おはしましつききたるにかとをかし。「いかなれば、かう何かと尋ねばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるるに、とかくも申さねば、諸共に乗りたる人、「いとわりなし。さいはての車に侍らん人は、いかでか疾くは参り侍らん。これもほとくえ乗るまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりて、ゆづり侍りつるなり。

暗う侍りつる事こそ、わびしう侍りつれ」と笑ふく啓するに、「行事するものいとあやしきなり。又などは心知らざらん者こそつつまめ、右衛門などはいへかしなど仰せらる。「されどいかでか走りさきだち侍らん」などいふも、かたへの人、にくしと聞くらんと聞ゆ。「さまあしつて、かく乗りたらんもかしこかるべき事かは。定めたらんさまの、やんことなからんこそよからめ」とものしげに思し召したり。「おり侍るほどの待遠に、苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。

御經のことに、明日渡らせおはしませんとて、今宵参りたり。南院の北面にさしのぞきたれば、たかつきどもに火をともして、二人三人四人、さるべきどち、屏風引き隔てつるもあり、几帳中にへだてたるもあり。又さらでも集ひ居て、衣ども閉ぢ重ね、裳の腰さし、假粧するさまは、更にもいはず、髪などいふものは、明日より後はありがたげにぞ見ゆる。

「寅の時になん渡らせ給ふべかなる。などが今まで参り給はざりつる。扇もたせて、尋ね聞ゆる人ありつ」など告ぐ。「さて、實に寅の時か」とさうぞき立ちてあるに、明け過ぎ、日もさし出でぬ。西の對の唐廂になん、さし寄せて乗るべきとて、あるかぎり渡殿へ行く程に、またうひくしきほどなる今参どもは、いとつつましげなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房車に乗せさせ給ふを御覽すとて、御簾の中に、宮、淑景舎、三四の君、殿のうへ、その御第三所、立ち竝みておはします。

車の左右に、大納言、三位中將二所して、簾うちあげ、下簾ひきあげて乗せ給ふ。皆うち群れてだにあらば、隠れ所やあらん。四人つつ書立に随ひて、それくと呼び立てて、乗せられ奉り、歩み行く心地、いみじう實にあさましう、顯證なりとも世の常なり。御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前を見るしと御覽せんは、更にわびしき事がぎりなし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髪などもあがりやすらんと覺ゆ。辛うじて過ぎたれば、車のもとに、いみじう恥しげに、清けなる御さまどもして、うち笑みて見給ふも現ならず。されど倒れず、そこまでは行き著きぬこそ、かしこき顔もなきかと覺ゆれ。

皆乗りはてぬれば、引き出でて、二條の大路に榻立てて、物見車のやうにて立ち竝れたる、いとをかし。人もさ見るらんかすと、心ときめきせらる。四位五位六位など、いみじう多う出で入り、車のもとに来て、つくろひ物いひなどす。まづ院の御むかへに、殿を始め奉りて、殿上と地下と皆参りぬ。それ渡らせ給ひて後、宮は出させ給ふべしとあれば、いと心もなしと思ふほどに、日さしあがり

てぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼の車、一の御車は唐の車なり。それに續きて尼の車、後口より水精の珠數、薄墨の袈裟衣などいみじくて、簾はあげず。下簾も薄色の裾少し濃き。次にただの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅をおしわたし、かとりを表著ども、いみじうなまめかし。日はいとうららかなれど、空は淺緑に霞み渡るに、女房の装束の匂ひあひて、いみじき織物のいろくの唐衣などよりも、なまめかしう、をかしき事限なし。

關白殿、その御次の殿ばら、おはする限もてかしづき奉らせ給ふ、いみじうめでたし。これら見奉り騒ぐ、この車どもの二十立ち並べたるも、又をかしと見ゆるらんかし。

いつしか出でさせ給はばなど、待ち聞えさするに、いと久し。いかならんと心もとなく思ふに、辛うじて、采女八人馬に乗せて引き出づめり。青末濃の裳、裙帶、領巾などの風に吹きやられたる、いとをかし。豊前といふ采女は、典藥頭重正が知る人なり。葡萄染の織物の指貫を著たれば、いと心ごとなり。「重正は色許されにけり」と山の井の大納言は笑ひ給ひて、皆乗り續きて立てるに、今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたしと見え奉りつる御有様に、これは比ぶべからざりけり。朝日はなくとさしあがる程に、木の葉のいと花やかに輝きて、御輿の帷子の色艶などさへぞいみじき。御綱はりて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、實に頭の毛など、人のいふは更に虚言ならず。さて後に髪あしからん人もかこちつべし。あさましう、いつくしう、猶いかでかかる御前に馴れ仕うまつらんと、わが身もかしこうぞ覺ゆる。御輿過ぎさせ給ふほど、車の榻ども、人給にかきおろしたりつる、また牛どもかけて、御輿の後につぎきたる心地の、めでたう興あるありさま、いふかたなし。

おはしましつきたれば、大門のもとに高麗唐土の樂して、獅子狛犬をどり舞ひ、笙の音、鼓の聲に物もおぼえず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらんと、空に響きのぼるやうにおほほ。

内に入りぬれば、いろくの錦のあげばりに、御簾いと青くてかけ渡し、屏幔など引きたるほど、なべてただにこの世とおぼえず。御棧敷にさし寄せたれば、又この殿ばら立ち給ひて、「疾くおりよ」との給ふ。乗りつる所だにありつるを、今少しあかう顯證なるに、大納言殿、いとものくしく清けにて、御下襲のしりいと長く所せげにて、簾うちあげて、「はや」とのたまふ。つくろひそへたる髪も、唐衣の中にてふくだみ、あやしうなりたらん。色の黒さ赤ささへ見わかぬべき

程なるが、いとわびしければ、ふとも得降りず。「まつ後なるこそは」などいふほども、それも同じこころにや、「退かせ給へ、かたじけなし」などいふ。「恥ぢ給ふかな」と笑ひて、立ちかへり、辛うじておりぬれば、寄りおはして、「むねたかなどに見せて、隠しておるせと、宮の仰せらるれば來たるに、思ひくまなき」とて、引きおろして率て参り給ふ。さ聞えさせ給ひつらんと思ふもかたじけなし。

参りたれば、初おりける人どもの、物の見えぬべき端に、八人ばかり出で居にけり。一尺と二尺ばかりの高さの長押のうへにおはします。ここに立ち隠して、「率て参りたり」と申し給へば、「いつら」とて几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣裳奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからんや、中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重の御衣に、赤色の唐の御衣、地摺の唐の羅に、象眼重ねたる御裳など奉りたり。織物の色、更になべて似るべきやうなし。

「我をばいが見る」と仰せらる。「いみじうな候ひつる」なども、言に出でてはよのつねにのみこそ。「久しうやありつる。それは殿の大夫の、院の御供にきて、人に見えぬる、おなじ下襲ながら、宮の御供にあらん、わろしと人思ひなんとて、殊に下襲ぬはせ給ひけるほどに、遅きなりけり。いとすき給へり」などとうち笑はせ給へる、いとあきらかに晴れたる所は、今少しげざやかにめでたう、御額あげさせ給へる釵子に、御分目の御髪の聊よりて、著く見えさせ給ふなどさへぞ、聞えんかたなき。

三尺の御几帳一雙をさしちがへて、こなたの隔にはして、その後には、疊一枚を、長さまに縁をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衛督忠君と聞えけるが御女、宰相の君とは、富小路の左大臣の御孫、それ二人ぞうへに居て見え給ふ。御覽じわたし、「宰相はあなたに居て、うへ人どもの居たる所、往きて見よ」と仰せらるるに、心得て、「ここに三人いとよく見侍りぬべし」と申せば、「さば」とて召し上げさせ給へば、しもに居たる人々、「殿上許さるる内舍人なன்றりと笑はせんと思へるか」といへば、「うまさへのほどぞ」などいへば、そこに入り居て見るは、いとおもたし。

かかる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり、また君の御ためにも輕々しう、かばかりの人をさへ思しけんなど、おのづから物しり、世の中もどきなどする人は、あいななく畏き御事にかかりて、かたじけなけれど、あな辱き事などは、又いかがは。誠に身の程過ぎたる事もありぬべし。

院の御棧敷、所々の棧敷ども見渡したる、めでたし。殿はまつ院の御棧敷に參

り給ひて、暫時ありてここに参り給へり。大納言一所、三位中将は陣近う参りけるままにて、調度を負ひて、いとつき／＼しうをかしうておはす。殿上人、四位五位、こちたうち連れて、御供に侍ひ並び居たり。

入らせ給ひて見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、裳、唐衣、御匣殿まで著給へり。殿のうへは、裳のうへに小袷をそ著給へる。「繪に書きたるやうなる御さまどもかな。今いらい今日はと申し給ひそ。三四の君の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、御前こそおはしませ。御棧敷の前に陣をすゑさせ給へるは、おぼろげのことか」とてうち泣かせ給ふ。實にと、見る人も涙ぐましきに、赤色櫻の五重の唐衣を著たるを御覽じて、「法服ひとくだり足らざりつるを、俄にまとひしつるに、これをこそかり申すべかりけれ。さらばもし又、さやうの物を切り調めたるに」との給はするに、又笑ひぬ。大納言殿少し退き居給へるが、聞き給ひて、「清僧都のにやあらん」との給ふ。一言としてをかしからぬ事ぞなきや。

僧都の君、赤色の羅の御衣、紫の袈裟、いと薄き色の御衣ども、指貫者たまひて、菩薩の御様にて、女房にまじりありき給ふもいとをかし。「僧綱の中に、威儀具足してもおはしませで、見ぐるしう女房の中に」など笑ふ。

父の大納言殿、御前より松君率て奉る。葡萄酒の織物の直衣、濃き綾のうちたる、紅梅の織物など著給へり。例の四位五位いと多かり。御棧敷に女房の中に入れ奉る。何事のあやまりにか、泣きののしり給ふさへいとえ／＼し。

事始りて、一切経を、蓮の花のあかきに、一花つつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、何くれまでもて渡る、いみじうたふとし。大行道導師まあり、回向しばし待ちて舞などする、日ぐらし見るに、目もたゆ／＼苦しう。うちの御使に、五位の藏人まありたり。御棧敷の前に胡床立てて居たるなど、實にぞ猶めでたき。夜ざりつかた、式部丞則理まありたり。「やがて夜ざり入らせ給ふべし。御供に侍へと、宣旨侍りつ」とて歸りも参らず。宮は「なほ歸りて後に」との給はすれども、また藏人の辨まありて、殿にも御消息あれば、唯「仰のまま」とて、入らせ給ひなす。院の御棧敷より、千賀の鹽竈などのやうの御消息、をかしき物など持て参り通ひたるなどもめでたし。

事はて院還らせ給ふ。院司上達部など、このたびはかたへぞ仕つ奉り給ひける。宮は内裏へ入らせ給ひぬるも知らず、女房の従者どもは、「二條の宮にぞおはしませさん」とて、そこに皆往き居て、待てど／＼見えぬ程に、夜いたつ更けぬ。内裏には宿直物持て来らんと待つに、きよく見えぬ。あざやかなる衣の、身にもつ

かぬを著て、寒きままに、にくみ腹立てどかひなし。翌朝きたるを、「いかにかく心なきぞ」などいへば、となふる如き言はれたり。又の日雨降りたるを、殿は「これになん、わが宿世は見え侍りぬる。いかが御覽する」と聞えさせ給ふ。御心おちぬ理なり。

「二六〇段」

たふときもの 九條錫杖。念佛の回向。

「二六一」

歌は 杉たてる門。神樂歌もをかし。今様はながくてくせづきたる。風俗よくうたひたる。

「二六二」

指貫は 紫の濃き。萌黄。夏は二藍。いと暑き頃、夏蟲の色したるもすずしげなり

「二六三段」

狩衣は 香染のうすき。白きふくさの赤色。松の葉いろしたる。青葉。さくら。やなぎ。又あをき。ふち。男は何色のきぬも。

「二六四段」

ひとへは 白き。ひの装束の紅のひとへ。袖などかりそめに著たるはよし。されどなほ色きばみたる單など著たるは、いと心つきなし。練色のきぬも著たれど、なほ單は白つてぞ、男も女もよろづの事まさりてこそ。

「二六五段」

下襲は 冬は躑躅、搔練襲、蘇枋襲。夏は二藍、白襲。

「二六六段」

扇の骨は 青色はあかき、むらさきはみどり。

「二六七段」

檜扇は 無紋。から繪。

「二六八段」

神は 松尾。八幡、この國の帝にておはしましけんこそいとめでたけれ。行幸などに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし。大原野。賀茂は更なり。稻荷。春日いとめでたく覚えさせ給ふ。佐保殿などいふ名さへをかし。

平野はいたづらなる屋ありしを、「ここは何する所ぞ」と問ひしかば、「神輿宿」といひしめでたし。嚴籬に蔦などの多くかかりて、紅葉のいろくありし、秋にはあへずと、貫之が歌おもひ出でられて、つくぐと久しうたれたりし。水分神いとをかし。

「二六九段」

崎は 唐崎。いかが崎。三保が崎。

「二七〇段」

屋は 丸屋。四阿屋。

「二七一一段」

時奏するいみじうをかし。いみじう寒きに、夜中ばかりなどに、「こほく」といほめき、沓すり来て、弦うちなどして、「何家の某、時丑三つ、子四つ」など、あてはかなる聲にいひて、時の杭さす音などいみじうをかし。子九つ、丑八つなどこそ、さとびたる人はいへ、すべて何もく、四つのみぞ杭はさしける。

「二七二一段」

日のうらぐとある晝つかた、いたう夜ふけて、子の時など思ひ参らするほどに、男ども召したるこそ、いみじうをかしけれ。夜中ばかりに、また御笛の聞えたる、いみじうめでたし。

「二七三一段」

成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちとをかしげに、心はへもいとをかしうおはす。伊豫守兼輔がむすめの忘れられて、伊豫へ親のくだりしほど、いかに哀なりけんこそ覚えしか。あかつきに往くとて、今宵おはしまして、有明の月に歸り給ひけん直衣すがたなどこそ。

そのかみ常に居て、ものがたりし、人のうへなど、わるきは「わるし」などの給ひしに。物忌などくすしうするものの、名を姓にて持たる人のあるが、ことびとの子になりて、平などいへど、唯もとの姓を、若きひとく言種にて笑ふ。ありさまも異なることなし。兵部とて、をかしき方などもかたきが、さすがに人などにさしまじり心などのあるは、御前わたりに「見苦し」など仰せらるれど、腹ぎたなく知り告ぐる人もなし。

一條の院つくられたる一間のところには、つらき人をば更に寄せず。東の御門につと向ひて、をかしき小廂に、式部のおもと諸共に、夜も晝もあれば、うへも常に物御覽じに出でさせ給ふ。「今宵は皆内に寐ん」とて南の廂に二人臥しぬる後に、いみじう叩く人のあるに、「うるさし」などいひ合せて、寐たるやうにてあれば、猶いみじうかしかましう呼ぶを、「あれおこせ、虚寐ならん」と仰せられけれ



ば、この兵部来て起せど、寐たるさまなれば、「更に起き給はざりけり」といひに  
往きたるが、やがて居つきて物いふなり。

しばしかとおもふに、夜いたう更けぬ。權中將にこそあんなれ。「こは何事をか  
うはいふ」とただ密に笑ふも、いかでか知らん。あかつきまでいひ明して歸り  
ぬ。「この君いとゆゆしかりけり。更におはせんに物いはじ。何事をさは言ひあか  
すぞ」など笑ふに、遣戸をあけて女は入りぬ。

翌朝例の廂に物いふを聞けば、「雨のいみじう降る日きたる人なん、いとあはれ  
なる。日ごろおぼつかなくなつらき事ありとも、さて濡れて来らば、憂き事も皆忘  
れぬべし」とはなごていふにかあらんを。昨夜も昨日の夜も、それがあなたの夜  
も、すべてこのごろは、うちしきり見ゆる人の、今宵もいみじからん雨にさはら  
で来らんは、一夜も隔てじと思ふなめりと、あはれなるべし。さて日ごろも見  
えず、おぼつかなくて過さん人の、かかる折にしも来んをば、更にまた志あるに  
はえせじとこそ思へ。人の心々なればにやあらん、物見しり、思ひ知りたる女の、  
心ありと見ゆるなどをばかたらひて、數多いく所もあり、もとよりのよすがなど  
もあれば、繁つしもえ來ぬを、猶さるいみじかりし折に來りし事など、人にも語  
りつがせ、身をほめられんと思ふ人のしわざにや。それも無下に志なからんには、  
何しにかは、さも作事しても見えんと思はん。

されど雨の降る時は、唯むつかしう、今朝まではれぐしかりつる空とも覺え  
ずにくくて、いみじき廊のめでたき所ともおぼえず。ましていとさらぬ家などは、  
疾く降り止みぬかしとこそ覺ゆれ。

月のあかきに来らん人はしも、十日二十日一月、もしは一年にても、まして七  
八年になりても、思ひ出でたらんは、いみじうをかしと覺えて、え逢ふまじうわ  
りなきところ、人目つつむべきやうありとも、かならず立ちながらも、ものいひ  
て返し、又とまるべからんをば留めなどしつべし。

月のあかき見るばかり、遠く物思ひやられ、過ぎにし事、憂かりしも、嬉しかり  
しも、をかしと覺えしも、只今のやうに覺ゆる折やはある。こまの物語は、何  
ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき、見物多からねど、月に昔を思ひ出でて、  
むしばみたる輪廻とり出でて、もと見し駒にといひて立てる、いとあはれなり。

雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとにくそある。や  
んことなき事、おもしろかるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに降ればい  
ふかひなく口惜しきに、何かその濡れてかこちたらんがめでたからん。

實に交野少將もどきたる落窪少將などはをかし。それも昨夜一昨日の夜も、あ  
りしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞ、にくきたなかりけん。さらでは何か、  
風などの吹く、荒荒しき夜きたるは、たのもしくをかしつもありなん。

雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりこちて、忍びたることは更なり。い  
とさあらぬ所も、直衣などは更にもいはず、狩衣、袍、藏人の青色などの、いと  
ひやかに濡れたらんは、いみじうをかしかるべし。緑衫なりとも、雪にだに濡  
れなばにくかるまじ。昔の藏人は、夜など人の許などに、ただ青色を着て、雨に  
ぬれても、しほりなどしけるとか。今は晝だに著ざんめり。ただ緑衫をのみこそ、  
うちかづきたんめれ。衛府などの著たるは、ましていとをかしかりしものを、か  
く聞きて、雨にありかぬ人やあらんすらん。

月のいとあかき夜、紅の紙のいみじう赤きに、唯「あらず」とも書きたるを、廂  
にさし入れたるを、月にあてて見しこそをかしかりしか。雨降らん折はさはあり  
なんや。

「二七四段」

常に文おこする人の、「何かは今はいふかひなし。今は」などいひて、又の口音  
もせねば、さすがにあげたてば、文の見えぬこそさうくしけれと思ひて、「そ  
てもきはくしかりける心かな」などいひて暮しつ。

又の日、雨いたう降る晝まで音もせねば、「無下に思ひ絶えにけり」などいひて、  
端のかたに居たる夕暮に、笠さしたる童の持てきたるを、常よりも疾くあけて見  
れば、「水ます雨の」とある、いと多くよみ出しつる歌どもよりはをかし。

「二七五段」

ただ朝はさしもあらず、さえつる空の、いと暗うかき曇りて、雪のかきくらし  
降るに、いと心ばそく、見出すほどもなく、白く積りて、猶いみじう降るに、隨  
身だちて細やかに美しき男の、傘さして、側の方なる家の戸より入りて、文を  
さし入れたるこそをかしけれ。いと白き檀紙、白き色紙のむすべたる、うへにひ  
きわたしける墨の、ふと氷にければ、すそ薄になりたるを開けたれば、いと細

く巻きて、結びたる巻目は、こま／＼とくぼみたるに、墨のいと黒う薄く、くだりせばに、裏表書きみだりたるを、うち返し久しう見るこそ、何事ならんと、よそにて見やりたるもをかしけれ。まいてうちほほゑむ所はいとゆかしけれど、遠う居たるは、黒き文字などばかりぞ、さな／＼めりと覺ゆるかし。

額髪ながやかに、おもやうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともす程も心もとなぎにや。火桶の火を挟みあげて、たど／＼しげに見居たるこそをかしけれ。

「二七六段」

きら／＼しきもの 大將の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人式部丞。白馬の日、大路ねりたる。御齋會、左右衛門佐摺衣やりたる。季の御讀經。熾盛光の御修法。

「二七七段」

神のいたく鳴るをりに、雷鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右大將、中少將などの、御格子のつらに待ひ給ふ、いとをかしげなり。はてぬるをり、大將の仰せて、のぼりおりとの給ふらん。

「二七八段」

坤元録の御屏風こそ、をかしう覺ゆる名なれ。漢書の御屏風は、雄々しくぞ聞えたる。月次の御屏風もをかし。

「二七九段」

方違などして夜ふかくかへる、寒きこといとわりなく、おとがひなども皆おちぬべきを、辛うじて來つきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黒みたる所なくめでたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆらんも知らず居たるに、こと人の來て、炭入れておこ

すこそいとにくけれ。されどめぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。皆火を外さまにかき遣りて、炭を重ね置きたるいただきに、火ども置きたるがいとむつかし。

「二八〇段」

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火起して、物語などして集り待ふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせたまふ。人々も「皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつね。なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。

「二八一段」

陰陽師の許なる童こそ、いみじう物は知りたれ。被など爲に出でたれば、祭文など讀む事、人はなほこそ聞け。そと立ちはしりて、白き水いかけさせよともいはぬに、爲ありくさまの、例知り、いささか主に物いはせぬこそ羨しけれ。さらん人もがな、つかはんとこそ覺ゆれ。

「二八二段」

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはか／＼しからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えてにくげなるを、「あらぬものなめり」といへば、「かかるもあり」などいふに、

さかしらに柳のまゆのひろ／＼りて春のおもてをふする宿かな

とこそ見えしか。

そのころ又おなじ物忌しに、さやうの所に出でたるに、「一日といふ書つかた、いとど徒然まさりて、只今も参りぬべき心地する程にしも、仰事あれば、いとつれ

しくて見る。淺緑の紙に、宰相の君いとをかしく書き給へり。

いかにしてすぎにしかたを過しけん暮しわづらふ昨日けふ哉

となん。わたくしには、「今日しも千年の心地するを、曉だに疾く」とあり。この君のの給はんだにをかしがるべきを、まして仰事さまには、おろかならぬ心地すれど、啓せん事とはおぼえぬこそ。

雲のうへにくらしかねけるはるの日を所がらともながめつる哉

私には、「今宵の程も、少將にやなり侍らんずらん」とて、曉に参りたれば、「昨日の返し、暮しかねけるこそいとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるゝ、いとわびじう誠にさるこそ也。

「二八三段」

十二月二十四日、宮の御佛名の初夜の御導師聞きて出づる人は、夜半も過ぎぬらんかし。

里へも出で、もしは忍びたる所へも、夜のほど出づるにもあれ、合ひ乗りたる道の程こそをかしけれ。

曰「ころ降りつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしたり、土などこそむら／＼黒きなれ、屋のうへは唯おしなべて白きに、あやしき賤の屋もおもがくして、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。かねなどおしへぎたるやうなるに、水晶の莖などはまほしきやうにて、長く短く、殊更かけ渡したると見えて、いふにもあまりめでたき垂氷に、下簾も懸けぬ車の簾を、いと高く上げたるとは、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、しるきなど、七つ八つばかり著たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる艶など、月に映えて、をかしう見ゆる傍に、葡萄染の堅紋の指貫、白き衣ともあまた、山吹、紅など著こぼして、直衣のいと白き引きときたれば、ぬぎ垂れられて、いみじうこぼれ出でたり。指貫の片つかたは、軾の外にふみ出されたるなど、道に人の逢ひたらば、をかしと見つべし。月影のはしたなさに、後ざまへすべり入りたるを、引き寄せあ

らになされて笑ふもをかし。凜々として氷鋪けりといふ詩を、かへす／＼誦じておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、往く所の近くなるもくちをし。

「二八四段」

宮仕する人々の出で集りて、君々の御事めで聞え、宮の内外のはしの事ども、互に語り合せたるを、おのが君々、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。

家廣く清けにて、親族は更なり、唯うちかたらひなどする人には、宮づかへん、片つ方にすゑてこそあらまほしけれ。

さるべき折は、一所に集りぬて物語し、人の詠みたる歌、何くれと語りあはせ、人の文など持てくる、もろともに見、返事かき、また睦しうくる人もあるは、清げにうちしつらひて入れ、雨など降りてえ歸らぬも、をかしうもてなし、参らん折はその事見入れて、思はんさまにして出し立てなどせばや。よき人のおはします御有様など、いとゆかしきぞ、けしからぬ心にやあらん。

「二八五段」

見ならひするもの 欠伸。兒ども。なまけしからぬえせもの。

「二八六段」

うちとくまじきもの あしと人にいはるる人。さるはよしと知られたるよりは、うらなくぞ見ゆる。

船の路。日のつららかなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑のうちたるを引き渡したるやうに見えて、聊恐しき氣色もなき若き女の、袖ばかり著たる、侍の者の若やかなる諸共に、櫓といふものを押して、歌をいみじううたひたる、いとをかしう、やんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたう吹き、海のおもてのただ荒れにあしうなるに、物もおぼえず、泊るべき所に漕ぎつくるほど、船に浪のかけたるさまなどは、さばかり和かりつる海とも見えずかし。

思へば船に乗りてありく人ばかり、ゆゆしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さまはかなき物に乗りて、漕ぎ往くべき物にぞあらぬや。ましてそこひも知らず、千尋などもあらんに、物いと積み入れたれば、水際はただ一尺ばかりだになきに、下種どもの、聊恐しと思ひたらず、走りありき、つゆ荒くもせば沈みやせんと思ふに、大なる松の木などの、二三尺ばかりにてまるなるを、五つ六つほうほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。

蓬かたといふ物にぞおはす。されど奥なるはいささかたのもし。端に立てる者どもこそ、目くるる心地すれ。早緒つけて、のどかにすげたる物の弱けさよ。絶えなば何にかはならん、ふと落ち入りなんを、それだにいみじう太くなどもあらず。わが乗りたるはきよげに、帽額のすきかけ、妻戸格子あげなどして、されどひとしう重げになどもあらねば、ただ家の小きにてあり。他船見やるこそいみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りて、うち散したるやうにぞいと能く似たる。泊りたる所にて、船ごとに火ともしたる、をかしう見ゆ。

遊艇とつけて、いみじう小きに乗りに漕ぎありく早朝など、いとあはれなり、あとのしら浪は、誠にこそ消えてもゆけ。よろしき人は、乗りてありくまじき事とこそ猶おほゆれ。陸路も又いとおそろし。されどそれは、いかにもく地につきたれば、いとたのもしと思ふに、蜚のかつきしたるは憂きわざなり。腰につきたる物絶えなば、いかがせんとなん。男だにせば、さてもありぬべきを、女はおほるげの心ならじ。男は乗りて、歌などうちうたひて、この桡繩を海につけありく、いと危く、うしろをたくはあらぬにや、蜚ものぼらんとては、その繩をなん引く。取り惑ひ繰り入るさまぞ、理なるや。船のはたを抑へて、放ちたる息などこそ、まことに唯見る人だにしほたるに、落し入れて漂ひありく男は、目もあやにあさまし。更に人の思ひかくべきわざにもあらぬことにこそあめれ。

「二八七段」

右衛門尉なる者の、えせ親をもたりて、人の見るにおもてぶせなど、見ぐるしう思ひけるが、伊豫國よりのぼるとて、海に落し入れてけるを、人の心うがり、あさましがりけるほどに、七月十五日、盆を奉るといそくを見給ひて、道命阿闍梨、

わたつ海に親をおし入れてこの主のぼんする見るぞあはれなりける

とよみ給ひけるこそ、いとほしけれ。

「二八八段」

又小野殿の母うへこそは、普門寺といふ所に八講しけるを聞きて、又の日小野殿に人々集りて、あそびし、文つくりけるに、

薪こることはきのふにつきにしを今日はをのえこにくたさん

と詠み給ひけんこそめでたけれ。ここもとは打聞になりぬるなめり。

「二八九段」

また業平が母の宮の、いよく見まくとの給へる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけんこそ思ひやられる。

「二九〇段」

をかしと思ひし歌などを、草紙に書きておきたるに、下種のうち歌ひたるこそ心憂けれ。よみにもよむかし。

「二九一段」

よろしき男を、下種女などの譬めて、「いみじうなつかしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしるるはなかくよし。下種にほめらるるは女だにわるし。また譬むるままにいひそこなひつるものをば。

「二九二段」

左右の衛門の尉を判官といふ名につけて

「二九三段」

大納言殿まあり給ひて、文の事など奏し給ふに、例の夜いたう更けぬれば、御前なる人人、一二人づつづせて、御屏風几帳の後などに、みな隠れふしぬれば、唯一人になりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つと奏するなり。「明け侍りぬなり」とひとりこつに、大納言殿、「今更におほとのもりおはしますよ」とて、寝べきものにも思したらぬを、うたて何しにさ申しつらんと思へども、又人のあらばこそはまぎれもせめ。

うへの御前の柱に寄りかかりて、少し眠らせ給へるを、「かれ見奉り給へ、今は明けぬるに、かくおほとのもるべき事かは」と申させ給ふ。「實に」など宮の御前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬほどに、長女が童の、鶏を捕へて持ちて、明日里へ往かんといひて隠し置きたりけるが、いかげしけん、犬の見つけて追ひければ、廊の先に逃げ往きて、恐しう泣きののしるに、みな人起きなどしぬなり。うへもうち驚かせおはしまして、「いかにありつるぞ」と尋させ給ふに、大納言殿の、聲明王の眠を驚すといふ詩を、高ううち出し給へる、めでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も大になりぬ。「いみじき折の事かな」と宮も興せさせ給ふ。なほかかる事こそめでたけれ。

又の日は、夜の御殿に入らせ給ひぬ。夜半ばかりに、廊へ出でて人呼べば、「あるか、われ送らん」との給へば、裳唐衣は屏風にうち懸けていくに、月のいみじう明くて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫の半ふみくまれて、袖をひかへて、「たふるな」といひて率ておはするまに、「遊子なほ残の月に行けば」と誦し給へる、又いみじうめでたし。「かやうの事めでたふ」とて笑ひ給へど、いかでか、猶いとをかしきものをば。

「二九四段」

僧都の君の御乳母のままと、御匣殿の御同に居たれば、男ある板敷のもと近く寄り来て、「辛いめを見候ひつる。誰にかはつれへ申し候はんとてなん」と泣きぬばか

りの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまに物へまかりたりし間に、きたなく侍る所の焼けはべりにしかば、日ごろは寄居蟲のやつに、人の家に尻をさし入れてなん侍ふ。既寮の御秣積みて侍りける家よりなん、出でまつて来て侍るなり。ただ垣を隔てて侍れば、よどのに寝て侍りける童もほとく焼け侍りぬべくなん、いささか物もとうで侍らず」などいひ居る。御匣殿も聞き給ひて、いみじう笑ひ給ふ。

みまくさをもやすばかりの春のひによどのさへなど残らざるらん

と書きて、「これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひののしりて、「このおはする人の、家の焼けたりとていとほしがりて給ふめる」とて取らせたれば、「何の御短策にか侍らん、物いくらばかりにか」といへば、「まつよめかし」といふ。「いかでか、片目もあき仕うまつらでは」といへば、「人にも見せよ、只今召せば、頓にてうへへ参るぞ。さばかりめでたき物を得ては、何をか思ふ」とて皆笑ひ惑ひてのぼりぬれば、「人に見せつらん。里にいきて、いかに腹立たん」など、御前に参りて、ままの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも、「なかかく物ぐるほしからん」とて笑はせ給ふ。

「二九五段」

男は女親なくなりて、親ひとりある、いみじく思へども、わづらはしき北の方の出で来て後は、内にも入れられず、装束などの事は、乳母、また故上の人どもなどしてせさす。

西東の對のほどに、客人にもいとをかしう、屏風障子の繪も見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほど、口惜しからず、人々も思ひたり。うへにも御氣色よくて、常に召しつ、御あそびなどのかたきには、思しめしたるに、なほ常に物なげかしう、世のなかにあはぬ心地して、すきくしき心ぞ、かたはなるまであるべき。

上達部のまたなきに、もてかしつかれたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事をもちかたらひ、慰め所なりける。「定澄僧都に桂なし、すいせい君に袖なし」といひけん人もこそをかしけれ。「まごこや、下野にくだる」といひける人に、おもひだにかからぬ山のさせも草たれかいぶきの里は告げしぞ

「二九六段」

ある女房の、遠江守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人をかたらふと聞きて恨みければ、「親などもかけて誓はせ給ふ。いみじき虚言なり、夢にだに見ずとなんいふ。いかがいふべき」といふと聞きて、

誓へきみ遠つあふみのかみかけてむげに瀆名のはし見ざりきや

「二九七段」

「便なき所にて人に物をいひけるに、胸のいみじうはしりける、なかくはあ  
る」といひける答に、

逢坂はむねのみつねにはしり井のみつくる人やあらんと思へば

「一本六」

女のうはぎは 薄色。葡萄染。萌黄。さくら。紅梅。すべて薄色の類。

「一本七」

唐衣は あかいろ。ふぢ。夏はふたあゑ。秋は枯野。

「一本八」

裳は 大海。しびら。

「一本九」

汗衫は 春は躑躅、櫻。夏は青朽葉、朽葉。

「一本十」

織物は むらさぎ。しろぎ。萌黄に柏葉織りたる。紅梅もよけれども、なほ見  
ざめこよなし。

「一本十一」

紋は あふひ。かたはみ。

夏つすもの、片つ方のゆだけ著たる人こそにくけれど、數多かさね著たれば、ひ  
かれて著にくし。綿など厚きは、胸などもきれて、いと見ぐるし。ませて著るべ  
き物にはあらず。なほ昔より、さまよく著たるこそよけれ。左右のゆだけなるは  
よし。それもなほ女房の装束にては、所せかんめり。男の數多かさぬるも、片つ  
かた重くぞあらんかし。

清らなる装束の、織物、つすものなど、今は皆さこそあんめれ。今様に又さま  
よき人の著給はん、いと便なきものぞかし。かたちよき公達の、彈正にておはす  
る、いと見ぐるし。宮の中將などの口惜しかりしかな。

「ころづきなきもの 物へゆき、寺へも詣つる日の雨。使ふ人の我をばおぼさ  
ず、「某こそ只今の人」などいふをほの聞きたる。人よりはなほ少しくしと思ふ  
人の、推量事うちし、すするなる物恨し、我かしこげなる。心あしき人の養ひたる  
子、さるはそれが罪にはあらねど、かかる人にしもと覺ゆる故にやあらん。「數多  
あるが中に、この君をば思ひおとし給ひてや、にくまれ給ふよ」などあららかに  
いふ。兒は思ひも知らぬにやあらん、もとめて泣き惑ふ、心づきなきなめり。お  
となになりても、思ひ後見もて騒ぐほどに、なか／＼なる事こそおほかんめれ。  
わびしくにくき人に思ふ人の、はしたなくいへど、添ひつきてねんころがる。い  
ささか心あしなどいへば、常よりも近く臥して、物くはせ、いとほしがり、その

事となく思ひたるに、まつはれ追従し、とりもちて惑ふ。

初瀬に詣でて局に居たるに、あやしき下種どもの、後さしまぜつつ、居竝みたるけしきこそ、ないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐しきに、樽階をのぼり困じて、いつしか佛の御顔を拜み奉らんと、局に急ぎ入りたるに、養蟲のやつなるものの、あやしき衣著たるが、いとにくき

立居額づきたるは、押し倒しつへき心地こそすれ。いとやんごとなき人の局ばかりこそ、前はらひあれ、よろしき人は、制しわづらひぬかし。たのもし人の師を呼びていはすれば、「足下ども少し去れ」などいふ程こそあれ、歩み出でぬれば、おなじやうになりぬ。

四位五位は冬、六位は夏。宿直すがたなども、品こそ男も女もあらまほしきことなめれ。家の君にてあるにも、誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使人ゆきて、おのづからいふべかめり。ましてまじらひする人はいとこよなし。猫の土にありたるやつにて。工匠の物くふこそいと怪しけれ。新殿を建てて、東の對だちたる屋を作るとて、工匠ども居竝みて物くふを、東面に出で居て見れば、まつ持てくるや遅きと、汁物取りて皆飲みて、土器はついすゑつつ、次にあはせを皆くひつれば、おものは不用なめりと見るほどに、やがてこそ失せにしか。一三人居たりし者、皆させしかば、工匠のさるなめりと思ふなり。あなもたいなな事どもや。

物語をもせよ、昔物語もせよ、さかしらに答うちして、こと人どものいひまぎらはすいと憎し。

女房のまぬりまかンでするには、車を借る折もあるに、こころよそひしたる顔にうちひて貸したるに、牛飼童の、例の牛よりもまにうちひて、いたう走り打つも、あなうたたと覺ゆかし。男どもなどの、物むづかしげなる氣色にて、「いかで夜更けぬさまに、追ひて歸りなん」といふは、なほ主の心おしはかられて、頓の事なりと、又いひ觸れんとも覺えず。業遠朝臣の車のみや、夜中あかつ

きわかず人の乗るに、聊さる事なかりけん、よくぞ教へ習はせたりしか。道に逢ひたりける女車の、深き所におとし入れて、え引き上げて、牛飼のはらだちければ、わが従者してうたせさへしければ、まして心のままに、誠めおきたるに見えたり。

清げなるわかき人の、直衣も袍も狩衣も、いとよくて、きぬがちに、袖口あつく見えたるが、馬に乗りて往くままに、供なるをのこ、たて文を、目をそらにて取りたるこそをかしけれ。

前の木だち高う庭廣き家の、東南の格子どもあげ渡したれば、涼しげに透きて見ゆるに、母屋に四尺の几帳立てて、前に圓座をおきて、三十餘ばかりの僧の、いとにくげならぬが、薄墨の衣、羅の袈裟など、いとあざやかにうさうぞきて、香染の扇うちつかひ、千手陀羅尼讀み居たり。物怪にいたうなやむ人にや、うつすべき人とて、おほきやかなる童の、髪など麗しき、生絹の單、あざやかなる袴長く著なして、あざり出でて、横ざまに立てたる三尺の几帳の前に居たれば、外ざまにひねり向きて、いとほそ、にほやかなる獨結を取らせて、ををと目うち塞ぎて讀む陀羅尼も、いとたふとし。顯證の女房あまた居て、集いまもへたり。久しくあらでふるひ出でぬれば、もとの心失ひて、行ふままに隨ひ給へる護法も、げにたふとし。兄の袈きたる、細冠者どもなどの、後に居て團扇するもあり。皆たふとがりて集りたるも、例の心ならば、いかに恥しと惑はん。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、附人の知人などは、らうたく覺えて、几帳のもと近く居て、衣ひきつくるひなどする程に、よろしとて、御湯など北面に取り次ぐほどをも、わかき人々は心もとなし。盤も引きさげながらいそいでくるや。單など清げに、薄色の裳など萎えかかりてはあらず、いと清げなり。申の時にぞ、いみじうことわりいせなどして許しつ。「几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出でにけるかな。いかなる事ありつらん」と恥しがりて、髪を振りかけてすべり入りぬれば、しばしとどめて、加持少して、「いかに、さわやかに給へりや」とてうち笑みたるも恥しげなり。「しばし侍ふべきを、時のほどにもなり侍りぬべければ」とまかり申して出づるを、「しばし、ほうちはうたう參らせん」などいふを、いみじう急げば、所につけたる上臈とおほしき人、簾のもとにあざり出でて、「いと嬉しく立ちよらせ給へりつるしに、

いと堪へがたく思ひ給へられつるを、只今おこたるやうに侍れば、かへすく悦び聞えさす。明日も御暇の際には、物せさせ給へ」などいひつ。いとこつねき御物怪に侍るめるを、たゆませ給はざらんなんよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなん、悦び申し侍る」と、詞すくなにて出づるは、いと尊きに、佛のあらはれ給へるとこそ覺ゆれ。

清げなる童の髪ながき。また大やかなるが、髯生ひたれど、思はずに髪づるはしき、又したたかに、むくつけげなるなど多くて、いとなげにて、ここかしこに、やんごとなきおぼえあるこそ、法師もあらまほしきわざなめれ。親などいかに嬉しからんこそ、おしはからるれ。

ものくらうなりて、文字もかかれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書きはてばや。この草紙は、目に見え、心に思ふ事を、人やは見んずと思ひて、徒然なる里居のほどに、書き集めたるを、あいなく、人のため便なきいひ過しなどしつべき所々もあれば、きよつかくしたりと思ふを、涙せきあへずこそなりにけれ。宮の御前に、内大臣の奉り給へりけるを、「これに何を書かまし。うへの御前には、史記といふ文を書かせ給へる」などの給はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよや何やと、つきせずおほかる紙の数を、書きつくさんとせしに、いと物おぼえぬことぞおほかるや。大かたこれは世の中にかしき事を、人のめでたしなど思ふべき事、なほ選り出でて、歌などを、木、草、鳥、蟲をいひ出したらばこそ、思ふほどよりはわろし、心見えなりともそしられめ。ただ心ひとつに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみくくなるべき耳をも聞かべきものかと思ひしに、はづかしきなども、見る人はの給ふなれば、いとあやしくぞあるや。實にそれもことわり、人の憎むをもよしといひ、警むるをもあしといふは、心の程こそおしはからるれ。ただ人に見えけんぞなたきや。

いとほしげなきもの 人よみて取らせたる歌の褒めらるる、されどそれはよし。遠きありきする人の、つきつき縁尋ねて文えんといはすれば、知りたる人の許等閑にかきて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事もとらせて無徳

にいひなしたる。

とりもてるもの 傀儡のこととり。除目に第一の國得たる人。

湯は 七久里の湯。有馬の湯。玉造の湯。

きたなげなるもの 鼠の住處。翌朝手おそく洗ふ人。白きつきはな。すすばなくありく兒。油入るる物。雀の子。暑きほどに久しくゆあみぬ。衣の萎えたるは、いづれもくきたなげなる中に、練色の衣こそきたなげなれ。

乳母の男こそあれ、女はされど近くも寄らねばよし。男子をば、ただわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、いささかもこの御事に違ふものをば讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これがとがを心に任せていふ人もなければ、處得いみじきおももちして、事を行ひなどするよ。

ことなる事なき男の、ひきいれ聲して艶だちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする。ただなるだに、いとしも思はしからぬ人の、にくげことしたる。一人車に乗りて物見る男、いかなるものにかあらん、やんごとながらずとも、わかき男どもの物ゆかしう思ひたるなど、ひき乘せても見よかし。透影に唯一人かくよひて、心一つにまもりあたらんよ。

霧は 川霧。

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つかたにしどけなくすりひらめかし、勞多きになりたるが、ささしなどしたるこそ心もとなしと覺ゆれ。萬の調度はさるものにて、女は鏡硯こそ心のほど見ゆるなめれ。おきくちのはぎめに、塵など打ち捨てたるさま、こよなしかし。男はまして文机清げに押し拭ひて、重ねならずば、ふたつ懸子の硯のいとつきつきしう、蒔繪のさまもわざとならねどをかして、墨筆のさまなども、人の目とむばかりしたるこそ、をかしけれ。とあれどかかれどおなじ事とて、黒箱の蓋も片方おちたる硯、わづかに墨のみたる、塵のこの世には拂ひがたげなるに、水うち流して、青磁の龜の口おちて、首のかぎり穴のほ



ど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せ、手ならひをも文をも書くに、「その筆な使ひたまひそ」と言はれたらんこそ、いとわびしかるべけれ。うち置かんも人わろし、猶つかふもあやにくなり。さ覺ゆることも知りたれば、人の爲るもいでは見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かかまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こはものややりと、假名に細櫃の蓋などに書きちらして、横ざまに投げ置きたれば、水に頭はさし入れてふせるも、にくき事ぞかし。されどさいはんやは。人の前に居たるに「あなくら、奥より給へ」といひたるこそ、又わびしけれ。さしのぞきたるを見つけては、驚きいはれたるも。思ふ人の事にはあらずかし。

めづらしといふべきことにはあらねど、文こそ猶めでたきものなれ。遥なる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならんと思ふに、文を見れば、唯今さし向ひたるやうにおぼゆる、いみじきことなりかし。わが思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行きつかざらめど、こころゆく心地こそすね。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、くれふたがる心地せまし。よろづの事思ひく、その人の許へとてこま／＼と書き置きたれば、おぼつかなさをも慰む心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかンめる、實にことわりなや。

行幸はめでたきもの、上達部、公たち車などのなきぞ少しさう／＼しき。